

兵庫県立大学  
看護学部・地域ケア開発研究所 紀要

---

第31巻 2024

# 目 次

## 総説

診断後から治療期における成人がん患者の情報ニーズに関する文献検討 …… 永島 志・川崎 優子 ……	1
造血器腫瘍患者の退院支援に関する国内外の文献検討 …… 松本 綾奈・川崎 優子 ……	13
— 造血器腫瘍患者の退院支援 —	
COVID-19パンデミックにおける	
看護学生のメンタルヘルスの不調に関する文献研究 …… 曲渕 時・丸 光恵 ……	29
— 4か国6件の質的研究より —	
2023年専任教員業績一覧 ……	47
兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要規程 ……	69
兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要投稿要綱	

# Contents

## Reviews

Literature Review of the Information Needs of Adult Cancer Patients from Post-Diagnosis through the Treatment Phase Kokoro Nagashima, Yuko Kawasaki .....	1
Domestic and International Literature Review Regarding Hospital Discharge Support for Patients with Hematopoietic Tumors — Hospital discharge support for patients with hematopoietic tumors — Ayana Matsumoto, Yuko Kawasaki .....	13
In the COVID-19 Pandemic A Literature Review of Mental Health Illness among Nursing Students — From 6 qualitative studies from 4 countries — Yuki Magaribuchi, Mitsue Maru .....	29
The List of Publications and Presentations in 2023 .....	47
Notes to Contributors .....	69

# 診断後から治療期における成人がん患者の情報ニーズに関する文献検討

永島 志<sup>1)</sup>, 川崎 優子<sup>2)</sup>

## 要 旨

### 【目的】

国内外の先行研究から、診断後から治療期にある結腸直腸がん、肺がん、胃がん、乳がん、前立腺がんの成人がん患者の情報ニーズの要点を整理し、今後の看護支援への示唆を得る。

### 【方法】

データベースは医学中央雑誌web版, CINAHL (Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature), MEDLINE Completeを用い、2012年から2022年10月までの10年間に指定した。「がん」AND「情報ニーズ」に、結腸直腸がんor肺がんor胃がんor乳がんor前立腺がんを追加して検索し、ハンドサーチと合わせて23文献を分析対象とした。

### 【結果】

乳がん患者を対象とした文献が最も多く、研究デザインは質的研究が主であった。診断後から治療期における成人がん患者の情報ニーズとして、14のサブカテゴリと、【疾患と治療の意味を理解できる情報】【疾患や治療による影響を予測できる情報】【現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報】の3つのカテゴリーに分類された。

### 【結論】

診断後から治療期における成人がん患者は、個々の疾患や病期、治療、身体状況に加えて、価値観や生活上の習慣、仕事、家族・パートナーの状況に応じた情報ニーズを持つことが示された。これはその人らしさにも置き換えられ、看護師はがん患者のその人らしさに基づく、より詳細で個別的な情報ニーズを認識し、情報提供または適切な情報源につなぐ役割を果たす必要性が示唆された。また、国外研究が主であり、文化的背景や医療提供内容によって情報ニーズは異なる可能性が示唆された。

キーワード：情報ニーズ, がん患者, 文献検討

---

1) 兵庫県立大学大学院看護学研究科 博士前期課程がん看護学専攻

2) 兵庫県立大学看護学部 治療看護学

## I. 諸 言

がん患者は、がんと診断されたこと、疾患自体、手術療法や薬物療法、放射線療法などの治療により、短期的、長期的な影響を受け、身体的、精神心理的、社会的に様々な課題を抱える (Anderson et al., 2021; Denlinger et al., 2009; El-Shami et al., 2015)。その中で、診断期、治療期には、がんや治療に伴う症状、生活への影響に対するセルフケアの獲得、コーピング、意思決定のため、自分自身に関連する様々な情報を求めること (橋本ら, 2018; Recio-Saucedo et al., 2018; 笹井ら, 2016; Spittler et al., 2012)、希望を見出すための肯定的な情報を探すことが報告されている (Germei et al., 2014)。情報ニーズを満たすことはセルフケア獲得や意思決定への重要な因子であることから (Magalhaes et al., 2020)、医療者はがん患者の情報ニーズを認識し、情報提供することが重要といえる。

新たながん治療の開発により治療の選択肢が増え、治療の特徴や有害事象、生活への影響、対処方法に関する情報が溢れている。また、現状の課題として、がん患者の情報ニーズと医療者が把握しているニーズにはズレがあること、がん患者は必要な情報の提供を受けている実感が少ないことが報告されている (片岡ら, 2019; Sakai et al., 2020)。多種多様な情報がある環境におかれる人々の情報処理過程は、自分自身にとって理解しやすい形に再構成して認知し、かつ感情状態に整合的な情報が選択的に処理されるという特徴をもつことが報告されている (多鹿ら, 1992)。そのため、精神心理的影響が予測される診断後から治療期において、がん患者の情報ニーズに合わせた情報提供は重要である。

近年がん患者の情報ニーズについて調査した先行研究は多いが、診断後から治療期に焦点を当てたもの、文献検討した研究は限られている (金正ら, 2021; Tariman et al., 2014)。また、入院日数の短縮や外来治療の増加から、短い時間でがん患者の情報ニーズを認識し、支援することが求められる。診断や治療をどのように乗り越えることができたかは、その後のがんと向き合い方に影響するため (山内ら, 2014)、診断後から治療期の情報ニーズの要点を整理することは重要と考える。

本研究では、結腸直腸がん、肺がん、胃がん、乳が

ん、前立腺がんの患者を対象とする。わが国において罹患数が多いこと (国立研究開発法人国立がん研究センター, 2022年11月16日)、治療法が比較的多く治療選択において情報が必要となること、他のがん種と比べて5年生存率が高く経過が長いこと、情報が生活やその後の人生、Quality of life (以下QOL) に影響することが考えられ、情報ニーズを明らかにする意義が大きいと考える。

以上より、本研究では国内外の先行研究を対象に、診断後から治療期にある結腸直腸がん、肺がん、胃がん、乳がん、前立腺がんの成人がん患者の情報ニーズについて文献検討を行い、今後の看護支援への示唆を得ることとする。

## II. 研究の目的

国内外の先行研究から、診断後から治療期にある結腸直腸がん、肺がん、胃がん、乳がん、前立腺がんの成人がん患者の情報ニーズの要点を整理し、今後の看護支援への示唆を得る。

## III. 方 法

### 1. 用語の操作的定義

診断後から治療期にあるがん患者：がんと診断後から、手術療法や薬物療法、放射線療法など積極的治療を行っている時期にあるがん患者

情報ニーズ：自分の知識や経験では問題を処理できないと判断し、問題の処理、解決に役立つ情報を外部に求めようとする認識状態の中で意識的または無意識的に必要とする情報

### 2. 検索データベース

国内文献は医学中央雑誌web版、国外文献はCINAHL、MEDLINE Completeを用いて検索した。近年の情報ニーズの要点を整理するという目的で2012年から2022年10月までの10年間に発表された文献とした。

### 3. 検索キーワード

医学中央雑誌web版では、原著を指定、キーワードを

「がん」AND「情報ニーズ」と設定し、14件が検索された。CINAHL, MEDLINE Completeでは、抄録あり、査読ありを指定し、「cancer or neoplasms」AND「information needs」にがん種を追加して検索した。「colorectal cancer」147件、「lung cancer」120件、「gastric cancer」13件、「breast cancer」630件、「prostate cancer」183件が検索された。また、ハンドサーチで2件検索された。

#### 4. 分析対象文献の選定

適格基準は、①原著論文、②学会誌、③18歳以上のがん患者が対象、④がんの診断から治療期に関する事項が対象、⑤がん患者の情報ニーズの内容が記載、⑥結腸直腸がん、胃がん、肺がん、乳がん、前立腺がんの患者が対象であるものとした。検索された1109件のうち、重複文献289件を除いた820件の適格性を判定した。第1段階ではタイトル、抄録を確認して適格基準に沿ってスクリーニングを行い、第2段階として論文の内容を確認して適格基準に沿ってスクリーニングを行った(図1)。

#### 5. 分析方法

選定された文献から、以下の手順で分析を行った。

- 1) 文献毎に著者と出版年、国名、研究デザイン、対象者、治療状況、情報ニーズを抽出し表を作成した。
- 2) 情報ニーズの内容を分析し、類似性に沿ってサブカテゴリーに分類・命名し、さらにサブカテゴリーの類似性に沿ってカテゴリーに分類・命名した。

### IV. 結 果

文献23件を分析対象とした(表1)。

#### 1. 文献の概要

文献23件のうち、国内文献は1件であった。乳がん患者を対象とした文献が11件と最も多く、次いで結腸直腸がん患者4件、前立腺がん患者3件であり、胃がん患者は1件であった。肺がん患者のみを対象とした文献は選定されず、複数の臓器を対象とした文献は4件であった。

年数別の文献件数は、2012年2件、2014年4件、2015年3件、2017年1件、2018年4件、2019年1件、2020年4件、2021年3件、2022年1件であった。研究デザインは、質的記述的研究が12件と最も多く、横断的研究が7件、横断的・記述的研究が4件であった。

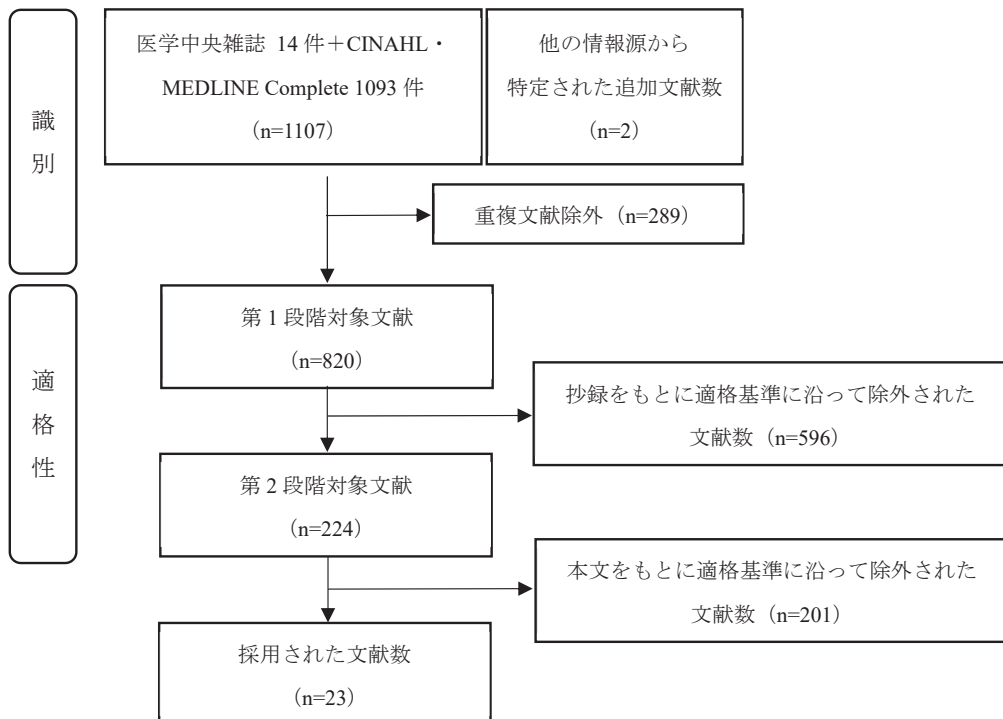


図1. 対象文献選定のフローチャート

表1. 診断後から治療期における成人がん患者の情報ニーズに関する先行研究の概要

番号	著者(出版年) [国名]	研究デザイン	対象者	治療状況
1	Blödt et al. (2018) [ドイツ]	質的記述的	前立腺がん, 乳がん, 結腸直腸がん患者127名	治療中または治療完了後 (診断後5年 以内47.2%, 5-10年38%, 10年以上 28%)
2	Taljaard et al. (2020) [南アフリカ]	質的記述的	局所進行性前立腺がん患者 9名	根治的放射線療法完了後
3	Mazzi et al. (2020) [イタリア]	横断的	stage0-IIIの女性乳がん患者 377名	手術後または術後治療中・後
4	Melhem et al. (2022) [ヨルダン]	横断的	乳がん, 結腸直腸がん患者 335名	治療中または治療完了後
5	Bei et al. (2015) [中国]	横断的	stage0-IVの女性乳がん患者 275名	治療前5.1%, 治療中78.5%, 治療完了後16.4%
6	Kemp et al. (2018) [オーストラリア]	質的記述的	女性進行乳がん患者21名	治療中
7	Ng et al. (2012) [シンガポール]	横断的	stage I -IVの乳がん, 結腸直 腸がん, 婦人科癌535名 (男性19.3%, 女性80.7%)	治療中または治療完了後 (診断後 1年以内73.8%, 1年以上26.2%)
8	Aunan et al. (2021) [ノルウェー]	質的記述的	前立腺がん患者16名	治療完了後
9	Uysal et al. (2018) [トルコ]	横断的 ・記述的	stage I -IVの女性乳がん患者 170名	治療中または治療完了後
10	Valero-Aguilera et al. (2014) [スペイン]	横断的 ・記述的	乳がん患者100名/泌尿器がん 患者169名 (前立腺72.2%, 膀胱19.4%, 腎臓8.3%)	治療中または治療完了後
11	Latifi et al. (2018) [イラン]	質的記述的	女性乳がん患者17名	手術後8-60カ月 (治療完了後または 術後化学療法中)
12	Legese et al. (2021) [エチオピア]	横断的	stage I -IVの女性乳がん患者 375名	治療中または治療完了後 (診断後3カ月-5年)
13	Slavova-Azmanova et al. (2019) [オーストラリア]	質的記述的	肺がん, 乳がん, 前立腺が ん, 結腸直腸がん患者40名 (男性22名, 女性18名)	治療完了後
14	Sakai et al. (2020) [日本]	横断的	女性乳がん患者207名	化学療法完了後5年以内
15	Ussher et al. (2012) [オーストラリア]	横断的 ・記述的	乳がん患者1335名 (女性99.8%)	治療完了後45.5%, 治療中45.6% (診断後3-9年)
16	Hanly et al. (2014) [オーストラリア]	質的記述的	前立腺がん患者21名	治療中または治療完了後5年以内
17	Lithner et al. (2015) [スウェーデン]	質的記述的	手術後の結腸直腸がん患者 16名 (男性10名, 女性6名)	退院後2か月以内
18	Salz et al. (2014) [アメリカ]	横断的 ・記述的	stage I -IIIの結腸直腸がん 患者175名	治療完了後6-24カ月以内
19	Kwok et al. (2015) [オーストラリア]	質的記述的	stage I -IIIの乳がん患者17名	化学療法開始12か月後
20	Kaiser et al. (2021) [ドイツ]	質的記述的	結腸直腸がん患者41名 (男性20名, 女性21名)	診断から4週間-36年 (5年未満20名, 5-10年12名, 10年以上9名)
21	Kwok et al. (2014) [オーストラリア]	質的記述的	中国系オーストラリア人の 女性乳がん患者23名	治療完了後 (診断後6カ月-4年)
22	Hardcastle et al. (2017) [オーストラリア]	質的記述的	結腸直腸がん患者24名 (男性11名, 女性13名)	治療完了後2年以内
23	Rha et al. (2020) [韓国]	横断的	stage I -IVの胃がん患者223名 (男性59.2%, 女性40.8%)	治療中または治療完了後3年以内

## 2. 分析結果

カテゴリーを **【】**, サブカテゴリーを **〔 〕** で示す. 情報ニーズの内容として, 14のサブカテゴリーに分類および命名し, **【疾患と治療の意味を理解できる情報】** **【疾患や治療による影響を予測できる情報】** **【現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報】** の3つのカテゴリーに分類および命名した (表2).

### 1) 【疾患と治療の意味を理解できる情報】

がんは深刻な病気か, なぜ治療が必要か (Blödt et al., 2018; Taljaard et al., 2020), 病期, 進行や再発の可能性 (Mazzi et al., 2020; Melhem et al., 2022), どのように病気が進行し転移するのか (Bei et al., 2015) といった〔疾患の病態を理解するための情報〕, あと何年生きることができるのか (Kemp et al., 2018; Ng et al., 2012), 同病者で長生きしている人はいるのか (Kemp et al., 2018), 治癒の可能性 (Aunan et al., 2021; Bei et al., 2015; Uysal et al., 2018; Valero-Aguilera et al., 2014), いつまで子どもへの母親役割を果たせるか (Latifi et al., 2018) といった〔残された時間を理解するための情報〕を求めている. また, 対象者の遺伝的素因の有無は不明であったが, 子どもを含む他の家族ががんを発症する可能性やがんになる遺伝的リスクがあるのか (Bei et al., 2018; Latifi et al., 2018; Legese et al., 2021; Ng et al., 2012) といった〔家族のがん発症リスクの情報〕へのニーズが示された. 治療に関して, 治療に使われる薬剤がどのように機能するのか, その選択理由, 治療の目的や根拠 (Slavova-Azmanova et al., 2019), 治療が効果的であると確信を持てる情報 (Aunan et al., 2021; Taljaard et al., 2020), 治療毎の短期的・長期的なリスクと利益 (Bei et al., 2018; Valero-Aguilera et al., 2014) といった〔提示された治療の理解につながる詳細な情報〕を求めている. また, 将来の治療と研究の見通し (Sakai et al., 2020), 現在の治療以外の有効な治療情報 (Uysal et al., 2018) といった〔他の有効な治療選択肢の情報〕も求めている.

### 2) 【疾患や治療による影響を予測できる情報】

治療による身体的魅力の変化, 性欲減退 (Latifi et al., 2018; Ussher et al., 2012), 月経の変化, 治療完了後に

妊娠できるか (Latifi et al., 2018) など妊孕性や性功能への影響 (Melhem et al., 2022; Taljaard et al., 2020), 腸機能の変化や尿失禁など排泄機能への影響 (Hanly et al., 2014; Lithner et al., 2015; Salz et al., 2014), 体重の増減への影響 (Aunan et al., 2021; Lithner et al., 2015), 治療中だけでなく治療完了後に身体に起きる影響 (Taljaard et al., 2020), また, それらの身体への影響は改善するのか (Latifi et al., 2018; Uysal et al., 2018) といった〔短期・長期的な身体的機能への影響が具体的に理解できる情報〕を求めている. また, 治療費だけでなくそれ以外にかかる費用 (Sakai et al., 2020) や, 治療に伴う衰弱により生活が妨げられる可能性 (Latifi et al., 2018), 手術後の痛みや縫合により生活の中で感じる不便さ (Slavova-Azmanova et al., 2019), 薬物療法の副作用により予想される食事の変更や制限 (Kwok et al., 2015; Latifi et al., 2018), 睡眠の質, 体力の低下 (Aunan et al., 2021), それらによる入浴や運動, 趣味の継続への影響 (Latifi et al., 2018; Mazzi et al., 2020) といった〔疾患と治療による日常生活の制限を予測できる情報〕を求めている. そして, 日常生活の制限に関連して, 治療による日常的な家事の継続への影響 (Latifi et al., 2018; Mazzi et al., 2020), 接客による感染リスクなど治療による副作用やストーマが仕事に及ぼす影響 (Kaiser et al., 2021; Mazzi et al., 2020), 性功能障害, 排泄障害が家族やパートナーとの関係性 (Aunan et al., 2021; Melhem et al., 2022; Ussher et al., 2012), 性生活 (Latifi et al., 2018; Valero-Aguilera et al., 2014) に及ぼす影響, 実際に同病者はどのように影響を受けているか (Aunan et al., 2021) といった〔社会的役割への影響を理解できる情報〕を求めている. 回復にどのくらい時間がかかり, いつ仕事や通常の活動に戻れるか (Lithner et al., 2015; Sakai et al., 2020), いつから性生活を再開して良いか (Latifi et al., 2018) といった〔回復までにかかる時間の情報〕も求めている.

### 3) 【現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報】

治療に関連して, 普段の習慣に合う制吐剤以外の吐き気の予防, 軽減方法 (Kwok et al., 2014) や副作用を最小限に抑える食品 (Kwok et al., 2015), 感染を防ぐた

表2. 情報ニーズの分類

カテゴリー	サブカテゴリー	抽出された情報ニーズ(文献番号)
疾患と治療の意味を理解できる情報	疾患の病態を理解するための情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ治療を行うべきか(1, 2), がんは深刻な病気か(2, 4)</li> <li>手術後の化学療法をすぐに始めたほうが良い病態か(3)</li> <li>がんの病期と進行・再発の可能性(3, 4)</li> <li>どのように病気が進行し転移するか(5)</li> </ul>
	残された時間を理解するための情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>治癒の可能性はあるかどうか(5, 8, 9, 10)</li> <li>同病者で長生きしている人はいるのか(6)</li> <li>自分自身の状態に対する予後, あと何年生きられるか(6, 7, 10)</li> <li>いつまで子どもへの母親役割を果たせるか(11)</li> </ul>
	家族のがん発症リスクの情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもを含む他の家族ががんを発症する可能性(5, 11, 12)</li> <li>自分の家族ががんになる遺伝的リスク(7, 11, 12)</li> </ul>
	提示された治療の理解につながる詳細な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>治療の有無で寿命はどのくらい異なるか, 治療は回復への道りとなるか(1, 11)</li> <li>治療が効果的であると確信を持てる情報(2, 8)</li> <li>治療による不快な副作用・晩期有害事象(4, 8)</li> <li>治療による短期的・長期的なリスクと利益(5, 10)</li> <li>提示された治療が最新で信頼できるものか, 治療に使われる薬剤がどのように機能するのか, 選択された理由に関する詳細な情報, 治療の目的や根拠, 治療を早期にしたほうがよい理由(13)</li> <li>化学療法とは何か, どのように受けるのか, 倦怠感や吐き気, 脱毛など副作用の情報, 出現の可能性(12, 17)</li> </ul>
	他の有効な治療選択肢の情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在の治療以外の有効な治療情報(9)</li> <li>将来の治療と研究の見通し(14)</li> </ul>
疾患や治療による影響を予測できる情報	短期・長期的な身体的機能への影響が具体的に理解できる情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>治療完了後に身体に何が起きるのか(2)</li> <li>セクシュアリティや妊孕性への影響(2, 4, 11, 15)</li> <li>ホルモン治療の副作用である体重増加(8), 手術による体重への影響(17)</li> <li>治療完了後に合併症が改善するか(9, 11), 月経の変化, 妊娠できるか(9, 11)</li> <li>膣乾燥, ホットフラッシュ, 性欲減退(15), ボディイメージと外見など身体的魅力の変化(4, 10, 11, 15)とそれに関わる同病者の状況(10)</li> <li>疾患や手術を受けることによる尿失禁と性功能への影響(16)</li> <li>倦怠感や腸の症状の持続など予想される問題(17, 18)</li> </ul>
	疾患と治療による日常生活の制限を予測できる情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活や人生にどのような影響を与えるか(1, 2, 12), 実際の同病者の状況(1)</li> <li>食事制限はあるのか, 軽い運動とは何か, 入浴は可能か, 日常的な運動や趣味は続けられるか(3, 11)</li> <li>睡眠の質, 体力の低下の可能性(8)</li> <li>治療に伴う衰弱により生活が妨げられる可能性(11)</li> <li>手術後の痛みや縫合により生活の中で感じる不便さ(13)</li> <li>抗がん剤治療の副作用, 性功能障害や尿失禁が日常生活に及ぼす影響(13, 16)</li> <li>治療費だけでなくそれ以外にかかる費用(14)</li> <li>副作用の悪心や食欲不振, 味覚や嗅覚, 口腔感覚の変化による治療中に予想される食事の変更(19)</li> </ul>
	社会的役割への影響を理解できる情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>接客による感染リスク, 化学療法後に気分が悪くならず仕事に行けるか(3)</li> <li>日常的な家事の継続(3, 11)</li> <li>家族や仕事, 人間関係への影響(4)</li> <li>性功能障害や排泄障害がパートナーとの関係性, セクシュアルWell-being, 社会的役割に及ぼす影響(8, 15), 実際の同病者の状況(8)</li> <li>性生活への影響(10, 11)</li> <li>ストーマが仕事や長距離移動に及ぼす影響(20)</li> </ul>
	回復までにかかる時間の情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>いつから性生活を再開して良いか(11)</li> <li>回復期間(14)</li> <li>回復にどのくらい時間がかかり, いつ仕事や通常の活動に戻れるか(17)</li> </ul>

表2. 情報ニーズの分類 (続き)

カテゴリー	サブカテゴリー	抽出された情報ニーズ(文献番号)
	治療を乗り越えるための症状管理の情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>術後または化学療法中の自宅でのセルフケア方法(4, 9)</li> <li>治療の副作用である高血圧を合併しない方法, 高血圧をコントロールできる方法, 感染を防ぐためにどうすべきか(11)</li> <li>副作用を予防する方法, 対処方法, 医療者に報告するべき副作用(12)</li> <li>痛みの緩和の方法(14)</li> <li>化学療法の副作用を最小限に抑えるための食品の種類や摂るべき栄養素など, 治療による副作用の状況に合わせた具体的な食事(19)</li> <li>吐き気に対して制吐剤だけでなくどのような自然療法が役に立つか, 吐き気の管理として控えるよう伝えられる食事を摂取する習慣のない人はどうすればよいか(21)</li> <li>化学療法中に自分の体調が改善するためにできること(23)</li> </ul>
	治療の効果を高めるための情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>化学療法中に食べない方がよい食事, 食事制限, 治療効果を高めるために何を食べるべきかという具体的で広い食事の情報(2, 6, 9)</li> <li>運動の必要性(2), 最良の結果を得られる運動方法を含めた生活習慣の改善方法(2, 6)</li> </ul>
現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報	生活の中での困りごとに対処するための情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>脱毛時の仕事の継続方法(3)</li> <li>性欲喪失に対処する方法, 効果がある可能性のある性的リハビリテーション(9, 16)</li> <li>パートナー向けの情報, 医療専門家との話し合い方, 避妊, セックスアイド, パートナーとのコミュニケーション, 同性カップルのセクシュアルWell-being(15), パートナーと性行為の代わりに親密さを維持する方法(16)</li> <li>ストーマのある人は同病者の経験を含めた器具交換のときに便利な衣服の種類, 排便コントロールのための食事内容, 悪臭や音への対処方法(20)</li> <li>失禁やコントロールできない排便に対して, どの食事が腸の動きにどのように影響するかを理解し対処する方法(20, 22)</li> </ul>
	回復を促進するための情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>回復を促進するためのライフスタイルの改善方法(7, 18)</li> <li>回復を補助する, 家族と食事を分けずにできる食習慣の改善方法(11), 健康的な食事の選択(10, 11, 21)</li> <li>社会に復帰するための仕事に関連するリハビリテーション(14)</li> <li>何を食べて何を飲むべきか(17), 健康維持のために, 必要な栄養素だけでなく具体的な食品, 個人毎の適切な食事量や食事内容と根拠(22)</li> <li>運動では個人毎の体重目標や適切な身体活動レベル, 具体的なトレーニングや運動方法(17, 22)</li> </ul>
	利用可能な社会制度と支援の情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>働けなくなった時の補償制度(3)</li> <li>正しい情報があるwebサイトなど支援へのアクセス方法, 通院治療のための宿泊費の負担など, 治療費やその他の費用に関する利用可能な制度(6)</li> <li>がん患者が利用できるサービス, がん患者が利用できる支援団体(7)</li> <li>どこで支援を受けられるか, 相談場所(15), 病状, 治療, 経過観察のすべてに関する自分や生活への影響を相談できる場所(23)</li> </ul>

めにどうすべきか, 治療の副作用である高血圧をコントロールする方法 (Latifi et al., 2018) といった〔治療を乗り越えるための症状管理の情報〕を求めていた。また, 化学療法中に食べるべき具体的な食品や食べてはいけない理由, 食事制限 (Kemp et al., 2018 ; Taljaard et al., 2020 ; Uysal et al., 2018) などの食習慣の改善方法, 治療中の運動の必要性 (Taljaard et al., 2020) や最良の結果を得る生活方法 (Kemp et al., 2018) といった〔治療の効果を高めるための情報〕を求めていた。日常生活への影響に関連して, 性欲喪失など性機能障害や排泄障

害がある中でのパートナーとのコミュニケーション, 情報提供の方法 (Hanly et al., 2014 ; Ussher et al., 2012) や医療者との話し合い方 (Ussher et al., 2012), 同病者の実際の対処の状況を含むストーマの器具交換時に便利な衣服の種類や悪臭, 音への対処方法 (Kaiser et al., 2021), 脱毛時の仕事の継続方法 (Mazzi et al., 2020) といった〔生活の中での困りごとに対処するための情報〕を求めていた。また, 健康維持のため何を食べて何を飲むべきか (Lithner et al., 2015) といった個人毎の適切な食事量, 食事内容と根拠 (Hardcastle et al.,

2017 ; Kwok et al., 2014 ; Latifi et al., 2018), 個人毎の体重目標, 適切な身体活動レベル (Hardcastle et al., 2017) と具体的な運動方法 (Hardcastle et al., 2017 ; Lithner et al., 2015), ライフスタイルの改善方法 (Ng et al., 2012 ; Salz et al., 2014), 社会に復帰するための仕事に関連するリハビリテーション (Sakai et al., 2020) といった〔回復を促進するための情報〕へのニーズが示された。さらに, 働けなくなった時 (Mazzi et al., 2020) や金銭的負担の軽減 (Kemp et al., 2018) のために利用可能な制度や正しい情報があるwebサイト (Kemp et al., 2018), がん患者が利用できるサービス, 支援団体 (Ng et al., 2012), セクシュアリティなどがんに関連することを相談できる場所 (Rha et al., 2020 ; Ussher et al., 2012) といった〔利用可能な社会制度と支援の情報〕へのニーズが示された。

## V. 考 察

診断後から治療期における成人がん患者は, 【疾患と治療の意味を理解できる情報】【疾患や治療による影響を予測できる情報】【現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報】への情報ニーズがあることが明らかになった。各カテゴリーの特徴として, 【疾患と治療の意味を理解できる情報】では, 患者自身と家族が置かれている状況の理解につながる情報であることが挙げられる。【疾患や治療による影響を予測できる情報】では, 患者自身と家族の生活や人生への影響を認識できること, 具体的なイメージにつながる情報であることが挙げられる。【現状や将来の生活をより良くする対処につながる情報】では, より個別的で具体的な状況や目的に対する実用的な情報であることが挙げられる。また, 共通する特徴として, 個々の疾患や病期, 治療, 身体状況に加えて, 価値観や生活上の習慣, 仕事, 家族・パートナーの状況に応じた情報ニーズを持つことが示された。

2013がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査報告書では, がん体験者が求める情報や支援として, 診療情報, 同病者の体験談や交流, 症状や機能障害等に関する情報と具体的な対処方法, 医療費や生活費等の経済的負担がそれぞれの分類で最も高いニーズであることが報告されている (「がんの社会学」に関する研究グループ,

2016年9月)。これらのニーズは本研究における結果と一致しており, 医療者目線ではない, 患者が情報を求める意図と情報ニーズの具体的な内容が示されたといえる。一方で, 今回の対象文献は国外研究がほとんどであった。国内の治療中の乳がん患者を対象とした研究では, 疾患や治療, 副作用の情報への関心が高いことは共通しているが, 社会生活やセルフケア, 性的魅力, 遺伝的リスクに関する情報への関心は低いという報告もある (Azuma et al., 2021)。文化的背景や医療提供内容など様々な要因が情報ニーズに影響することが考えられ, 国内での情報ニーズの具体的な内容の調査が必要であるといえる。

また, Sakai et al. (2021) は, 患者は提供が不十分であると感じている情報ニーズに対して, 医師や看護師はほとんどの項目で支援の提供ができていると認識していることを報告している。その一因として, 患者の背景や現状に基づく個別的で具体的な情報ニーズの認識とそれに伴う情報提供の不足が考えられる。患者の背景と現状とは, 本研究の結果から, 病状や治療, 身体状況の他に価値観や生活上の習慣, 仕事, 家族・パートナーの状況を示すが, これはその人らしさにも置き換えられる。その人らしさとは, 「内在化された個人の根幹となる性質で, 他とは違う個人の独自性を持ち, 終始一貫している個人本来の姿, 他者が認識する人物像であり, 人間としての尊厳が守られた状態」(黒田ら, 2017, p.145) と定義され, 生活上の習慣や他者との関係性, 趣味, 生き方, 事象への情緒的反応から捉えられる (黒田ら, 2017)。つまり, 情報ニーズは病状や治療の他に, その人らしさに基づくものであり, それに沿った情報提供が必要であることが示されたと考えられる。

その人らしさに基づく情報を提供するために, 看護師はがん患者個々の疾患や病期, 治療, 身体状況に加えて, 価値観や生活上の習慣, 仕事, 家族・パートナーの状況を把握することで, より詳細で個別的な情報ニーズを認識し, 情報提供または適切な情報源につなぐ役割を果たす必要性が示唆された。

## VI. 研究の限界

本研究では, 診断後から治療期における成人がん患者

の情報ニーズについて文献検討を行ったが、患者の身体的・心理的・社会的状況や病期、診断からの期間、治療状況などを考慮した分析には至らず、これらが異なることで情報ニーズが異なることが予測されることから、本研究で得られた結果が十分な妥当性・信頼性を得られていない可能性がある。要因として対象者の属性を限定した先行研究が少ないこと、正確な治療状況が示された先行研究が少ないことが挙げられる。また、本研究は国外

研究が主であったが、文化的背景や医療提供内容が異なることから、具体的な看護支援の検討につなげるために今後国内のがん患者を対象とした病期、治療状況毎の情報ニーズの調査が必要と考える。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文 献

- Anderson, R.A., Clatot, F., Demeestere, I., et al. (2021). Cancer survivorship: Reproductive health outcomes should be included in standard toxicity assessments. *European Journal of Cancer*, 144, 310-316. doi: 10.1016/j.ejca.2020.11.032
- Aunan, S. T., Wallgren, G. C., Hansen, B. S. (2021). The value of information and support; Experiences among patients with prostate cancer. *Journal of Clinical Nursing*, 30(11-12), 1653-1664. doi: 10.1111/jocn.15719
- Azuma, K., Kawaguchi, T., Yamaguchi, T., et al. (2021). Development of Japanese versions of the control preferences scale and information needs questionnaire: Role of decision-making and information needs for Japanese breast cancer patients. *Patient Preference and Adherence*, 15, 1017-1026. doi: 10.2147/PPA.S295383
- Bei, A. W. Y., Lai, M. T., Choi, K. C., et al. (2015). Factors in the prioritization of information needs among Hong Kong Chinese breast cancer patients. *Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing*, 2(3), 176-185. doi: 10.4103/2347-5625.163620
- Blödt, S., Kaiser, M., Adam, Y., et al. (2018). Understanding the role of health information in patients' experiences: Secondary analysis of qualitative narrative interviews with people diagnosed with cancer in Germany, *BMJ Open*. 8(3), 1-9. doi: 10.1136/bmjopen-2017-019576
- Denlinger, C. S., Bersewick, A. M. (2009). The challenges of colorectal cancer survivorship. *Journal of The National Comprehensive Cancer Network*, 7(8), 883-894. doi: 10.6004/jnccn.2009.0058
- El-Shami, K., Oiffinger, K. C., Erb, N. L., et al. (2015). American cancer society colorectal cancer survivorship care guidelines. *A Cancer Journal for Clinicians*, 65(6), 427-455. doi: 10.3322/caac.21286
- 「がんの社会学」に関する研究グループ (2016年9月). 2013年 がん向き合った4,054人の声 — がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査 報告書 — 静岡県立静岡がんセンター. <https://www.scchr.jp/book/houkokusho/2013/taikenkoe.html>
- Germeni, E., Schulz, P. J. (2014). Information seeking and avoidance throughout the cancer patient journey: Two sides of the same coin? a synthesis of qualitative studies. *Psycho-Oncology*, 23(12), 1373-1381. doi: 10.1002/pon.3575
- Hanly, N., Mireskandari, S., Juraskova, I. (2014). The struggle towards 'the new normal': A qualitative insight into psychosexual adjustment to prostate cancer. *BMC Urology*, 14(56), 1-10. doi: 10.1186/1471-2490-14-56
- Hardcastle, S. J., Maxwell-Smith, C., Hagger, M. S., et al. (2017). Exploration of information and support needs in relation to health concerns, diet and physical activity in colorectal cancer survivors. *European Journal of Cancer Care*, 27(1), 1-9. doi: 10.1111/ecc.12679

- 橋本君代, 島田美鈴, 中西純子 (2018). 化学放射線療法を完遂した頭頸部がん患者の知覚・認知・対処 — 診断期から治療期に焦点を当てて —. 愛媛県立医療技術大学紀要, 15(1), 1-8.
- Kaiser, M., Adami, S., Lucius-Hoene, G., et al. (2021). Learning-by-doing: The importance of experiential knowledge sharing for meeting the information needs of people with colorectal cancer in Germany – a qualitative study. *BMJ Open*, 11(2), 1-10. doi: 10.1136/bmjopen-2020-038460
- 金正貴美, 野嶋佐由美 (2021). がん患者のComfortに関する情報ニーズの文献レビュー. 高知女子大学看護学会誌, 46(2), 1-12.
- 片岡純, 佐藤まゆみ, 佐藤禮子ほか (2019). 外来通院がん患者が主体性を発揮して行動するために重要と評価する看護実践. 愛知県立大学看護学部紀要, 25, 47-56.
- Kemp, E., Koczwara, B., Butow, P., et al. (2018). Online information and support needs of women with advanced breast cancer: A qualitative analysis. *Supportive Care in Cancer*, 26(10), 3489-3496. doi: 10.1007/s00520-018-4206-1
- 国立研究開発法人国立がん研究センター (2022年11月16日). 最新がん統計. がん情報サービス. [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 黒田寿美恵, 船橋眞子, 中垣和子 (2017). 看護分野における『その人らしさ』の概念分析 — Rodgersの概念分析法を用いて —. 日本看護研究学会雑誌, 40(2), 141-150. doi:10.15065/jjsnr.20161207005
- Kwok, A., Palermo, C., Boltong, A. (2015). Dietary experiences and support needs of women who gain weight following chemotherapy for breast cancer. *Supportive Care in Cancer*, 23(6), 1561-1568. doi: 10.1007/s00520-014-2496-5
- Kwok, C., White, K. (2014). Perceived information needs and social support of Chinese-Australian breast cancer survivors. *Supportive Care in Cancer*, 22(10), 2651-2659. doi: 10.1007/s00520-014-2252-x
- Latifi, M., Salimi, S., Barahmand, N., et al. (2018). Postmastectomy information needs and information-seeking motives for women with breast cancer. *Advanced Biomedical Research*, 7(75), 1-9. doi: 10.4103/abr.abr\_187\_17
- Legese, B., Addissie, A., Gizaw, M., et al. (2021). Information needs of breast cancer patients attending care at Tikur Anbessa specialized hospital: A descriptive study. *Cancer Management and Research*, 13, 277-286. doi: 10.2147/CMARS.264526
- Lithner, M., Klefsgard, R., Johansson, J., et al. (2015). The significance of information after discharge for colorectal cancer surgery - a qualitative study. *BMC Nursing*, 14(36), 1-8. doi: 10.1186/s12912-015-0086-6
- Magalhães, B., Fernandes, C., Lima, L., et al. (2020). Cancer patients' experiences on self-management of chemotherapy treatment-related symptoms: A systematic review and thematic synthesis. *European Journal of Oncology Nursing*, 49, Article 101837. doi: 10.1016/j.ejon.2020.101837
- Mazzi, M. A., Perlini, C., Deledda, G., et al. (2020). Employment status and information needs of patients with breast cancer: A multicentre cross-sectional study of first oncology consultations. *BMJ Open*, 10(9), 1-11. doi: 10.1136/bmjopen-2020-038543
- Melhem, S. J., Nabhani-Gebara, S., Kayyali, R. (2022). Informational needs and predictors of Jordanian breast and colorectal cancer survivors: A national cross-sectional study. *Supportive Care in Cancer*, 30(8), 6827-6837. doi: 10.1007/s00520-022-07110-6
- Ng, R., Verkooijen, H. M., Ooi, L. L., et al. (2012). Unmet psychosocial needs among cancer patients undergoing ambulatory care in Singapore. *Supportive Care in Cancer*, 20(5), 1049-1056. doi: 10.1007/s00520-011-1181-1
- Recio-Saucedo, A., Gilbert, A. W., Getry, S., et al. (2018). "It's like we don't exist": Tailoring education for young

- women undergoing surgery for early-stage breast cancer. *Oncology Nursing Forum*, 45(2), 165-175. doi: 10.1188/18.ONF.165-175
- Rha, S. Y., Lee, H. J., Lee, J. (2020). Unmet needs in the physical and daily living domain mediates the influence of symptom experience on the quality of life of gastric cancer patients. *Supportive Care in Cancer*, 28(3), 1419-1431. doi: 10.1007/s00520-019-04954-3
- Sakai, H., Umeda, M., Okuyama, H., et al. (2020). Differences in perception of breast cancer treatment between patients, physicians, and nurses and unmet information needs in Japan. *Supportive Care in Cancer*, 28(5), 2331-2338. doi: 10.1007/s00520-019-05029-z
- Salz, T., Baxi, S. S., Blinder, V. S., et al. (2014). Colorectal cancer survivors' needs and preferences for survivorship information. *Journal of Oncology Practice*, 10(4), e277-e282. doi: 10.1200/JOP.2013.001312
- 笹井知子, 雄西智恵美 (2016). 診断から初回治療導入期における肺がん患者の不確かさの管理. *日本がん看護学会誌*, 30(1), 73-81. doi: 10.18906/jjscn.18
- Slavova-Azmanova, N., Newton, J. C., Hohnen, H., et al. (2019). How communication between cancer patients and their specialists affect the quality and cost of cancer care. *Supportive Care in Cancer*, 27(12), 4547-4585. doi: 10.1007/s00520-019-04761-w
- Spittler, C. A., Pallikathayil, L., Bott, M. (2012). Exploration of how women make treatment decisions after a breast cancer diagnosis. *Oncology Nursing Forum*. 39(5), E425-E433. doi: 10.1188/12.ONF.E425-E433
- 多鹿秀継, 川口潤, 池上知子ほか (1992). 社会的認知の情報処理. 多鹿秀継, 川口潤, 池上知子ほか (編), *情報処理の心理学 — 認知心理学入門* (pp. 106-156). 東京都: サイエンス社.
- Taljaard, M., Lovric, G. T., Makenzi, A. M., et al. (2020). Information needs of black prostate cancer patients receiving treatment within the South American public health system. *Oncology and Therapy*, 8(2), 285-298. doi: 10.1007/s40487-020-00125-1
- Tariman, J. D., Doorenbos, A., Schepp, K. G., et al. (2014). Information needs priorities in patients diagnosed with cancer: A systematic review. *Journal of The Advanced Practitioner in Oncology*, 5(2), 115-122.
- Ussher, J. M., Perz, J., Gilbert, E. (2012). Information needs associated with changes to sexual well-being after breast cancer. *Journal of Advanced Nursing*, 69(2), 327-337. doi: 10.1111/j.1365-2648.2012.06010.x
- Uysal, N., Toprak, F. Ü., Kutlutürkan, S., et al. (2018). Symptoms experienced and information needs of women receiving chemotherapy. *Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing*, 5(2), 178-183. doi: 10.4103/apjon.apjon\_69\_17
- Valero-Aguilera, B., Bermúdez-Tamayo, C., García-Gutiérrez, J. F., et al. (2014). Information needs and Internet use in urological and breast cancer patients. *Supportive Care in Cancer*, 22(2), 545-552. doi: 10.1007/s00520-013-2009-y
- 山内英子 (2014). 各職種に求められるがんサバイバーへの関わり. 山内英子, 松岡順治 (編), *実践 がんサバイバーシップ* (pp. 136-140). 東京都: 医学書院.

# Literature Review of the Information Needs of Adult Cancer Patients from Post-Diagnosis through the Treatment Phase

Kokoro Nagashima<sup>1)</sup> Yuko Kawasaki<sup>2)</sup>

## Abstract

[Purpose] Building on prior research conducted in both Japan and abroad, this review summarizes the key information needs of adult patients with colorectal, lung, gastric, breast, or prostate cancer during the diagnosis to treatment phase. The aim is to obtain valuable insights for future nursing care.

[Methods] The databases utilized were Ichushi-Web of Japan, CINAHL (Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature), and MEDLINE Complete. The search spanned a period of 10 years, from 2012 to October 2022, focusing on the keywords “cancer” and “information needs,” along with additional terms such as “colorectal cancer,” “lung cancer,” “gastric cancer,” “breast cancer,” and “prostate cancer.” In total, 23 articles were selected for analysis by combining database and manual searches.

[Results] Studies focusing on breast cancer patients were the most prevalent, with a predominance of qualitative research designs. The information needs of adult cancer patients from diagnosis to the treatment phase were categorized into 14 subcategories and subsequently organized into three main categories, namely: [Information to Understand the Meaning of the Disease and Treatment], [Information to Anticipate the Impact of the Disease and Treatment], and [Information for Coping with Making Improve Current and Future Life].

[Conclusion] Adult cancer patients exhibited information needs that varied according to individual factors such as the type of cancer, disease stage, treatment, physical condition, personal values, lifestyle, work status, and the dynamics within their family or partner relationships. This can be attributed to the unique nature of each patient, suggesting that nurses should recognize the need for more detailed and personalized information as well as play a pivotal role in providing tailored information or facilitating access to appropriate information resources. Furthermore, majority of the studies were conducted outside Japan, suggesting that patient information needs may differ based on cultural backgrounds and healthcare provisions.

Key Words: Information needs, Cancer patients, Literature review

---

1) Cancer Nursing, Master's Program, Graduate School of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Clinical Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

# 造血器腫瘍患者の退院支援に関する国内外の文献検討

## － 造血器腫瘍患者の退院支援 －

松本 綾奈<sup>1)</sup>, 川崎 優子<sup>2)</sup>

### 要 旨

#### 【目的】

国内外の先行研究から、造血器腫瘍患者への看護師の退院支援内容と、退院後の療養生活における患者の困難間の対応を明らかにし、現行の退院支援における潜在的な課題を特定し、看護実践への有益な示唆を得ることを目的とした。

#### 【方法】

分析対象の年代は問わなかった。「医学中央雑誌」web版、PubMed, CHINAL Ultimate, MEDLINE Ultimateを用いた。キーワードは造血器腫瘍orリンパ腫or造血幹細胞移植or同種移植、退院or移行期ケアor看護で検索した。PubMed, CHINAL Ultimate, MEDLINE Ultimateでは看護を除外したキーワードで検索を行った。ハンドリサーチと合わせて30文献を分析対象とした。

#### 【結果】

造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズに関する文献は23件あり、そのうちほとんど質的研究であった。看護師の退院支援に関する文献は7件であり、そのうち量的研究が多かった。

文献から抽出された造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズの要素は、【在宅における具体的な感染予防の相談】、【筋力低下に対する運動療法や身体的症状への具体的な対処方法の提案】、【味覚障害・食思不振がある時の食事の提案】、【セクシュアリティにまつわる家族の関係性に関わる相談】、【長期療養に伴う治療費負担を軽減するための情報提供や支援】、【晩期障害に伴い社会的役割が果たせない葛藤への対処やケア】、【在宅療養中に抱えている晩期障害や不安に関する周囲の理解や支援】の7個が特定された。看護師の退院支援における要素は、【感染症予防やGVHDの関連事項を優先的に考えた情報提供】、【晩期合併症管理と生活の質担保のための継続ケア】、【患者との関係性の構築】の3個が特定された。

#### 【結論】

患者は退院後も様々な困難を抱え、個々に応じた支援を求めているが、患者が退院後の生活に求めるニーズと看護師の退院支援は一致しておらず、退院支援の不足が明らかとなった。

キーワード：造血器腫瘍, 退院, 看護支援

1)兵庫県立大学大学院看護学研究科 博士前期課程がん看護学専攻

2)兵庫県立大学看護学部 治療看護学

## I. 諸 言

造血器腫瘍は、医学の発展により治療成績の向上や生存率の上昇(国立がん研究センター, 2022)が継続しており、支持療法も飛躍的に進歩したことで、患者へ大きな利益をもたらしている(近藤, 2017)。さらに、移植治療の発展により、骨髄非破壊的移植(ミニ移植)の安全性が向上したことで、高齢者や臓器障害がある患者にも適応可能となり、移植適応年齢の幅が拡大している(国立がん情報研究センター, 2017)。しかし、治療が望める一方で、再発すると急激に病勢が進行し、生命予後は極めて悪い疾患とされる(中澤, 2015)。

移植に関しては、移植に使用する細胞や前処置が多様化したことで、造血幹細胞移植の実施件数が増え、移植後合併症の管理方法も進歩してきたため、長期生存者数も増加しているが、時間が経過した患者においても、晩期死亡リスクは高く、QOL低下の問題があり(日本造血細胞移植学会ガイドライン, 2017)、長期的な身体的・精神的負担を経験している。移植の前処置に関連する副作用として、血球減少による感染症、易出血、貧血や粘膜障害等が挙げられ、さらに同種移植では、移植片対宿主病(Graft Versus Host Disease; 以下, GVHD)による免疫関連の合併症や、著しく免疫力が低下することにより、重篤な感染症や、晩期障害によって(国立がん研究センター, 2019)、長期に渡り副作用や合併症に苦しんでいる患者が多い。中でも、晩期障害である慢性GVHDは、様々な臓器に多彩な症状を呈する晩期合併症であり、症状は多岐に渡るため、それに伴う後遺症や、治療に伴う副作用も症状として混在し、患者の生活の質を著しく低下させると言われている(稲本, 2017)。

晩期合併症の予防や早期発見・早期治療、適切なケアにつなげるために、移植後定期的に検査や診察、生活における指導を受けることが必要であるとし、2012年「造血幹細胞移植後患者指導管理料」が新設され、退院後の移植患者を対象とした造血幹細胞移植後長期フォローアップ(Long Term Follow-Up; 以下, LTFU) 外来の設置が推進された(塚越ら, 2018)。長期フォローアップの視点から、晩期障害のマネジメントや身体面、心理面、社会面等の多角的な支持を行う必要性が示され(黒澤, 2017)、移植後のQOL向上を目指した看護の在り方

が課題となり、退院後も患者へ質の高い看護の継続が求められる。

また、医療費の高騰や外来化学療法診療報酬の改定等に伴う平均在院日数の減少や入院治療から外来治療への移行により、化学療法を受けながら在宅で療養生活を送る造血器腫瘍患者も増えているため、患者自身による有害事象のマネジメントが必須であり、QOLを維持しながら、病と共に生きていくために継続的なセルフケアを行っていく必要がある(藤塚ら, 2016; 厚生労働省, 2021)。そのためには、入院時から退院後の生活を見据えて、患者や家族のニーズを特定し、支援していく必要性は高く、退院支援における看護師が果たす役割は大きい(木場ら, 2017; 城丸ら, 2023)。しかし、知識や技術、経験不足から、患者や家族への心理的支援や意思決定支援に困難感を抱いていたり(永井ら, 2021)、再発して亡くなる患者も多いため看護へのモチベーションの維持が難しかったり(村田ら, 2017)、入院前の生活状況や家族の介護力に関して情報が入りにくく、在宅生活のイメージが持ちにくい現状があり(川嶋ら, 2015)、看護師が積極的に退院支援に取り組めておらず、機能が十分に発揮できていない可能性がある。一方で、看護師が患者や家族へ十分な教育的指導を行うことで、同種移植患者の再入院数や滞在期間に影響を与える可能性があるとされている(Grant et al., 2005)。したがって、疾患の複雑さを理解し、豊富な知識や技術に加えて、専門性の高い看護実践能力を駆使し、長期的に様々な困難を抱える造血器腫瘍患者や家族のニーズを捉え、退院プロセスおよび退院後の生活を見据えた個別性のある具体的な退院支援や指導は非常に重要である。

先行研究をみると、造血器腫瘍患者の退院後の生活における困難やニーズに関する研究は多いが、看護師が行う退院支援の研究は散見され、退院支援に関する内容や今後の看護の課題を示した研究は少なく、どのような看護実践が患者の退院後の療養生活を支える上で適切で効果的であるのか示された文献は少ない。さらに、造血器腫瘍患者が退院支援をどのように捉え、退院支援に何を望んでいるのか等に関する研究も十分ではない。そこで、造血器腫瘍患者が退院後に抱くニーズと看護師が行っている退院支援や内容を比較し、どこまで対応しその差はあるのか、それぞれの要素を明らかにし、現行の

退院支援における潜在的な課題を特定し、看護実践への有益な示唆を得ることを目的として、文献検討を行った。

## II. 研究の目的

国内外の先行研究から、造血器腫瘍患者への看護師の退院支援内容と、退院後の療養生活における患者のニーズが対応しているのかを明らかにし、現行の退院支援における潜在的な課題を特定し、看護実践への有益な示唆を得ることを目的とする。

## III. 方法

### 1. 検索方法

国内文献は「医学中央雑誌」web版、国外文献はPubMed, CHINAL Ultimate, MEDLINE Ultimateを用いて以下のように検索した。分析対象は2023年7月までに発表された文献とした。

#### 1) 医学中央雑誌web版

シソーラス語を使用して“造血器腫瘍orリンパ腫or造血幹細胞移植or同種移植”と“退院or移行期ケアor看護”のキーワードをANDでつなぎ、原著論文、会議録除くを指定し検索し794件であった。選定条件により抽出した15件と、ハンドリサーチの5件を合わせて20件を対象とした。

#### 2) PubMed

国内文献と同じシソーラス語を使用した検索ワードで検索すると、26万件以上該当するため、“nursing”を省いた“Hematologic Neoplasms or Lymphoma or Hematopoietic Stem Cell Transplantation or Transplantation, Homologous”と“Transitional Care or Patient Discharge”をANDでつなぎ検索し、88件であった。選定条件により抽出した7件を対象とした。

#### 3) CHINAL Ultimate, MEDLINE Ultimate

“Hematologic Neoplasms or Lymphoma or Hematopoietic Stem Cell Transplantation or Allografts”と“Patient Discharge or Transitional Care”をANDでつなぎ検索し、39件であった。選定条件により抽出した3件を対象とした。

### 2. 選定条件

適格基準として①原著論文、②学会誌、③対象が小児・小児がん経験者以外、④退院後の患者のニーズや看護師の退院支援が記載されているものとし、除外基準として症例/事例検討、解説/総説、文献検討とした。第一段階としてタイトル、抄録を確認して適格基準に沿ってスクリーニングを行い、36件とした。第二段階として論文の内容を吟味して適格性の判断を行い30件を分析対象とした。文献選定は研究者2名で行った。対象文選定のフローチャートを図1に示す。

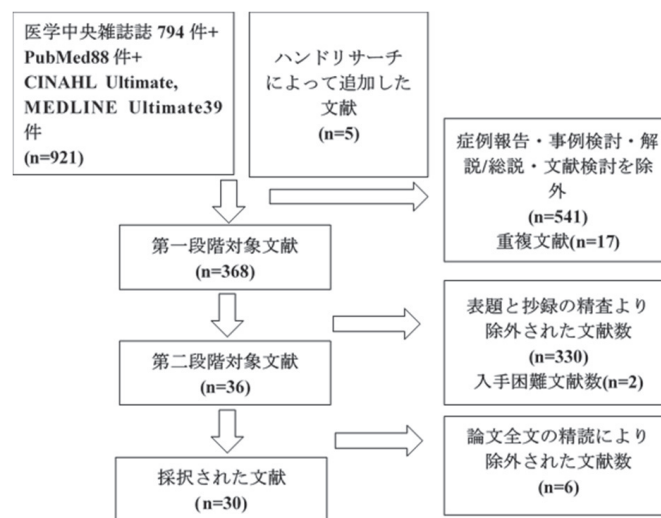


図1. 対象文献選定のフローチャート

### 3. 分析方法

選定された文献から、著者と出版年、国名、研究デザイン、対象者・属性、研究目的、療養生活における造血器腫瘍患者のニーズと看護師の退院支援に関する記述を文献ごとに抽出し、レビュー表を作成した。分析対象にした研究文献は精読し、各文献の療養生活における造血器腫瘍患者のニーズと看護師の退院支援に関する記述を抽出し、それぞれの要素について検討した。

### 4. 用語の操作的定義

ニーズ：個人や集団が満たされるべき要求や欲求であり、社会や組織がそのニーズに対処することで、人々がより良い生活を送るための基盤となる。

退院支援：医療機関から退院する患者や家族が、安心して在宅療養生活を送れるように、患者の困難やニーズに対応した退院後の生活を見据えた具体的な情報提供や生活指導に関する取り組み。

## IV. 結 果

### 1. 文献の概要

造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズに関する文献は23件あり、そのうちほとんどが質的研究であった。看護師の退院支援に関する文献は6件であり、そのうち量的研究が多い傾向であった。件数は各年に1件ほどであった。患者のニーズに関する研究に関しては、対象者は30～40歳代が多く、国内では退院後に直面している困難やそれを乗り越えるプロセスや要因、対処に着目している文献が多かった。国外では、社会人口学的、治療特性、疾患等の視点から患者や介護者を横断的に調査し、苦痛やアンメットニーズ、QOLに着目した文献が多かった。看護師の退院支援に関する研究内容に関しては、国内では退院支援に用いる教育的ツールの内容や患者へ伝える情報に対する看護師の認識、患者が持つ能力を発揮できるような退院支援状況に着目した文献があった。国外では、退院後も患者を継続的にフォローアップできるようなチェックリストや均一した退院プロセスの開発に着目した文献が多い傾向であった。

### 2. 造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズの要素

造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズに関する研究の結果は表1に示している。研究結果から導き出した患者のニーズを要素として7個抽出し、【】で示した。以下にその内容を述べる。

#### 1) 【在宅における具体的な感染予防の相談】

患者や家族は、感染予防の継続や感染症によって、QOL低下、生活の狭さを感じ、生活の制限を緩和できる基準等の曖昧さに困難を抱えており、感染予防方法に関して具体的な情報不足を感じていた(文献1,9,12,15,17,18,19,20,21,22)。それにより、患者や家族は、他者との清潔に対する認識の違いに困惑しながら、自ら感染予防策を工夫・実践していた(文献8,15,16,19)。

#### 2) 【筋力低下に対する運動療法や身体的症状への具体的な対処方法の提案】

患者は長期的に身体的苦痛を抱え、QOLが低下していることを報告した(文献6,10,11,14,18,21,22,23)。その状況でも、患者は自分なりに症状悪化予防に努めていたが、具体的な対処法に対する情報不足を報告している(文献5,7,12,19,20)。加えて、内服薬による身体への弊害も多いことが報告された(文献9,17,21)。また、入院による著明な筋力・体力低下を報告していたが(文献1,3,4,13,19)、患者や家族は健康な身体を目指して、自ら工夫しリハビリやリフレッシュ法を実践しており、専門家による運動療法に対する支援を求めている(文献5,8,12,15,16,17,20,23)。

#### 3) 【味覚障害・食思不振がある時の食事の提案】

患者は治療の副作用に伴う味覚障害等によって食事に関した問題を抱えており、食欲の変化や体重減少の継続がQOL低下に関係していることが報告されている(文献10,11,17,18,19,20)。そんな状況でも、患者自身や家族の協力を得ながら、食事を工夫し、専門家による食事療法への助言を求めている(文献7,12,15,17,19,23)。

#### 4) 【セクシュアリティにまつわる家族の関係性に関わる相談】

患者がセクシュアリティに関して身体的・精神的な問

題を抱え、機能的・社会的QOLが低いことを報告している(文献11,14,21,22,23)。さらに、それが家族の在り方にも影響を与え(文献6,18)、夫婦間の不安にもつながっていた(文献1,6)。一方で、精神的な結びつきや絆がより深まったことを報告していた(文献3,15)。しかし、夫婦の関係の変化により家族の問題を抱えていた(文献9,18)。

#### 5) 【長期療養に伴う治療費負担を軽減するための情報提供や支援】

経済的負担による負い目を感じ、役割交代や遂行困難による精神的苦悩も感じていた(文献1,3,6,11)。さらに、その負担は希望の障壁となり、諦める対処をしていたが、社会支援が活用できれば希望を支える要因となっていた(文献2,17)。一方で、経済的不安への思いが、様々な対処への後押しになることも報告された(文献7)。また、配偶者も経済的不安を抱いていた(文献9,15,21)。さらに、保険や社会保障に関する困難があり、情報提供や支援を求めている(文献8,20,21)。

#### 6) 【晩期障害に伴い社会的役割が果たせない葛藤への対処やケア】

家庭内の役割交代や社会的役割の喪失は患者に葛藤を生じさせていた(文献1,3,6,7,8,9,21,22)。一方で、懸命に新しい役割に適応しようとしていた(文献15,16)。また、GVHDの有無等によって就労への困難の内容に差があり、問題を抱えていた(文献18,22)。さらに、ボディイメージの低下が身体的・精神的苦痛を与えていた(文献5,13,17)。また、外観の変化が、他人に対する不安を引き起こしており、GVHDへの継続的ケアを希望していた(文献3,5,6,8,21,23)。

#### 7) 【在宅療養中に抱える晩期障害や不安に関する周囲の理解や支援】

患者や家族は疾患や晩期障害により様々な不安を感じ、それが希望を阻害していた(文献1,2,3,7,8,13,14,15,17,19,21)。一方で、生や健康に感謝し、前向きに生きていた(文献3,4,7,8,12)。しかし、患者は長期的な心理社会的苦痛を抱え、QOLが低下していた(文献9,10,11,22)。また、周囲の人に自分が理解されないこ

とに困難感を抱いていたが(文献3,5,16,17,21,22)、相談者の存在により希望が維持され、周囲の人の支えを実感することもあった(文献2,3,7,8)。しかし、周囲の支援不足、情報の伝え方に対する不満があった(文献7,8,17,18,20,22,23)。

### 3. 看護師の退院支援から導いた実践の要素

看護師の退院支援に関する研究の結果は表2に示している。研究結果から導き出した看護師の退院支援に関する看護実践の要素を3個抽出し、【】で示した。以下にその内容を述べる。

#### 1) 【感染症予防やGVHDの関連事項を優先的に考えた情報提供】

看護師は感染症予防に関連する清潔行動や食衛生の管理、GVHDの機序等の情報を中心に重要と考え、退院後もセルフケアが継続できるように情報提供を行っていた(文献24,25,29)。しかし、退院指導ツールの記載内容と看護師が伝えるべきと考える情報等に差異があることが報告され(文献24,25)、看護師の認識と指導ツールの内容に差があった。

#### 2) 【晩期合併症管理と生活の質担保のための継続ケア】

患者が外来治療へ移行する際に必要な治療の遅れや継続的ケアが中断されることを予防するために、退院時チェックリストや引き継ぎツールを導入することで、構造化された退院のプロセスを確立していた。晩期合併症管理と生活の質担保のために、適切な退院後のフォローアップ外来の計画・調整やケアの改善ができたことを報告していた(文献26,27,28)。

#### 3) 【患者との関係性の構築】

患者本来の力の発揮を促進する支援や、意思決定支援、心理・情緒的支援、社会資源に関する支援の実践において、看護師の成功体験の有無が関係し、患者と看護師の関係性の影響を受けやすい支援であることが報告された(文献29)。しかし、高度実践看護師による介入では、患者との信頼関係が強化され、必要な支援を受け、患者は安心して退院することができていた(文献30)。

表1. 文献から抽出された造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズの要素

番号	著者	研究デザイン	対象と属性	目的	結果
1	石田ら (2000)	質的記述式研究	AMLで骨髄移植を受けた患者3名(40歳代)	在宅療養に適応するための入院中からの看護介入方法の検討	・感染予防継続で楽しみが欠如, 交流希薄化 ・長期療養や副作用の体力低下が招く行動制限 ・性に関する夫婦関係への不安 ・経済的問題(収入減少, 入院・生活費等) ・無職への負い目による父親役割の遂行困難 ・常に死の恐怖や再発の不安がある ・同病者の死が自分に重なる 1), 2), 4), 5), 6), 7)
2	相原ら (2004)	質的記述式研究	AML, CML, NHLで自家移植か化学療法を受けた患者4名(20~30歳代)	社会生活を送る20代~30代の人々の希望と維持に関連する要因	・希望の障壁: 治療に関連した経済的負担感 ・希望を支える要因: 活用できる保険制度, 周囲の経済的支援, 相談できる人の存在 ・再発や死への認識は希望の障壁 5), 7)
3	石田ら (2005)	内容分析	AML, CML, MDS, MMで移植を受けた患者13名(平均年齢42.7歳)	在宅療養における困難と変化した生活を再構築できる要因	・長期入院で易疲労感や体重減少等の体力低下 ・性の問題で精神的つながりを重視した夫婦の価値観の変化 ・失職による収入減少や医療費負担・役割喪失への精神的苦悩 ・脱毛等による外観の変化に対する困難 ・同病者の死で死を身近に感じる ・再発=死という不安 ・疾患や移植により周囲の人の共感不足 ・家族や同病者等の支えを実感 2), 4), 5), 6), 7)
4	山口ら (2007)	ライフヒストリー法	AML, AL, NHLで化学療法や移植を受けた患者8名(年齢40~60歳代)	発症から移植後の生活に至るまでの病みの体験	・繰り返される入院による体力の低下 ・治療による身体の衰えを実感 ・再発の不安はあるが, 生への感謝から人生を積極的に生きる 2), 7)
5	平田ら (2009)	質的記述式研究	移植後慢性GVHDを発症した患者9名(平均年齢41歳)	慢性GVHDがある患者のボディイメージとその変化への適応行動	・自分なりに考え症状に対処し体調管理法を実行 ・ストレス軽減方法を見出し身体を考えた行動を取る ・外観の変化で脆弱で否定的な身体像を抱き, 隠すように対処 ・他者と自分の身体像にズレがあり, 解ってほしくて自分から話をする 2), 6), 7)
6	永井ら (2009)	質的記述式研究	CML, NHL, AA, AMLで移植を受けた男性4名(30歳代)	患者が生活の軌跡を認識する看護支援により, 病気体験における変化の探究	・皮膚GVHDが辛く一人で苦痛を抱える ・疾患や治療の弊害で異性との交際を躊躇し親密性達成に苦悩を抱える ・職場での役割喪失で仕事を通した達成感の喪失 ・家族を支える役割遂行困難 ・配偶者への経済的負担に対する申し訳なさ ・外観の変化による家族への気兼ね 2), 4), 5), 6)
7	片岡ら (2009)	エスノグラフィ	HL, NHLで通院中の患者20名(平均年齢57.1歳)	患者が病気を克服するための統御力を獲得するプロセス	・再発予防方法や後遺症緩和方法はなく, 自分で情報収集し実践 ・病気による周囲の態度の変化や役割遂行の困難 ・経済的不安から治療と生活の調整等の対処を実施 ・再発の不安を医療者に言えない ・周囲に辛さを理解されたいと思いつつ周囲の支えを実感 ・命や健康を大切さを意識して生きる 2), 5), 6), 7)
8	後藤ら (2011)	グランデット・セオリー	NHLで長期入院した患者5名(年齢は40~50歳代)	長期入院した患者の社会復帰プロセスにおける在宅療養生活の問題	・他者との清潔への認識の違いによる感染の不安 ・筋力低下を自覚し回復に向けリハビリを継続 ・罹患により保険や種類に関する重要性を認識 ・家族内の役割遂行困難への苛立ちや負い目 ・他者の励ましや視線が身体像が変容した患者に動揺を与える ・生や健康を前向きに捉える ・医療者の言動で不安が生まれる ・再発や孤独の不安を抱く ・友人や家族の支えを実感 ・他人の死が自分に投影され負の感情を抱く 1), 2), 5), 6), 7)
9	Liz Cooke et al., (2012)	混合研究	AL, CL, MDS, MF, MPD, NHL, HLで移植を受けた患者282名と介入群患者141名(平均年齢49歳)	患者が抱いた懸念から浮かび上がった質的テーマを考察	・感染症予防で生活制限による苦痛 ・GVHDの治療薬による他疾患の発症や弊害 ・長期入院による夫婦の対立や葛藤, 関係の破綻 ・通院や内服薬による経済的負担 ・介護者の保険維持のための仕事継続等のケア負担 ・移植のストレスによる家族の役割変化や困難 ・治療のための移住で社会的ネットワークから離れることの孤独感 1), 2), 4), 5), 6), 7)
10	Marcia Grant et al., (2012)	横断研究	AL, CL, MDS, MF, MPD, NHL, HLで移植を受けた患者282名(平均年齢48歳)	退院時機能状態, QOL, 介護者の情報に関するニーズにおける社会人口学的, 疾患, 治療特性の比較	・女性, 若年層, ヒスパニック系で身体的・社会的幸福度, 総合的QOL低下 ・退院時著明な身体的衰弱があり, QOL上の多くの懸念を抱く 2), 3), 7)
11	Mary Crooks et al., (2014)	混合研究	AML, NHL, ALLで移植を受ける患者37名(平均年齢54歳)	患者の心理社会的苦痛を移植前~退院6か月までの経時的なモニター	家族, 感情的問題, 就労の問題, 経済的問題, 精神的・宗教的問題, 身体的問題(体力, 食欲, 性等)において問題数は時間経過に伴い減少したが, 特に感情的と身体的な問題による長期的苦痛は継続し, 長期的なフォローアップの必要性が示唆された 2), 3), 4), 5), 7)
12	片桐 (2014)	質的記述式研究	AL, NHLで化学療法や移植を受けた患者9名(平均52.6歳)	在宅療養における感染から身を守る生活の実態	・行動規制の継続による生活の窮屈さ ・虚無感を持ちながらも自分なりに回復に努める ・体調悪化の兆候を察知して迅速に対処する ・健康を取り戻すために食事管理 ・再発や死の恐怖の中で生き続けることの希求 1), 2), 3), 7)

表1. 文献から抽出された造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズの要素(続き)

番号	著者	研究デザイン	対象と属性	目的	結果
13	大塚ら (2014)	グラウンデッド・セオリー	ALL, MDS, MF, ATLの移植患者10名 (60~70歳代)	高齢者の造血幹細胞移植の体験と意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遅延する筋力低下や体重減少による移植の影響の大きさを実感</li> <li>・多彩な晩期症状の持続や出現から普通に生きられなくなったと実感</li> <li>・同病者や移植体験者らの訃報等で死や再発への不確かさによる脅威 (2), (6), (7)</li> </ul>
14	Gamze Oguz et al., (2014)	質的記述式研究	AML, MM, NHL, HLの移植後患者66名 (平均年齢46.38歳)	移植患者の退院後の症状の評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的な症状の苦痛が精神的症状 (悲しい, 心配, イライラ, 神経質) と身体的症状 (睡眠困難, 性的関心, 活動の問題, 息切れ, 緊張感, 眠気, 心配性) によって引き起こされていた。(2), (4), (7)</li> </ul>
15	横田ら (2015)	グラウンデッド・セオリー	AML, MDSで移植を受けた患者の配偶者6名 (年齢35~59歳)	配偶者が在宅療養生活における困難に対処していくプロセス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・清潔に対する認識のずれ</li> <li>・感染予防で制限された生活に対する閉塞感</li> <li>・どこまできれいにすればいいのかわからない</li> <li>・試行して成功体験を蓄積し自分なりのやり方で感染対策を実施</li> <li>・体力回復のために一緒にリハビリを継続</li> <li>・味覚変化に対応した食事の工夫</li> <li>・病気の罹患により家族の絆が強固</li> <li>・職場復帰不可能による経済的負担に対する不安</li> <li>・果たせなかった家族役割へ懸命に適応</li> <li>・合併症や再発の不安による体調管理継続の長期的な不安 (1), (2), (3), (4), (5), (6), (7)</li> </ul>
16	永井ら (2017)	現象学的アプローチ	AML, ALL, MDS, NHL, ATLで移植を受ける患者18名 (年齢20~60歳代)	移植後患者のライフコントロール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染しないように自分なりに考え住環境を整える</li> <li>・体調回復に向けて自らの方法を継続</li> <li>・役割遂行困難で他者と隔たり等あるが自分なりに共生・適応</li> <li>・自己の健康を守るために家族へ体調の不安定さを繰り返し訴える (1), (2), (6), (7)</li> </ul>
17	上野ら (2018)	質的記述式研究	AML, ALL, MDSで移植を受けた患者6名 (平均年齢55.5歳)	同種造血幹細胞移植を受けた患者の困難と対処	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染予防行動継続の窮屈感</li> <li>・制限緩和の基準不確かさへの困難感</li> <li>・転倒予防や体力回復, 活動量の調節等工夫し運動療法を図る</li> <li>・内服薬による体調悪化・味覚変化等の食欲低下で食事摂取量や体重減少</li> <li>・味覚変化や唾液量減少により摂食量減少で食事方法を工夫し努力摂取</li> <li>・治療・交通費による経済的負担は諦める</li> <li>・副作用やGVHDの症状に伴う身体的・精神的苦痛</li> <li>・体調変化への医療者含む周囲の共感・理解不足 (わかってもらえない)</li> <li>・症状悪化等で回復過程に不確実性を感じる (1), (2), (3), (5), (6), (7)</li> </ul>
18	塚越ら (2018)	横断研究	NHL, MMで自家移植を行った患者43名 (平均年齢59歳)	在宅療養生活状況や合併症の実態, LTFU外来に対するニーズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体合併症は感染症が最多で感染予防に関する情報不足</li> <li>・移植後の身体的症状が長期的に継続</li> <li>・移植治療による味覚障害や食欲不振が継続</li> <li>・移植後離婚や妊娠困難例, 家族や妊孕性の問題の訴えあり</li> <li>・移植後に退職や転職が多く復職に関する問題を抱える</li> <li>・LTFU外来受診希望者は不安緩和や情報提供を求める (1), (2), (3), (4), (6), (7)</li> </ul>
19	加藤ら (2019)	質的記述式研究	AL, NHLで化学療法を受けた患者5名 (年齢30~70歳代後半)	初期治療を受ける造血器腫瘍患者が在宅療養における気がかり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染予防対策の必要性和具体的な情報の欠如 (食べ物や運動も含む)</li> <li>・感染対策での他者評価の違いや強要できない困惑と感染の不安</li> <li>・食事で体調不良を起こす等失敗を経験しながら感染予防を継続</li> <li>・繰り返す化学療法や安静・副作用による体力低下</li> <li>・副作用症状が持続し改善の見込みが見えない不安</li> <li>・体調変化への適切な対応や医療者の専門的な支援不足</li> <li>・味覚障害による食事摂取量の減少や調理方法に困難</li> <li>・治療の完遂や再発, 症状の改善に対する不確かさからの不安 (1), (2), (3), (7)</li> </ul>
20	久保ら (2020)	質的記述式研究	AML, NHL, ATL, MM, MPALで化学療法や移植を受けた患者10名 (年齢30~70歳代)	入院中から在宅療養生活におけるセルフケア能力発揮のための情報ニーズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症予防のための管理や制限</li> <li>・制限緩和の時期の曖昧さに対する困難感</li> <li>・症状出現時の対処方法や実践できる運動方法に関する情報ニーズ</li> <li>・味覚変化や食欲不振により食事の選択に困難を感じる</li> <li>・社会保障に関わる情報ニーズ・同病者からの助言を求める (1), (2), (3), (5), (7)</li> </ul>
21	Mira Parisek et al., (2021)	質的記述式研究	AML, ALL, NHL, CLL, MF等で移植を受けた患者32名とそのパートナー18名 (年齢20~60歳代)	在宅療養生活における患者とパートナーのニーズの把握とケア方法に関する情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症予防と隔離生活の負担感の継続</li> <li>・慢性疲労や認知機能・集中力の低下等身体的症状の継続や出現</li> <li>・大量の内服薬による体調悪化や管理の煩雑さ</li> <li>・皮膚GVHDによる性交痛等の訴え</li> <li>・身体・認知機能低下で経済的負担と社会支援不足の不満</li> <li>・女性の皮膚GVHDへの苦悩や外見の変化による身体像の変容</li> <li>・GVHDの継続的ケア希望と必要性の指摘・再発や将来への不安</li> <li>・他者の健康評価と自己認識の不一致による苦悩と説明の難しさ</li> <li>・情報の煩雑さと医療者の伝え方に対する不満と不安 (1), (2), (4), (5), (6), (7)</li> </ul>
22	森ら (2022)	内容分析	AL治療後患者284名 (年齢20~70歳代)	在宅療養生活上の困難や対処について健康関連QOLの4側面 (身体, 精神, 機能, 社会) を探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・晩期合併症, GVHD, 感染症による身体的QOLの低下</li> <li>・性腺機能障害により家族や日常生活における機能的QOL低下</li> <li>・GVHD有無による復職・就労の困難に差</li> <li>・再発や今後に対する不安</li> <li>・社会全体や周囲の理解不足と支援へのニーズ (1), (2), (4), (6), (7)</li> </ul>
23	Midori Inakagaki et al., (2022)	準実験研究	移植を受けた患者57名 (年齢18~73歳)	移植後患者に多職種による運動プログラム, 食事処方, 看護教育, カウンセリング, 疲労マネジメント等を実施し, 満足度, 再入院データ, QOL等を評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体的症状の継続により理学療法等の支援を求める</li> <li>・副作用による食欲低下が継続し食事療法の支援を求める</li> <li>・性交に対する興味と満足感の喪失による社会的QOLの低下</li> <li>・精神的苦痛は外見に起因</li> <li>・生活の質に関する問題に対してより多くの支援を必要とする (2), (3), (4), (6), (7)</li> </ul>

1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) は本文中の患者のニーズの要素の番号に対応。 AML: 急性骨髄性白血病, ALL: 急性リンパ性白血病, MPAL: 混合性白血病, CLL: 慢性骨髄性白血病, AL: 急性白血病, CL: 慢性白血病, NHL: 悪性リンパ腫, HL: ホジキンリンパ腫, MM: 多発性骨髄腫, ATL: 成人性T細胞性白血病/リンパ腫, MDS: 骨髄異形成症候群, AA: 再発不良性貧血, MF: 骨髄繊維症, MPD: 骨髄性増殖性疾患

表2. 文献から抽出した看護師の退院支援から導いた実践の要素

番号	著者	研究デザイン	対象と属性	目的	結果
24	人見ら (2008)	内容分析	移植報告件数が40件以上の10施設	移植後の療養生活における退院指導として移植施設での情報提供に関する施設間の差	<ul style="list-style-type: none"> <li>・免疫抑制状態や感染予防, GVHDの機序や要因の情報が中心</li> <li>・皮膚GVHDの対処方法はほとんどの施設で記載なし</li> <li>・晩期障害は性腺機能障害についての記載が半数のみ</li> <li>・薬や嗜好品管理, 活動の情報は施設間でばらつく</li> <li>・退院後緊急時対処時の連絡先を明記する施設はほぼなし</li> <li>・パンフレット記載項目数や内容に施設間差があり<sup>1)</sup></li> </ul>
25	人見ら (2010)	実態調査研究	移植件数が年平均20件超えの18施設における移植病棟所属満2年以上の移植看護経験を持つ看護師(第2段階調査154名, 第3段階調査126名)	移植患者の療養生活の関して看護師から患者へ伝える必要がある情報と階層的重要度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「最重要情報」:GVHDの機序, 感染症・GVHD発症時の受診の促し, 緊急時の連絡先等感染症やGVHDの発見・治療を重要視</li> <li>・「次の重要情報」:感染症予防の清潔行動や隔離, 食衛生管理, 慢性GVHDの誘発・増悪要因</li> <li>・「伝える方がいい情報」:性生活や性腺機能障害, 外見変化, 活動調節, 心理変動対応等の晩期障害や日常生活に関する情報は重要度が低く, 感染症やGVHD(仕組みや症状)関連を重要視</li> <li>・「伝える必要がない情報」:性欲減退や性機能障害の治療<sup>1)</sup></li> </ul>
26	Rahma Warsame et al., (2016)	準実験研究	チェックリスト導入の患者41名と, 化学療法で入院した患者42名の過去の cohorts とアウトカム	入院患者の退院時の複雑な集学的ケアにおける予防可能なエラー発生率減少のためのモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退院前日に多職種回診で退院チェックリストを確認する会議を実施しPDSAサイクルを用いた継続的なプロセスの見直しを実施</li> <li>・チェックリスト導入後は薬の処方, 看護師による電話連絡件数, 検査や治療後の取り決めにおける化学療法の指示書, G-CSF投与, PICC部のケアのアウトカムにおいて有意差あり</li> <li>・継続ケアと安全性の改善<sup>2)</sup></li> </ul>
27	刘姍 et al., (2019)	準実験研究	リンパ腫患者60名(介入群35.0±7.2歳, 対照群40.2±10.3歳)	リンパ腫化学療法患者の退院計画モデルの影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師をリーダーとした血液内科主治医, 栄養士, 心理カウンセラー, 地域看護師等の多職種で退院に介入するチームが構成され, 介入方法や患者の評価と患者に適した退院計画の策定等を実施</li> <li>・入院中に退院後を見据えて患者へ疾患や治療, 副作用の予防とケアを教育し, 患者の疑問に対する情報提供を実施</li> <li>・退院当日には, 患者の退院計画と知識に関するリーフレットを配布し, 退院後も電話サービスや情報提供の機会を設定していることを伝えるような継続的ケアを実施<sup>2)</sup></li> </ul>
28	Mariah Prince et al., (2019)	準実験研究	AL, NHL, MDS, MMで退院予定の患者と病棟勤務する高度実践医療提供者5名	エビデンスに基づいた退院チェックリストとハンドオフツールの導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退院1-2日前までにチーム回診で患者の満たされないニーズを共有</li> <li>・退院1日前までの経過観察及び検査モニタリングのためのフォローアップ外来や地域の腫瘍専門医への外来紹介, 退院2日前までの病棟から外来への送信メール数において有意差あり</li> <li>・治療の遅れを防ぎ, 医療者間の効率的な引継ぎや適切な情報交換が実現し, ニーズをとらえた継続ケアが提供できる<sup>2)</sup></li> </ul>
29	島田ら (2019)	実態調査研究	血液内科病棟勤務の看護師経験年数5年以上, 造血器腫瘍患者ケア臨床経験3年以上の看護師175名(看護師平均経験年数15.4年, 血液内科平均経験年数7.6年)	造血器腫瘍患者のエンパワーメントを支える退院支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染予防行動の説明や不安・困り事の確認</li> <li>・患者へ必要な情報提供</li> <li>・家族支援の確認</li> <li>・緊急時の対応等の情報提供や支援</li> <li>・意思決定支援や心理情緒的支援, 社会資源活用への支援, 患者の持つ力を発揮する支援において看護師の成功体験の有無が関係し, 患者と看護師の関係性の影響を受けやすい<sup>1), 3)</sup></li> </ul>
30	Häfliger et al., (2023)	質的記述式研究	AML, MDS, AA, PMで大量化学療法を受けた患者6名(平均年齢63歳)	患者が入院中に受けた退院後を見据えたAPNの介入と退院後の生活の再構築の調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・APNの共感的・支援的な関わりによる信頼関係の強化</li> <li>・APNによる継続的支援と多職種によるコラボレーション</li> <li>・APNの高度な知識とスキル, 副作用症状の対処とケア, 情報提供が患者へ与える高い安心感と対処能力の向上</li> <li>・APNの連絡先を情報提供されていることで退院後も何時でも相談できる安心感</li> <li>・症状への対処方法を教育されたことで生活の再構築に対して前向き<sup>3)</sup></li> </ul>

1) 2) 3) は本文中の看護師の退院支援の要素の番号に対応。PDSA:計画, 実行, 調査, 行動の反復的な段階を含むプロセス改善サイクル, G-CSF:顆粒球コロニー形成刺激因子製剤, PICC:末梢挿入式中心静脈カテーテル, APN:高度実践看護師, PM:形質細胞腫

## V. 考察

### 1. 研究の動向

造血器腫瘍患者の退院後の生活に求めるニーズに関する研究では, 質的研究が多い傾向であり, 看護師が造血器腫瘍患者の退院後の生活に起こる現象を明らかにして

いると考える。さらに, 成人期の対象者が多いのは, 移植適応年齢であることに加え, 家庭内・社会的役割の形成と肉体的・精神的に成熟する発達段階であり(泉, 2021), 人生におけるライフイベントが集中する年代であるため, 退院後の療養生活において多くの困難を抱えやすいと考える。これは, 多くのニーズが抽出された結

果とつながり、よりニーズに対応する必要性が高い対象群であると考えられる。さらに、前処置や幹細胞の多様化、支持療法の改良等により移植適応年齢が引き上げられ、高齢者や併存疾患がある患者でも安全に移植治療ができるようになったことで、2000年代から移植件数は大幅に増加している(高山, 2013; 厚生労働省, 2021)。そのため、高齢者も含めた移植患者の退院後の生活に関する研究も増加したと考えられ、導き出された患者のニーズは様々な年代の患者が持つニーズを反映していると考えられる。

看護師の退院支援に関する研究は、国内の研究が少なかった。血液内科の看護師は、様々な看護支援を行いながら限られた時間や制限の中でやりきれない看護があり、移植治療の複雑さから情報提供や意思決定等も難しく、より専門性の高い看護の知識や技術の蓄積が必要である(大庭ら, 2020)。また、LTFUにおいて専属や適切なラダーレベルの看護師不足等で専門の看護師確保が難しい現状がある(黒澤, 2017; 日本造血細胞移植学会, 2017)。これらが研究の少なさに影響し、看護師の退院支援における実践の要素が少ない結果につながったのではないかと考える。また、実態調査研究が多い傾向であった。これは、造血器疾患看護の複雑さや困難さゆえに、有効な退院支援の実践が難しいため、傾向や特性を知ることで新たな気づきが促され、造血器腫瘍患者に対する質の高い退院支援への示唆を得ようとしたからではないかと考える。米国のFHCRC (Fred Hutchinson Cancer Research Center) が1980年代からLTFUを設立したが、移植後3か月以降は地域の医師が診療を行うことが多かったため、晩期合併症管理の重要性が示唆され、2006年から国際的にスクリーニングと管理に関するガイドラインが続々と発表されており、退院後の継続的なフォローアップの重要性を示唆している(黒澤, 2017; 稲本, 2017)。さらに、感染性合併症の早期発見や効果的な管理においてガイドライン等を使用することは、患者の転帰を改善し、罹患率や死亡率減少に役立つと報告されている(Sundaramurthi et al., 2017)。これらのことから、晩期合併症や感染症発症予防・管理が患者の退院後の生活を安全に長期継続できる上で重要であり、看護師がその点を重視した退院支援を行っていたという結果にもつながる。しかし、患者は様々な満たされ

ないニーズを抱えていたことから、ニーズを捉えた効果的な退院支援は実践できていない現状があると考えられた。

## 2. 造血器腫瘍患者が退院後に求めるニーズに対する退院支援

結果から、患者は退院後も長期的に様々な困難を抱え、それぞれに応じた支援を求めているが、患者が退院後に求めるニーズと看護師の退院支援の内容は一致しておらず、退院支援が不足していることが明らかになった。

看護師が行っていた退院支援の要素は3個特定され、そのうち【感染症予防やGVHDの関連事項を優先的に考えた情報提供】は、感染症や合併症が患者の生命存続の危機に関わる最も重要な問題と捉え重点的に実施されていたが、【在宅における具体的な感染予防の相談】、【筋力低下に対する運動療法や身体的症状への具体的な対処方法の提案】、【晩期障害に伴い社会的役割が果たせない葛藤への対処やケア】に対するニーズが抽出されたことから、感染症やGVHDに関する情報提供も十分とは言えず、感染症予防の必要性や感染予防策の緩和基準、GVHD症状やその対処・ケア方法等の具体的な情報に関して、患者は満たされないニーズを持っていることが明らかとなった。患者は移植後2年以降も活動的な慢性GVHDに苦しむことがあり、それにより再発に関連しない晩期死亡リスクが高くなるため(Socié et al., 1999)、症状や対処方法に関する十分な情報提供は、早期発見・早期治療、質の高いセルフケアにつながり意義は大きい。また、回復への期待と実際の回復速度が合わないことで抑うつが増悪する傾向があり、患者には回復過程や時間がどんなもので、期待と相反する可能性があることをあらかじめ知らせておくべきであり(McQuellon et al., 1998)、看護師が早期から情報を伝える準備性を持つ必要があると考える。さらに、性腺機能障害や外見の変化、食事や運動、心理変動対応等の晩期障害や日常生活に関する情報が、指導ツールでは記載が少なく、看護師の中の重要度も低いため、患者へ十分な情報が伝えられておらず(文献24,25)、支援が行き届いていない可能性があると考えられる。その結果、患者は【味覚障害・食思不振がある時の食事の提案】、【セクシュアリティにまつ

わる家族の関係性に関わる相談】、【長期療養に伴う治療費負担を軽減するための情報提供や支援】、【晩期障害に伴い社会的役割が果たせない葛藤への対処やケア】、【在宅療養中に抱えている晩期障害や不安に関する周囲の理解や支援】に対しても満たされないニーズを持ち、これらは個々で感じ方も異なる独自性の強い潜在的な問題であると考えられた。食事に関しては、患者は唾液量減少や味覚変化により食事量が回復せず、意欲や活力も奪われ、体力の回復も遷延するため、食生活が様々な影響を及ぼし、QOLが低下する(関根ら, 2009)。また、社会的問題に関しては、長期に渡ってGVHDによる外見の変化に対処しながら、社会生活を拡大させていくため(日本造血細胞移植学会, 2019)、ボディーイメージの変容は社会復帰に大きく関わり、経済的な問題にも直結して不安が増大する。性的問題に関しては、移植後、妊孕性を喪失する頻度が高く、前処置や慢性GVHDの影響による性交痛、移植に伴う外見の変化による性的魅力の喪失等精神的負担も大きく、若年期の患者や家族にとってセンシティブで大きな問題であり、医療者へ相談しづらい現状がある(渡邊, 2009)。心理社会的問題に関して、患者は身体症状、社会復帰、妊孕性、再発への不安等複雑で絡み合った様々な困難に対して心理的ストレスを抱えており(竹内ら, 2012)、不安解消のためにLTFUの受診を希望し、相談相手を求めている(文献18)。

しかし、これらの患者が求める多くの支援は、看護師の成功体験が重要で、患者と看護師の相互関係が影響するとされており(文献29)、看護師は必要な支援を提供できるよう【患者との関係性の構築】に努めていることが明らかとなった。血液内科の看護師は患者や家族への心理的支援や意思決定支援に対して困難感が強く、患者との関係性構築に対する困難感から患者へ積極的に関わる対処をしていた(村田, 2017; 永井ら, 2021)。さらに、診療報酬上入院体制の整備は進んでいるが、不十分な個別的支援体制により、患者が退院後から長期的に抱える困難度が高い身体・精神的問題への対処は、患者自身の熱意と取り組みに依存していると言われている(外崎, 2017)。したがって、看護師が行っている退院支援は、入院中のケアと変わらず、患者が求める個別的で複雑な潜在的ニーズまで包含した退院支援は実施できておらず、患者は困りごとに対して自分自身で対応している

という結果につながったと考えられる。しかし、高度な能力やスキルを有する高度実践看護師による介入では、信頼関係の強化や患者の対処能力が向上し、退院後安心して生活の再構築へ移行出来ていたため(文献30)、入院中から患者との信頼関係の構築・強化や退院後を見据えた関わり・介入の重要性が示唆されたと考える。

看護師は患者の潜在的で複雑な満たされないニーズがあることを把握し、個々の患者が持つニーズを発達段階や社会・生活・家族背景等多方面からアセスメントし、個別に対応した情報提供や相談相手となり、支援者として寄り添うことが重要だと考える。しかし、造血器腫瘍患者は特徴的で否定的な情報量に圧倒され、精神的苦痛が増大する恐れもあるため(Jim et al., 2014)、個別のニーズに合わせて伝える情報量と時期は十分に検討する必要がある。また、看護師だけではなく、移植患者は同病者からの情報も求めており(Jim et al., 2014)、患者同士の情報交換で、同じ悩みを持つ存在が精神的負担を軽減させ、晩期合併症の対処法を学ぶこともあるとされているため(日本造血細胞移植学会, 2019)、同病者とのネットワークの構築支援も看護師の重要な役割である(Yoshida et al., 2005)。さらに、ニーズを捉えた効果的な退院支援の実現には、看護師の成功体験や患者との関わりに対する困難感の軽減が重要であり、看護師は積極的に勉強会や研修等に参加し、スキルアップしていく必要がある。そのためには、退院支援の適切性を検討する場が必要で、その成功体験が患者や家族の退院後の生活を意識して関わる動機づけとなり、より良い支援につながる(木場ら, 2017)。よって、カンファレンスや事例検討を重ねることも、造血器腫瘍患者が抱える特徴的な困難やニーズを把握する機会となり、経験の蓄積につながると考える。

国外では積極的に個々の患者が抱える多種多様なニーズに対応できるよう多職種のミーティングを重ね、【晩期合併症管理と生活の質担保のための継続ケア】を提供するため、構造化された退院プロセスを踏んでいた(文献26,27,28)。退院後も様々な困難を抱える造血器腫瘍患者を包括的にケアするための多職種連携は必要不可欠であり、病棟と外来で患者・家族と多くの時間を共有し情報を持つ看護師が中心的役割を果たす意義は大きい(日本造血細胞移植学会, 2019)。国外ではニーズの多様

性を考えた均一した質の高い看護が継続して提供できるシステム構築がされていたが、国内で同様の多職種と連携した退院プロセスを経ている退院支援に関する文献は見当たらなかった。また、国外では日本より早期にLTFUが開始されている背景から、研究数は多いと考えられるが、今回の検索結果では抽出されなかったため、より洗練した検索語の選定と検索方法に課題があると考え、今後検討したい。

## VI. 結 論

1) 文献から抽出された造血器腫瘍患者の退院後の生活におけるニーズの要素は、【在宅における具体的な感染予防の相談】、【筋力低下に対する運動療法や身体的症状への具体的な対処方法の提案】、【味覚障害・食思不振がある時の食事の提案】、【セクシュアリティにまつわる家族の関係性に関わる相談】、【長期療養に伴う治

療費負担を軽減するための情報提供や支援】、【晩期障害に伴い社会的役割が果たせない葛藤への対処やケア】、【在宅療養中に抱える晩期障害や不安に関する周囲の理解や支援】の7個が特定された。看護師の退院支援における要素は、【感染症予防やGVHDの関連事項を優先的に考えた情報提供】、【晩期合併症管理と生活の質担保のための継続ケア】、【患者との関係性の構築】の3個が特定された。

2) 患者は退院後も様々な困難を抱え、個々に応じた支援を求めているが、患者が退院後の生活に求めるニーズと看護師の退院支援は一致しておらず、退院支援の不足が明らかとなった。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文 献

- 相原優子, 佐藤栄子, 橋本秀和ほか (2004). 造血器腫瘍のために通院しながら社会生活を送っている20代・30代の人々の希望について. 日本看護科学会誌, 24(4), 83-91.
- Cooke, L., Grant, M., Gemmill, R., et al. (2012). Discharge Needs of Allogeneic Transplantation Recipients. *Clinical Journal of Oncology Nursing*, 16(4), 142-149. <https://doi.org/10.1188/12.CJONE.142-E149>
- Crooks, M., Seropian, S., Bai, M., et al. (2014). Monitoring patient distress and related problems before and after hematopoietic stem cell transplantation. *Palliative & Supportive Care*, 12(1), 53-61. <https://doi.org/10.1017/S1478951513000552>
- 藤塚未奈子, 伊藤まゆみ, 栗津朱美ほか (2016). 外来化学療法を受けるがん患者のセルフケア能力に関連する要因の検討. 共立女子大学看護学雑誌, 3, 29-37.
- 後藤真美子, 澤村侑香里, 上村和恵ほか (2011). 造血器腫瘍に対する化学療法目的で長期入院した患者の社会復帰に至るまでのプロセス—日常生活上の問題に焦点をあてて—. *人間看護学研究*, 9, 37-43.
- Grant, M., Cooke, L., Bhatia, S., et al. (2005). Discharge and unscheduled readmissions of adult patients undergoing hematopoietic stem cell transplantation: implications for developing nursing interventions. *Oncology Nursing Forum*, 32(1), 1-8. <https://doi.org/10.1188/05.onf.e1-e8>.
- Häfliger, J., Kellerhals, S. D., Grossmann, F., et al. (2023). „Sich zuhause sicher fühlen“ beginnt im Spital: Eine qualitative Studie zum Erleben von Patient\_innen einer APN Hämatologie. *Pflege*, 36(1), 31-39. <https://doi.org/10.1024/1012-5302/a000899>
- 平田佳子, 藤田佐和, 鈴木志津枝 (2009). 造血幹細胞移植後に慢性GVHDを発症した患者のボディ・イメージ. *高知女子大学看護学会誌*, 34(1), 36-43.

- 人見貴子, 田中真琴, 佐藤栄子ほか (2008). 造血細胞レシピエントの移植後療養生活に関する情報提供の施設間差. 日本がん看護学会誌, 22(2), 47-51.
- 人見貴子, 田中真琴, 佐藤栄子ほか (2010). 同種造血細胞移植レシピエントの療養生活に関する看護師からの情報提供内容. 日本がん看護学会誌, 24(1), 13-22.
- 稲本賢弘 (2017). 移植後長期フォローアップと慢性GVHD. 日本造血細胞移植学会雑誌, 6(2), 84-97.
- 石田和子, 荻原薫, 石田順子ほか (2005). 造血幹細胞移植患者が退院後に遭遇する困難と移植後の生活を再構築できる要因. The Kitakanto Medical Journal, 55, 97-104.
- 石田和子, 下田薫, 中村美代子ほか (2000). 骨髄移植患者の退院後における適応問題の分析. 群馬大学医学部保健学科紀要, 20, 41-47.
- 泉義雄 (2021). エリクソンと人間の生涯発達段階. 薬理と臨床, 31(2), 59-66.
- Jim, H. S. L., Quinn, G. P., Gwede, C. K., et al. (2014). Patient education in allogeneic hematopoietic cell transplant: what patients wish they had known about quality of life. Bone Marrow Transplantation, 49(2), 299-303. <https://doi.org/10.1038/bmt.2013.158>
- 片桐和子 (2014). 外来通院している造血器腫瘍患者の感染から身を守る生活. 福島県立医科大学看護学部紀要, 16, 7-15.
- 片岡純, 佐藤禮子 (2009). 悪性リンパ腫患者の外来治療期から寛解期における病気を克服するための統御力(mastery)獲得のプロセス. 千葉看護学会誌, 15(2), 1-8.
- 加藤麻衣, 北谷幸寛, 八塚美樹 (2019). 初期治療を受ける造血器腫瘍患者の在宅療養における気がかり. 富山大学看護学会誌, 18(1), 1-10.
- 川嶋元子, 森昌美, 松宮愛ほか (2015). 病棟看護師の退院支援の現状と課題 —患者が地域へ安心して戻るために— 聖泉看護学研究, 4, 29-38.
- 木場しのぶ, 齋藤智江 (2017). 急性期病院におけるがん患者への退院支援 —病棟看護師と退院調整看護師の協働との関連性—. 日本看護科学会誌, 37, 298-307.
- 国立がん研究センター(2019年7月22日). 移植の際の副作用・合併症. がん情報サービス. <https://ganjoho.jp/public/diagnose/treatment/HSCT/hsc03.html>
- 国立がん研究センター(2022年10月5日). 「がん統計」(厚生労働省人口動態統計). がん情報サービス. [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/cancer/27\\_aml.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/cancer/27_aml.html)
- 近藤美紀 (2017). 【血液がん～最新治療と支持療法～】(第II章)最近の血液がん治療 看護の視点. がん看護, 22(2), 104-108.
- 厚生労働省(2021年9月30日). 医療施設(動態)調査・病院報告の概況. [https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/21/dl/11\\_gaikyou03.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/21/dl/11_gaikyou03.pdf)
- 厚生労働省(2021年3月3日). 造血幹細胞移植医療の現状と対策について. 第58回造血幹細胞移植委員会, 資料1. <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000746929.pdf>
- 久保江里, 大川百合子 (2020). 治療を受けながら生活する血液がん患者の情報ニーズ. 南九州看護研究誌, 18(1), 27-35.
- 黒澤彩子 (2017). 造血幹細胞移植後長期フォローアップ専門外来(LTFU)の現状と課題. 臨床血液, 58(10), 2111-2123.
- 刘姍, 刘娟娟, 刘琪, et al. (2019). 出院计划模式对淋巴瘤化疗病人生命质量的影响. Chinese Nursing Research, 33(22), 3971-3974. <https://doi.org/10.12102/j.issn.1009-6493.2019.22.033>
- McQuellon, R. P., Russell, G. B., Rambo, T. D., et al. (1998). Quality of life and psychological distress of bone marrow transplant recipients: the “time trajectory” to recovery over the first year. Bone Marrow Transplantation, 21(5), 477-486. <https://doi.org/10.1038/sj.bmt.1701115>
- 森文子, 黒澤彩子, 山口拓洋ほか (2022). 急性白血病患者が治療後に経験する生活上の困難間とその対処に関する検討—健康関連QOLの側面に基づく質的分析—. 日本造血・免疫細胞療法学会雑誌, 11(3), 177-186.

- 村田香織, 城丸瑞恵, 仲田みぎわ (2017). 造血器腫瘍患者・家族をケアする看護師が感じる困難と対処～中堅看護師のインタビューから～. 北日本看護学会誌, 20(1), 1-11.
- 永井真帆, 森本美智子 (2021). 造血器がん患者の看護において看護師が抱く困難感と関連因子. 日本慢性看護学会誌, 15(1), 13-21.
- 永井庸央, 遠藤恵美子 (2009). 造血幹細胞移植を受けて困難な状況で長期外来通院を続ける成人前期男性患者への看護支援と病気体験の変化. 日本がん看護学会誌, 23(1), 21-30. <https://doi.org/10.18906/jjscn.2009-23-1-21>
- 永井庸央, 藤田佐和 (2017). 外来通院する造血細胞移植後早期の患者のライフコントロール. 日本がん看護学会誌, 31, 92-100.
- Nakagaki, M., Gavin, N. C., Hayes, T., Fichera, R., et al. (2022). Implementation and evaluation of a nurse-allied health clinic for patients after haematopoietic stem cell transplantation. *Supportive Care in Cancer : Official Journal of the Multinational Association of Supportive Care in Cancer*, 30(1), 647-657. <https://doi.org/10.1007/s00520-021-06461-w>
- 中澤洋子 (2015). 再発造血器がん患者の病気体験 一病気の受け止め方と向き合い方を中心に一. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 11(1), 3-10.
- 日本造血細胞移植学会(編)(2019). 同種造血細胞移植後フォローアップ看護(改訂第2版). 東京都: 株式会社南江堂.
- 日本造血細胞移植学会ガイドライン委員会(編) (2017). 造血細胞移植学会ガイドライン 移植後長期フォローアップ 第4巻. [https://www.jstct.or.jp/uploads/files/guideline/04\\_01\\_tfu.pdf](https://www.jstct.or.jp/uploads/files/guideline/04_01_tfu.pdf)
- Oguz, G., Akin, S., Durna, Z. (2014). Symptoms After Hospital Discharge Following Hematopoietic Stem Cell Transplantation. *Indian Journal of Palliative Care*, 20(1), 41-49. <https://doi.org/10.4103/0973-1075.125558>
- 大庭貴子, 習田明裕 (2020). 造血幹細胞移植において看護師が困難感を抱える場面とその影響要因. 日本移植・再生医療看護学会誌, 15, 14-26.
- 大塚敦子, 木曾夕美子, 柳原清子ほか (2014). 高齢者が造血幹細胞移植を自らの生き方に意味づけるプロセス. 日本がん看護学会誌, 28(2), 5-14.
- Parisek, M., Loss, J., Holler, E., et al. (2021). "This Graft-vs.-Host Disease Determines My Life. That's It."-A Qualitative Analysis of the Experiences and Needs of Allogeneic Hematopoietic Stem Cells Transplantation Survivors in Germany. *Frontiers in Public Health*, 9, 687675. <https://doi.org/10.3389/fpubh.2021.687675>
- Prince, M., Allen, D. H., Chittenden, S., et al. (2019). Improving Transitional Care: The role of handoffs and discharge checklists in hematologic malignancies. *Clinical Journal of Oncology Nursing*, 23(1), 36-42. <https://doi.org/10.1188/19.CJON.36-42>
- 関根奈光子, 神田 清子 (2009). 造血幹細胞移植患者の唾液の変化が食生活に及ぼす影響とその対処. 群馬保健学紀要, 29, 51-61.
- 島田美華, 藤田佐和, 森本悦子ほか (2019). 造血器腫瘍患者のエンパワーメントを支える退院支援. 高知女子大学看護学会誌, 45(1), 96-107.
- 城丸瑞恵, 水谷郷美, 佐藤明紀ほか (2023). 乳がん患者の退院支援内容に関する知識と病棟看護師から受けた退院支援内容・方法・満足度. 北日本看護学会誌, 25(2), 19-29.
- Socié, G., Stone, J. V., Wingard, J. R., et al. (1999). Long-term survival and late deaths after allogeneic bone marrow transplantation. Late Effects Working Committee of the International Bone Marrow Transplant Registry. *The New England Journal of Medicine*, 341(1), 14-21. <https://doi.org/10.1056/NEJM199907013410103>
- 外崎明子 (2003). 我が国の造血細胞移植後患者のヘルスプロモーションにおける看護支援の展望. 日本がん看護学会誌, 17(2), 4-12.

- Sundaramurthi, T., Wehrlen, L., Friedman, E., et al. (2017). Hematopoietic Stem Cell Transplantation Recipient and Caregiver Factors Affecting Length of Stay and Readmission. *Oncology Nursing Forum*, 44(5), 571-579. <https://doi.org/10.1188/17.ONF.571-579>
- 高山信之 (2013). 造血器腫瘍治療の現状と展望. *杏林医学会雑誌*, 44(2), 113-119.
- 竹内麻理, 岡本真一郎 (2012). 【造血器腫瘍学－基礎と臨床の最新研究動向－】造血器腫瘍cancer survivorsの長期的メンタルケア. *日本臨床*, 70(2), 761-766.
- 塚越真由美, 黒澤彩子, 棟方理 (2018). 自家造血幹細胞移植後の晩期合併症と長期フォローアップ外来に関する単施設の横断的調査. *日本造血細胞移植学会雑誌*, 7(4), 132-137.
- 上野理江, 島田美鈴, 中西純子 (2018). 同種造血幹細胞移植を受けた患者の退院後の困難と対処. *愛媛県立医療技術大学紀要*, 15(1), 9-17.
- Warsame, R., Kasi, P. M., Villasboas-Bisneto, J. C., et al. (2016). Transition of Care for Inpatient Hematology Patients Receiving Chemotherapy: Development of Hospital Discharge Huddle Process and Effects of Implementation. *Journal of Oncology Practice*, 12(1), 88-94. <https://doi.org/10.1200/JOP.2015.005785>
- 渡邊知映 (2009). 看護と性 血液がんとセクシュアリティ. *日本性科学会雑誌*, 27(1), 75-77.
- 山口美智子, 上岡澄子, 石倉浩人 (2007). 造血幹細胞移植を受けた造血器腫瘍患者の病みの体験と看護援助. *日本がん看護学会誌*, 21(1), 48-56.
- 横田宜子, 上村智彦, 藤丸千尋ほか (2015). 同種造血幹細胞移植を受けた男性患者の退院後生活に配偶者が対処し折り合いを付けるプロセス. *Palliative Care Research*, 10(3), 201-208.
- Yoshida Kumiko, Kanda Kiyoko. (2005). The Influence Factors of Self-Care Achievement and Nursing of Hematopostema Outpatients. *The Kitakanto Medical Journal*, 55(4), 361-366.

# Domestic and International Literature Review Regarding Hospital Discharge Support for Patients with Hematopoietic Tumors

– Hospital discharge support for patients with hematopoietic tumors –

Ayana Matsumoto<sup>1)</sup>, Yuko Kawasaki<sup>2)</sup>

## Abstract

[Purpose] This study uses previous domestic and international research to clarify the details of hospital discharge support conducted by nurses for patients with hematopoietic tumors and how this support corresponds with the post-discharge needs held by patients'. This study identifies potential issues in current hospital discharge support practices and notes useful suggestions for nursing practice.

[Methods] The ages of the analysis documents were not considered. Using Ichushi-Web and PubMed, CHINAL Ultimate, MEDLINE Ultimate, the following keywords were searched: "hematopoietic tumor" or "lymphoma" or "hematopoietic stem cell transplant" or "allogenic transplant" or "hospital discharge" or "transitional care" or "nursing" (original keywords in Japanese). In combination with a manual search, a total of 30 documents were selected for analysis.

[Results] There were seven elements extracted from the literature concerning hematopoietic tumor patients' post-discharge daily needs, including: "consultations regarding specific infection prevention at home;" "proposals for exercise therapy for muscle weakness and specific ways to deal with physical symptoms;" "suggestions for meals when [ they] have taste disorders or loss of appetite;" and "consultations regarding family relationships pertaining to sexuality." There were three identified elements of hospital discharge support conducted by nurses: "provision of information, with priority given to matters related to infectious disease prevention and GVHD," "continued care for managing prolonged symptoms and ensuring quality of life," and "building relationships with patients."

[Conclusion] Patients faced various difficulties even after being discharged from hospital and required support that was tailored to their needs, but the daily needs of post-discharge patients did not match the discharge support provided by nurses, with it becoming clear that there was a lack of hospital discharge support.

Key Words: Hematopoietic tumor, Hospital discharge, Nursing support

---

1) Cancer Nursing, Master's Program, Graduate School of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Clinical Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo



# COVID-19パンデミックにおける 看護学生のメンタルヘルスの不調に関する文献研究 － 4か国6件の質的研究より －

曲 渕 時<sup>1)</sup>, 丸 光恵<sup>2)</sup>

## 要 旨

### 【目的】

COVID-19パンデミック（以下COVID-19）下において看護学生を対象として行われたメンタルヘルスの不調に関する質的研究の文献を網羅的に検索し収集する事と、それらの文献の特徴や内容を明らかにする事とした。

### 【方法】

2023年7月3日にMEDLINEとCINAHLを用い、シソーラス用語「student」「Mental Health」「COVID-19」について、関連用語も含めて検索を行った。各文献における対象者は看護学生とし、COVID-19におけるメンタルヘルスを主題とした質的研究とした。アルコール等の「薬物依存」に関する文献は除外した。CINAHLで132件、MEDLINEで213件ヒットした論文を、著者らが2人でスクリーニングを行い、CINAHLで4件、MEDLINEで2件を分析対象とした。

### 【結果】

看護学生のメンタルヘルスの不調は感染予防を目的とした生活環境の変化によるものであった。医療機関に就労した看護学生は「勤務に伴う葛藤」や「負担感」を感じていた。留学生を対象とした研究では不眠等の症状を訴えていた。学生は身近な人々のサポートと共に、体験を前向きにとらえる事や、社会的役割を見出す事で対処していた。

### 【結論】

留学生および医療機関で勤務する看護学生はメンタルヘルスの不調に陥りやすく、ピアサポートだけでなく、カウンセリングサービスや精神科受診につなぐ必要がある事が示唆された。看護学生のメンタルヘルスの不調を予防するには、体験をポジティブに意味づける事と、自身の存在について社会的価値を見出せるような支援が重要と思われた。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、COVID-19、メンタルヘルス、看護学生、対処

---

1) 兵庫県立大学看護学部4年

2) 兵庫県立大学 看護学部 小児看護学

## I. 諸 言

WHO (世界保健機構) は、2020年3月に新型コロナウイルス (COVID-19) による感染症をパンデミックと認定した。以来、大学教育の場においても感染拡大による休講やクラブ活動の停止、外出自粛要請がなされた。国内外ではCOVID-19感染拡大による大学生のメンタルヘルスへの影響について数多くの量的研究が行われており、抑うつ、不安、ストレスなどの精神状態に陥っていることが明らかになっている (Mulyadi et al., 2021)。これらは世界同時に発生しており、これまでメンタルヘルスに問題の無かった学生が不調になるなど、従来の学生には起こりえない傾向も報告されている (Singh et al., 2021)。

メンタルヘルスの不調の要因は、女性である事、慢性疾患患者である事や身近に感染者がいる事などの感染リスクや、家族や大学からの心理的サポートが不足している事と報告されている (Ghazawy et al., 2021)。特に女性である事は大きな要因であり (Saucedo-Uribe et al., 2022; Sequeira et al., 2022; Wynter et al., 2021) 女性割合の多い看護学生にはメンタルヘルスの不調が多く発生したと推察され、それは医療とは関係のない専門分野を学ぶ学生とは異なる可能性がある。COVID-19感染拡大により看護学生が体験したメンタルヘルスの不調や、対処の実際について具体的に明らかにすることで、看護学生が安定したメンタルヘルスを維持することへの示唆が得られるのではないかと考えた。そこで本研究の目的をCOVID-19下において看護学生を対象として行われたメンタルヘルスの不調に関する質的研究の文献を網羅的に検索し収集する事と、それらの文献の特徴や内容を明らかにする事とした。

## II. 方 法

### 1. デザイン

本研究のデザインは、質的研究を対象とした文献研究である。

### 2. 選択・除外基準

対象者は養成課程が学士課程である看護学生とし、大

学で看護学および助産学を学ぶ学生とした。国・地域・年齢は問わないこととした。本研究におけるメンタルヘルスとは、精神的な不調ストレス、悩み等とし、「心理・精神的な問題を主題として扱っている論文」を選択した。COVID-19に関連するものを対象とするため、発表年を2020年以降とした。質的研究のデザインは、現象学、グラウンデッドセオリー、エスノグラフィー、質的記述的研究の4種類とした。

除外基準は、「飲酒・薬物使用」、「心理的問題が背景にない介入」、「メンタルヘルスの不調がメインテーマでない文献」を除外した。日本人はアルコール依存や薬物依存者が少ない事 (WHO, 2018; 厚生労働省, 2018)、本研究では病的ではないメンタルヘルスの不調について取り上げていることから、「飲酒」と「薬物依存」を用いてメンタルヘルスを評価している文献は除外した。さらに、対象者に「看護学生以外の学生が含まれているもの」を除外した。

### 3. データベース

データベースはMEDLINE とCINAHLを用いた。さらに質的研究デザインのシステムティックレビューも検索するためMEDLINE、コクランシステムティックレビューデータベース、JBIエビデンス統合データベースの予備検索を実施したが、このトピックに関するシステムティックレビューまたは、スコーピングレビューは見つけられなかった。

### 4. 検索方法

2023年7月3日にMEDLINEとCINAHLを用いて、検索用語を「student」、「Mental Health」、および「COVID-19」とし、メンタルヘルスの不調について網羅的に検索するために関連用語である「Depression」や「Anxiety」等も含めて検索を行った。MeSH用語がないものは、キーワードとして検索を行った。検索は検索で使用する用語や絞り込みのパターンを複数種類実施し、関連のない論文のヒット数が多い場合は用語や絞り込みパターンを変更してやり直しを行った。最終的な検索プロセスを表1に示す。これらの検索過程全てにおいて、検索司書のアドバイスを得た。

2023年6月5日と11月17日に医中誌webを用いて、シ

ソース用語「看護学生」と「COVID-19」をAND検索したところ342件がヒットした。これを「原著論文」と「会議録を除く」絞り込み検索を行い125件ヒットした。質的研究を抽出するため、ソース用語で「現象学」、「グラウンテッドセオリー」、ソース用語にないものはAll Fieldの検索用語「エスノグラフィー」「質的記述的研究」を用いてOR検索をおこなった。これと先の125件をAND検索したところ、2件の論文がヒットした。1件は1年の保健師課程の学生の学習に関する心理プロセスに焦点を当てたものでありメンタルヘルスの不調についての内容ではなく(北本 et al., 2022)、もう1件は災害訓練に関するもので(黒澤 et al., 2022)、いずれも適格基準に当てはまらない論文であったことから除外した。

5. 検索結果

MEDLINEで213件、CINAHL132件ヒットした、合計文献数345件のすべてをスクリーニング対象とした。CINAHLで検索を行う際、MEDLINEに掲載されている文献を除外した上で検索を行ったため重複した文献はなかった。筆者ら2名がそれぞれタイトルと抄録のみを読み、選択基準に沿ってスクリーニングを行った。次に選択された文献の全文を筆者ら2名がそれぞれ読んだ上、選択基準に沿ってスクリーニングを行った。文献を選択する際に著者間で意見の相違が生じた場合は話し合いを

行い、分析対象に含めるかどうかを決定した。最終的にCINAHLで4件、MEDLINEで2件の論文を分析対象とした。これらのプロセスと、基準を満たさない文献の除外理由をフロー図(図1)に示した。

6. 分析方法

分析対象論文6件について、「調査を実施した国」、「目的」、「調査方法」、「対象者」、「データ収集・分析」、「結論」を抽出し、表にまとめた(表2)。6件のうちインタビュー法を用いた4件(質的記述的研究1件、現象学的研究3件)の論文中にあるカテゴリーをすべて抽出し、筆者ら2名で各カテゴリーについて検討し、類似性の高いものをまとめて再度カテゴリー化したものを表に示した。

III. 結果

1. 選択した文献の特徴

分析対象論文を国別でみると、アメリカ合衆国(以下、米国とする)2件、スペイン2件、トルコ1件、チリ1件であった。質的記述的研究が3件、現象学的研究が3件であった。自由記述式のアンケート調査法を用いていたものは2件であり、どちらも質的記述的研究であった。対象者は、COVID-19により実習が中止となった上に専門職の補助者として就労した看護学生を対象とした研究

表1 MEDLINE・CINAHLにおける検索枠組みと検索用語

検索枠組	Population	Concept	Context
	学生	メンタルヘルス	COVID-19
検索用語	"student" MH "Students+"  絞り込み条件 SubjectAge: - adult: 19-44 years	MH "Mental Health" MH "Depression" MH "Anxiety+" "emotional well being" "stress" "mental hygiene" NOT "drug" (MH "Alcohol Drinking+")	MH "COVID-19+" MH "Pandemics" MH "Epidemics+" "COVID-19 pandemic" MH "Coronavirus+"
CINAHLの検索用語	同上	同上	MH "COVID-19+" MH "COVID-19 Pandemic" "Pandemics" "Epidemic" MH "Coronavirus+"

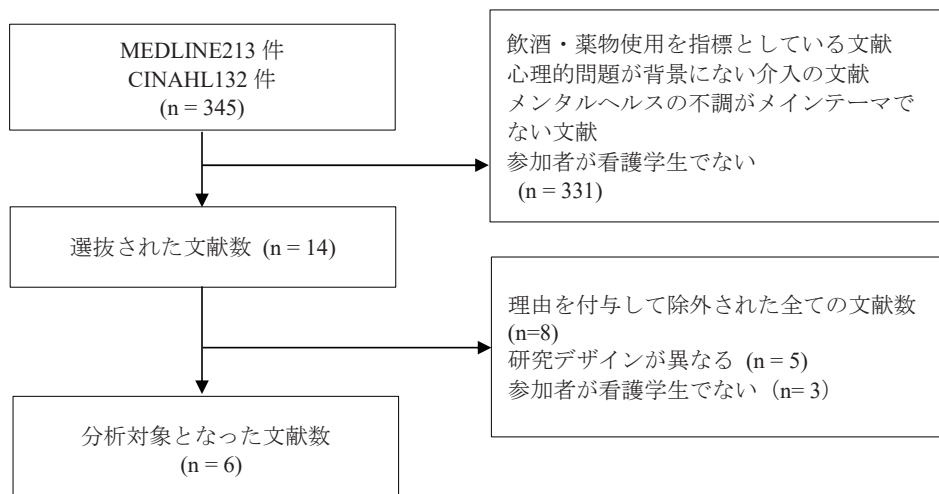


図1分析対象文献選定フロー図

が4件、オンライン学習を受けている看護学生を対象としたものが2件であった。

## 2. アンケート調査の自由記述の特徴

アンケート調査の自由記述を分析した研究は2件であった。チリの看護学生に関する研究は、実習に対するReflection（内省）により、COVID-19患者のケア経験に関連する看護学生のメンタルヘルスを探求したものであった。一方、米国の研究はCOVID-19による実習中断経験について、メンタルヘルスへの影響に関連する8項目の質問により回答を求めている。以下【】内に各論文に示された大カテゴリー名を示す。

### 1) チリ

チリの看護学生（5年生）13名を対象に、COVID-19患者を対象とした実習を行った「経験」について自由記述で尋ねた研究(Farfán-Zúñiga et al., 2022)では、内容分析を用いて看護学生のメンタルヘルスに関連した3つのテーマを見出していた。

看護学生は非常に困難でストレスフルな状況下に置かれており【(1) Facing with very difficult and stressful situation】、長時間労働による精神的・肉体的疲労や家族に感染リスクが高まる不安や恐怖を感じていた。また、COVID-19患者への看護が必要最低限になってしまうことへの葛藤やCOVID-19患者の死期に家族との時間をつくるのが困難な事への怒りを訴えていた。このような状況の中、学生らは友人や家族、先生や他の医療従

事者、患者から電話や手紙、感謝の言葉などのサポートを受け、困難な状況にいるのは1人ではないと感じ働く原動力になっていた【(3) Experiences disciplinary learning and personal growth】。また、COVID-19時だからこそその適応能力やチームワーク、ストレス緩和法を実践し、達成感や自己成長につながったと述べていた【(2) Recognizing different coping styles in different moment】。

### 2) 米国

米国の最終学年の看護学生を対象に「実習が突然中断された経験」を把握する事を目的とした研究(Diaz et al., 2021)では、24名分の記述内容をInductive content analysis用いて分析していた。看護学生のメンタルヘルスの状態は孤独感【II. Feeling alone & inability to escape】で占められており、友達と直接会えない喪失感やCOVID-19がいつまで続くのか分からない不安といったマイナスな感情を訴えていた。また通常的生活システムが壊され【I. Breaking down of normal system】、自分達の教育やキャリアの不安、オンライン学習による窮屈さや直接友達と会って勉強し合ったりすることが出来ない苦痛を感じていた。このような状況に対処するために、自分で行える趣味や、好きな人とzoomをした事と、医療従事者として働く事によって自分が社会の役に立っているという実感を得た事が、ストレスを軽減することに繋がったと述べていた【III. Protective factors/adaptability】。さらに、医療に貢献できたという経験や

表2 分析対象論文の概要

研究デザイン	現象学	質的記述的
著者, 発表年	Wallace, et al. 2021	Farfán-Zúñiga, et al. 2022
国	米国	米国
目的	トルコで助産学を学ぶ留学生の生き残った体験と認識	COVID-19時に5年生の看護学生が専門的実習をした経験
調査方法	・対面インタビュー ・オンラインインタビュー	・オンライン調査 (Google フォーム) ・オンライン調査 (電子メール)
インタビュー内容	・遠隔学習への移行について(内容が深堀)など ・パンデミックのプロセスによる人間関係、社会生活への影響 ・教育や精神的健康への影響 ・再びパンデミックが起きたときケアについての改善点	・パンデミックの影響 ・COVID-19時のHAの活動内容とその経験への意味 ・人々の尊厳を守るための経験と対処法 ・困難なとき助けられた存在 ・HAとして何を学んだか ・家族や患者とのコミュニケーション ・文章を書くことや自己省察
対象者	・N=11 ・太平洋岸北西部の大学の看護学部3・4年生 ・対面授業からオンライン学習へと移行	・N=18 ・COVID-19により実習中止 ・health care professional relief contractを自発的に結んだ看護学生 (4年生)
	・N=10 ・COVID-19により実習中止 ・HA*として病院に採用された看護大生4年生	・N=24 ・実習が突然中断した看護学生 ・最終学年(2020年)の看護学生で、夏か秋に卒業する者

表2 分析対象論文の概要 (続き)

研究デザイン		現象学		質的記述的		
著者, 発表年	Wallace, et al. 2021	Koc, et al. 2022	Casafont, et al. 2021	Velarde-García, et al. 2022	Farfán-Zúñiga, et al. 2022	Diaz K, et al.2021
その他の属性	記載なし	記載なし	女子学生	記載なし	記載なし	半数が有資格者
年齢	記載なし	19~34.6 歳	記載なし	22~30 歳	22~28 歳	28 歳
データ収集 分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>半構造化面接</li> <li>現象学的還元を使用(Colaizzi)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>半構造化面接</li> <li>参加者の非言語的コミュニケーションを記録</li> <li>内容分析法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>60 分の面談</li> <li>6つの質問(オープンエンドクエスチョン)</li> <li>Munhall(2007) の分析方法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>半構造化面接</li> <li>参加者の経験・行動をフィールドノートに記載</li> <li>機能的分析・コード化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート調査(週 1 ・アンケート調査を実施 回 1 問・全 7 回)</li> <li>Graneheim &amp; Lundman (2004) の内容分析</li> <li>帰納的内容分析</li> </ul>	
データ収集者	指導教員ではない研究者 2 名	大学に所属する研究者 2 名	病院、大学に所属する研究者 2 名	学生指導に関与した教員	研究者ではない者	学生指導には直接関わりのない研究者
生成された テーマ数	4	8	7	3	3	4
結論	<ul style="list-style-type: none"> <li>オンライン学習への移行は教員・学生にとって困難。</li> <li>学生は驚くべき回復力と忍耐力を示した。</li> <li>学生のストレスに対処し学生参加とコミュニケーション作業を促進する授業を行うべき。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生が自分自身を見つめ直し対処する事で自己成長につながる。</li> <li>家族と離れて暮らす学生は、パンデミックに対処するこが困難であったため教員がオンラインミーティングを行うべき。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>COVID-19 の流行は、看護学生に私生活、仕事に影響を与えた。</li> <li>未経験の医療従事者がストレスフルな状況を乗り切るためには、オリエンテーション、フオーアアップ、情緒的サポートが重要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>パンデミック中は働くことは学生のストレス、不眠、不安につながる。</li> <li>上記の精神的負担を同級生や家族のサポートによって軽減した。</li> <li>大学は学生をサポートするために学生の心理的評価を行い個別に対応するべき。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生はパンデミックという危機的状況下で看護のあり方を学んだ。</li> <li>人間性を高め、医療チームを支援する機会となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習の中断、制限、社会への不安に適応しながら、学生が様々な対処を行った。</li> </ul>

\*Health Aids

患者から感謝されることにより、看護師になるための準備ができたと述べていた【IV. Role identity & Formation】。

### 3. インタビューデータの特徴 (表3~5)

4件の研究すべてがインタビュー調査を基に逐語録を作成し、内容をカテゴリー化していた。スペインの論文2件の看護学生はHealth Aidsとして医療機関で働いていた。米国とトルコの各論文の看護学生は、実習が中止となり、オンライン講義を受講しているのみで、医療機関では就労していなかった。就労の有無により2群に分け、それぞれの研究の主たる結果として記載されたカテゴリーを中心として述べる。尚、各論文に示されたカテゴリー名を[ ]内に記載した。

#### 1) COVID-19パンデミックによって生じる変化

COVID-19パンデミックによって看護学生に生じた変化について、4つの研究のカテゴリーを再カテゴリー化(『』で示す)したものを表3に示す。就労した看護学生は『感染予防を目的とした生活環境の変化』が多様であったが、同様の変化はオンラインの学生にも見られた。中でも『睡眠・休息への悪影響』が顕著であった。

#### (1) 「オンライン講義に切り替わった」看護学生

Wallace (2021) は対面インタビューにより看護学生11名よりデータ収集を行い、看護学生は、オンライン学習に関して、接続不良や質問のタイミングが難しい事といった課題 [Technological challenges] を有したと報告している。また、友人とデスクッションが出来ず、1人で学習するようになったため学習上の人間関係の変化に違和感 [Academic relationship changes] を抱いていた (Wallace et al., 2021)。

トルコにおいて、18名の学生を対象に「COVID-19中にトルコで助産学を学ぶ留学生の生活体験」を目的とした現象学的研究 (Koc et al., 2022) では、規則正しい生活を送ることが困難になり、体重増加 [Gaining weight] や不眠症 [Sleep disorders] になったと述べていた。また、家族やパートナーとの関係も変化 [Relations with partner] した。感染させることが不安なために祖父母に会うことを止めたり [Missing]、親族間のCOVID-19の

感染が原因で結婚話が破談 [Relations with relative] になった学生も報告されていた (Koc et al., 2022)。

#### (2) 「医療機関で救済者として勤務した」看護学生

2件の研究報告はいずれもスペインの首都マドリードの教育病院に関連するものであった。Casafontら (2021) は看護学部最終学年の必須実習を中断され、Health Aidとして採用された10名の看護学生を対象とし、その経験を記述する事を目的とした現象学的研究であった。もう一つは同市内の教育病院で、Health Care Professional Relief Contract (ヘルスケア専門職救済者契約) を結んだ18名の看護学生を対象とした質的記述的研究 (Velarde-Garcia et al., 2022) であった。看護学生は、感染予防を目的とした居住環境の変化により、家族と離れて暮らしたり [Living away from the family]、他の学生及び医療従事者と一緒に住む、同居人との接触を避けるため、できるだけ自分の部屋にいた生活に記述していた。また、家でも病院のことが頭から離れず、夜間に目が覚めてしまったり [Insomnia] [Frequent nightmares and waking at night]、十分な休息が得られない [Lack of rest] といった事も記述されていた (Velarde-Garcia et al., 2022)。

#### 2) メンタルヘルスの実態

看護学生のメンタルヘルスの状況を表す4つの研究のカテゴリーについて、再カテゴリー化したものを表4に示す。『COVID-19感染に関する恐怖』や『生活変化によるメンタルヘルスの悪化』はオンラインの学生に顕著であった一方、救済者として就労した学生は『勤務に伴う葛藤』や『負の感情・負担感』を感じていた。

#### (1) 「オンライン講義に切り替わった」看護学生

Wallace (2021) らは、学生らがストレス [Role stress and strain] を抱えていたと報告していた。それらは特に看護師の母親が自宅から離れて暮らす間、きょうだい世話や家事をしなければいけない事や、家庭内の騒音による学習環境が整えられない事、看護技術を実際に行えない事など多岐にわたった。トルコの報告では、COVID-19によって生じるネガティブな感情のカテゴリーが多数みられ、またその内容も米国の者よりも深刻

表3 COVID-19パンデミックによって生じた変化

カテゴリー名		対象者	オンライン学習を行った看護学生		HAとして働いていた看護学生	
			3・4年生	留学生	Casafont C	Velarde-García JF
再カテゴリー名	オリジナル論文のカテゴリー名	Wallace S	Koc E			
感染予防を目的とした生活環境の変化	Limiting contacts with cohabitants					●
	Measures to limit contagion					●
	Preventive isolation for fear of contagion					●
	Wishing not to cohabit with the family					●
	Living away from the family					●
	Sharing housing with other students and/or health care providers					●
	Social contact at work					●
学習環境の悪化	Internship and applied courses		●			
	Theoretical online courses		●			
	Assignments and exams		●			
	Technological challenges	●				
	Academic relationship changes	●				
感染予防を目的とした住環境の変化	Support among cohabitants who were healthcare workers					●
	Rejection by roommates who are non-healthcare professionals					●
	Missing		●			
睡眠・休息への悪影響	Insomnia					●
	Frequent nightmares and waking at night					●
	Lack of rest					●
	Sleep disorders		●			
自粛による生活の質の低下	Restriction		●			
	Increased time spent on the internet		●			
	Negative changes		●			
家族・親戚・パートナーとの問題	Physical violence		●			
	Relations with relatives		●			
	Relations with partner		●			
食生活の悪化	Changes in eating habit		●			
	Gaining weight		●			
衛生習慣の強化	Hygiene habit		●			
	Increased alcohol use		●			
経済的困難	Financial problems		●			

表4 看護学生のメンタルヘルスの状況

カテゴリー名		対象者	オンライン学習を行った看護学生		HA として働いていた看護学生	
			3・4年生	留学生		
再カテゴリー名	オリジナル論文のカテゴリー名	Wallace S	Koc E	Casafont C	Velarde-García JF	
医療機関に勤務する上での葛藤	Conflicts within the team				●	
	Stress due to type of work performed				●	
	Unclear care process			●		
	Hiding the suffering and not falling apart				●	
	Patient communication			●		
	ambivalent emotions			●		
COVID-19 感染に関する恐怖	Fear of Loss		●			
	Fear of Death		●			
	Fear of Disease		●			
	Fear of Infecting Others		●			
生活変化によるメンタルヘルスの悪化	Depression		●			
	Decreased Social Support		●			
	Loneliness		●			
	Pessimism/Hopelessness		●			
	Role stress and strain	●				
看護助手として勤務に伴う負の感情	Anxiety of being infected				●	
	Emotional burden after arriving home				●	
HA としての負担感	Workload pressure				●	

表5 メンタルヘルスの不調を予防・緩和した要因

カテゴリー名		対象者	オンライン学習を行った看護学生		HA として働いていた看護学生	
			3・4年生	留学生		
再カテゴリー名	オリジナル論文のカテゴリー名	Wallace S	Koc E	Casafont C	Velarde-García JF	
孤独を癒すサポート	Communication with the family				●	
	Family support				●	
	Relations with family		●			
	Relations with friends		●			
	Spending time with family		●			
自分で自分の気分を上げるための行動	Meditation/autosuggestion		●			
	Hobbies/sports		●			
	Cleaning/shower		●			
	Training programs		●			
	coping mechanisms			●		
負の感情のコントロール	Mental disconnection				●	
	Controlling emotions				●	
	Leaving worries at the hospital				●	
COVID-19 パンデミックによる変化をポジティブに捉える	Focusing on the positive seeing it as an opportunity				●	
	Positive changes		●			
	Resilience	●				
看護助手として働いた後のポジティブな感情	Learning			●		
	Team work			●		
職場で自分の体験を共有する	Sharing the experience at work				●	

であった。看護学生は、持病による病気や死への恐怖[Fear of Death] や、家族が感染する事への恐怖 [Fear of Infecting Others] を訴えていた。外出が制限されることによって抑うつ状態[Depression] になった学生もいた。1人暮らしをしている学生は、家族と離れて暮らす時間が長くなり孤独感 [Loneliness] を抱えていた。また、何事にもやる気がなく自分の人生に絶望したり、COVID-19によっていつ自分が死ぬか分からない状況で勉強や労働といった苦勞をしなければならないのか分からない、大切なものは何もない [Pessimism/ Hopelessness] と感じている学生もいた。

### (2) 「医療機関で救済者として勤務した」看護学生

Health Aidの看護学生を対象とした現象学的研究 (Casafont et al., 2021) では、葛藤 [ambivalent emotions]、患者とのコミュニケーション [Patient communication]、不明確なケアプロセス [Unclear care process] といったカテゴリーがみられた。葛藤には、HAとしての役割に誇りを持つ一方で、家族への感染リスクが高まることへの恐怖といった肯定的な感情と否定的な感情をもっていた事が含まれた。また、COVID-19患者を担当した学生は、インターフォンを通じて行う患者とのコミュニケーションにより、実際の患者の表情や様子がみれないことを悲しんでいた。さらに、自分達の仕事のガイドラインが明確でなく、病院のプロトコルが頻繁に変更されることに対して不安に感じていた。

もう一つの看護学生を対象とした質的記述的研究 (Velarde-García et al., 2022) では、働く看護学生が感じる仕事へのプレッシャー [Workload pressure] について述べられていた。看護学生は、病棟や看護の知識が不足している中、他の看護師からのサポートが十分得られず、自分達だけで業務を行っていること仕事へのプレッシャーを感じていた。嫌なことがあると誰もいないところで泣いている学生もいたと報告されていた。また帰宅後も仕事のことが全てよみがえり、精神的負担 [Emotional burden after arriving home] になっている学生もいた。

### 3) メンタルヘルスの不調を予防・緩和した要因

看護学生のメンタルヘルスの不調を予防・緩和した要

因について、4つの研究のカテゴリーを再カテゴリー化したものを表5に示す。孤独を癒すサポートは、就労の有無に関わらず2つの研究で報告された。看護学生が『COVID-19パンデミックによる変化をポジティブに捉える』事はメンタルヘルスの不調を予防・緩和した要因として3つの研究に見られた。

#### (1) 「オンライン講義に切り替わった」看護学生

米国の現象学的研究では、オンライン学習への移行で臨機応変に対応していた [Resilience]。講義後に学生同士で集まって授業の振り返りを行ったり、モデル人形を用いて看護技術の演習を行っていた。また、通学時間の短縮によって自分の時間が増えたため、家族との時間や運動などのセルフケアの時間を取れるようになったといった、良い変化について述べていた (Wallace et al., 2021)。トルコの留学生らは、家族との時間を大切 [Relations with family] にし、ハグによって元気をもらっていると学生がいた。忍耐力を高めたり、前向きに物事を考えたり [Positive changes]、新しい趣味を持つことで[Hobbies/sports] 自ら対処していた (Koc et al., 2022)。

#### (2) 「医療機関で救済者として勤務した」看護学生

スペインの看護学生は看護師になるための技術を身に付けられること [Learning] や、医療チームの一員として働くこと[Team work] といった新しい経験をポジティブにとらえていた。さらに、友人とビデオ通話をしたり、スポーツなどの趣味を行うことで自ら気分転換 [coping mechanisms] を行っていた (Casafont et al., 2021)。

学生と関与したことある教員が半構造化面接を行った研究 (Velarde-García et al., 2022) では、学生は家族からのサポートを受けていた。COVID-19の流行時に就労していたことを家族が誇りに思っており、家族とのコミュニケーション[Communication with the family] を大切にしていた。また、嫌なことがあっても良い面をみるようにしたり [Focusing on the positive seeing it as an opportunity]、深呼吸を行って自分を落ち着かせ感情をコントロール [Controlling emotions] していた。病院から出たら、仕事のことを忘れるべき [Leaving worries

at the hospital]だと先輩からアドバイスもらった学生もいた。精神的負担に対処するために仲間での気持ちを共有し [Sharing the experience at work]、自分の体験は貴重な機会だとポジティブに捉えていた (Velarde-García et al., 2022)。

## IV. 考 察

### 1. COVID-19下における看護学生の生活・学習環境の変化とメンタルヘルスの不調

本研究では、4つのインタビュー調査、2つのアンケート調査の自由記載部分を分析対象とした。これらの研究では、日本の平均的な学士課程の看護学生よりも年齢が高い事、有資格者が含まれている事、年齢等の属性が詳細でないものもあり、メンタルヘルスの不調を来す背景要因が異なる事から、日本の看護学生への応用性は限定的であると考えられる。一方、学士課程に在籍する学生と言う身分である事、COVID-19による自粛生活を強いられた点においては一致しており、国内研究との共通点も見られた。また網羅的検索によりヒットした345件中、本研究目的に合致した質的研究はわずか6件と希少であったことから、上記の限界を踏まえてその特徴を以下に述べたい。

#### 1) 様々な背景の看護学生に共通して見られた特徴

COVID-19以前の研究を見てみると、メンタルヘルスの不調は看護学生に一定数存在する事が示唆されている。またその関連要因として、「物事に掛かる前に色々心配する」といった「消極的な対処行動」や「実習ストレス」、「人間関係」などと報告されている (岩永ら, 2007)。中でも実習中の看護学生は「看護介入に対する困難」や、「自己の看護技術への苛立ち」、「看護過程展開の困難感」といった精神的苦痛が報告されている (中島ら, 2018)。

一方、COVID-19によるメンタルヘルスの不調は、先に述べた看護学生メンタルヘルスの不調よりもより重篤であり、3分の1看護学生が軽度のうつ状態になるという報告がなされている (Patelarou et al., 2021)。特に「孤独感」については、外出自粛で人とのつながりが少なくなる事によるものであり、COVID-19の特徴として他の

災害とは異なっていた。本研究の分析対象となった6件の質的研究においても研究デザインの相違に関わらず、看護学生のメンタルヘルスの悪化はCOVID-19によるものである事が明らかであった。

オンライン学習を行う学生のメンタルヘルスに関する国内の量的研究を見ると、友人とのコミュニケーションの機会が減少している人ほど今後の不安やストレスが高くなっており (井梅ら, 2023)、自宅や室内で過ごす時間の増加は、ストレスや不安の増大と有意に関連することが報告されている (石川 et al., 2022)。本研究で取り上げた質的研究において、同様の悪化を訴えていた。COVID-19は単に社会生活が分断され、孤独に陥るだけでなく、技術やコミュニケーションを実習の中で学ぶ機会を喪失し、感染リスクの高い職務内容やキャリアへの不安も生じやすい事から、キャリア支援と同時に看護学生のメンタルヘルスに関して長期的に支援する事が必要であると考えられた。

#### 2) メンタルヘルスの不調リスクの高い看護学生

メンタルヘルスの不調を増悪させる要因は、学生自身に持病がある場合や、母親が看護師のため家事や育児を代わりに行う必要があるなどの背景をもつ学生であったことが伺えた。また、留学生の場合は、不眠症といった専門的治療が必要と思われる精神的症状も訴えていた。元々留学生は家族と離れて学生生活を送ることで、COVID-19以前から孤独感を抱えていることは考えられる。このような学生の場合は、メンタルヘルスの不調はより深刻なものとなる可能性が示唆された。

## 2. 看護学生のメンタルヘルスの不調への予防と対処

### 1) 体験の意味付け

就労の有無に関わらず看護学生は、自分でできる趣味を見つけセルフケアを行ったり、友人と思いを共有したり、家族や先輩などの多様な周囲の人々のサポートやアドバイス、ハグなどの愛情や思いやりのある言動を得ながら学生生活を継続していた。そのような中で看護学生は、COVID-19による変化をポジティブに捉える事によってメンタルヘルスを保っていたことが伺えた。中でもCOVID-19患者を治療している病棟・医療機関で救済者として就労した学生は、社会的役割を獲得した事によ

り、COVID-19の医療に貢献しているという実感と意義を見出し、看護師になるための準備期間になったと考えるなど、自らの体験を前向きに捉えていた。

Grant と Gino (2010) は、感謝によって自身が社会的に価値ある存在として認められているという感覚である「社会的価値」が生まれ、他者に利益を与える行動を促すことを示唆している。日本においても、東日本大震災時の被災地で継続的なボランティア活動を行った看護学生が、看護学を活かせる自分たちの利点や意義を見出し、やり遂げたという経験を積み重ねたと報告している(曾根志穂ら, 2015)。感謝される職場環境が就労した看護学生の中に社会的価値を生み出し、過酷な就労体験をポジティブに意味付け、メンタルヘルスを維持や看護師として働く心構えにつながったと推察された。

## 2) 留学生および就労した看護学生への対処

COVID-19感染拡大時の医療機関の医療専門職は、患者との直接的な接触により感染リスクが高まる事、またそれによって「ストレス」や「抑うつ」が増大すると報告されている (Eweida et al., 2020)。本研究では、COVID-19による人手不足を解消するために医療機関に就労した看護学生のメンタルヘルスの不調の内容が留学生と同様に深刻であった。その要因として特に無資格者である看護学生がCOVID-19感染の危険に晒された事や、十分な指導もない中で業務を行わなければならない事などにより、「職務内容に関する重圧」が生じた事は、看護学生にとっては過重であったといえる。また、嚴重な感染予防下において、本来実施すべき直接ケアがなごりにされたり、患者とのコミュニケーション不足が生じた事から、罪悪感が生じている事が伺えた。さらに看護学生は家族への感染リスクが高まるといった「葛藤」も訴えていた。COVID-19は世界規模で起きた未曾有の災害であり、心理面の支援が不可欠であると言われていた (Sheek-Hussein et al., 2021)。看護学生が実習を中断され、救済者や補助者として無資格のまま医療機関で働く状況は、まさしく災害時と同じ状況であると言える。

災害時に支援に携わった看護師には、支援活動後に「思いを表出する機会」を作る等の継続的な精神的サポートが必要とされている (山田 茜, 今井多樹子, 高瀬美由紀, 2019)。スペインの看護学生の研究でもメンタル

ヘルスを保つ要因として「自分の思いを仲間と共有した事」が挙げられていた。就労期間終了後の学生を孤独のままにするのではなく、過酷な体験をした者同士のピアサポートが重要であると言える。一方、本研究で取り上げた留学生や医療機関に勤務した学生の中には、不眠や睡眠障害などの重篤な症状を呈した学生もみられた (Koc et al., 2022; Velarde-García et al., 2022)。このようにピアサポートでは対応しきれないメンタルヘルスの不調を抱える看護学生も存在するため、カウンセリングサービスや精神科へ早期につながるような情報提供や、受診支援が必要であったと思われる。

## 3. 本研究の限界

本研究の対象文献の看護学生の属性が日本の学士課程の看護学生とは異なるために、日本の看護学生への応用性には限界がある。またインタビューやデータ収集を行う者が、学生指導に関わっていると思われる大学教員である論文が含まれている点である。そのため、学生が良い自分を見せようとして回答していた可能性は否めない。また分析対象となった質的研究が6件のみであり、対象者もそれぞれ15名前後と小規模な研究で便宜的サンプリングによるものであった事、現象学的研究であってもフィールドワークは含まれておらず、データ収集がオンラインによる単発のインタビューに限られていたことなど、COVID-19感染予防に配慮せざるを得ない調査環境が影響していると思われる。

## V. 結 論

1. 看護学生は感染予防の徹底による生活環境の変化、感染へのリスクによるストレス、他者に感染させてしまうのではないかとという恐怖が大きく、メンタルヘルスの不調は単なる孤独や社会生活からの分断によるものではなかった。中でも留学生や医療機関に就労した学生はメンタルヘルスの不調が著しかった。
2. 就労した看護学生のメンタルヘルスの不調は職務に就くために感染予防を嚴重にする事や就労先の医療機関においては職務内容に関する重圧や、職務内容に関する葛藤と関連しており、留学生と同様に身体症状も有していた事から、カウンセリングサービスや精神科

受診へ早期につなぐための情報提供や受診支援が必要である。

3. COVID-19感染拡大時に看護学生自身が体験をポジティブに意味づける事により、メンタルヘルスの不調を予防したり緩和できる可能性がある。その為には身近な人々による温かい支援と共に、ただ単に受け身な学習者のままでいるのではなく、学生が自分について何らかの社会的価値を見出せるような関わりが重要であると言える。

## 謝辞

本研究にご助言下さった先生方に深謝致します。網羅的文献検索を実施するにあたって、明石看護学術情報館の司書様にアドバイスを頂きました。心より感謝申し上げます。

## 利益相反

この研究に利益相反はありません。

## 文 献

- Ali Akbari . (2019-2021). Study Midwifery in Turkey. (取得日2023年10月30日). <https://medutur.com/2021/07/12/study-midwifery-in-turkey>
- Casafont, C., Fabrellas, N., Rivera, P., Olivé-Ferrer, M. C., Querol, E., Venturas, M., Prats, J., Cuzco, C., Frias, C. E., Pérez-Ortega, S., & Zabalegui, A. (2021). Experiences of nursing students as healthcare aid during the COVID-19 pandemic in Spain: A phenomenological research study. *Nurse Education Today*, 97, 104711. doi.org/10.1016/j.nedt.2020.104711
- Diaz, K., Staffileno, B. A., & Hamilton, R. (2021). Nursing student experiences in turmoil: A year of the pandemic and social strife during final clinical rotations. *Journal of Professional Nursing*, 37(5), 978–984. doi.org/10.1016/j.profnurs.2021.07.019
- Eweida, R. S., Rashwan, Z. I., Desoky, G. M., & Khonji, L. M. (2020). Mental strain and changes in psychological health hub among intern-nursing students at pediatric and medical-surgical units amid ambience of COVID-19 pandemic: A comprehensive survey. *Nurse Education in Practice*, 49, 102915. doi.org/10.1016/j.nepr.2020.102915
- Farfán-Zúñiga, X., Jaman-Mewes, P., Zimmermann-Vildoso, M., & Campos-Lobos, C. (2022). Nursing students experience during the COVID-19 pandemic: a qualitative research. *Investigacion & Educacion En Enfermeria*, 40(2), 179–191. doi.org/10.17533/udea.iee.v40n2e13
- Ghazawy, E. R., Ewis, A. A., Mahfouz, E. M., Khalil, D. M., Arafa, A., Mohammed, Z., Mohammed, E. N. F., Hassan, E. E., Abdel Hamid, S., Ewis, S. A., & Mohammed, A. E. N. S. (2021). Psychological impacts of COVID-19 pandemic on the university students in Egypt. *Health Promotion International*, 36(4), 1116–1125. doi.org/10.1093/heapro/daaa147
- Grant, A., & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expressions motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 946–955.
- Koc, E., Basgol, S., Bal, S., & Karakaya, N. (2022). Lived Experiences of International Midwifery Students in Turkey during the Coronavirus Pandemic: A Phenomenological Study. *Africa Journal of Nursing and Midwifery*, 24(1). doi.org/10.25159/2520-5293/11512
- Mulyadi, M., Tonapa, S. I., Luneto, S., Lin, W. T., & Lee, B. O. (2021). Prevalence of mental health problems and sleep disturbances in nursing students during the COVID-19 pandemic: A systematic review and meta-analysis. In

- Nurse Education in Practice (Vol. 57). Elsevier Ltd. doi.org/10.1016/j.nepr.2021.103228
- Patelarou, A., Mechili, E. A., Galanis, P., Zografakis-Sfakianakis, M., Konstantinidis, T., Saliq, A., Bucaj, J., Alushi, E., Carmona-Torres, J. M., Cobo-Cuenca, A. I., Laredo-Aguilera, J. A., & Patelarou, E. (2021). Nursing students, mental health status during COVID-19 quarantine: evidence from three European countries. *Journal of Mental Health* (Abingdon, England), 30(2), 164–169. doi.org/10.1080/09638237.2021.1875420
- Saucedo-Uribe, E., Treviño-Lozano, J., González-Mallozzi, P. J., Enríquez-Navarro, M. K., de la Cruz-de la Cruz, C., Rangel-Gómez, A. N., Carranza-Navarro, F., Pardiñaz-García, D. D., & Fuentes-Garza, J. M. (2022). Anxiety in Mexican adults throughout the COVID-19 pandemic: A cross sectional study. *Archives of Psychiatric Nursing*, 41, 201–207. doi.org/10.1016/j.apnu.2022.08.005
- Sequeira, C., Araújo, O., Lourenço, T., Freitas, O., Carvalho, J. C., & Costa, P. (2022). The impact of the COVID - 19 pandemic on the mental health of Portuguese university students. *International Journal of Mental Health Nursing*, 31(4), 920–932. doi.org/10.1111/inm.12999
- Sheek-Hussein, M., Abu-Zidan, F. M., & Stip, E. (2021). Disaster management of the psychological impact of the COVID-19 pandemic. *International Journal of Emergency Medicine*, 14(1), 19. https://doi.org/10.1186/s12245-021-00342-z
- Singh, S., Singh, N., Ahiwar, R., Sagar, S. K., & Mondal, P. R. (2021). Impact of COVID-19 Pandemic on Mental Health of General Population and University Students Across the World: A Review. *Online Journal of Health & Allied Sciences*, 20(2), 1–8. search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=cin20&AN=152340897&site=ehost-live
- Velarde-García, J. F., González-Hervías, R., Álvarez-Embarba, B., Cachón-Pérez, J. M., Rodríguez-García, M., Oliva-Fernández, O., González-Sanz, P., Palacios-Ceña, D., Moro-López-Menchero, P., Fernández-de-las-Peñas, C., & Mas Espejo, M. (2022). Under-graduate nursing students working during the first outbreak of the COVID-19 pandemic: A qualitative study of psychosocial effects and coping strategies. *International Journal of Nursing Practice*, 28(5). doi.org/10.1111/ijn.13065
- Wallace, S., Schuler, M. S., Kaulback, M., Hunt, K., & Baker, M. (2021). Nursing student experiences of remote learning during the COVID-19 pandemic. *Nursing Forum*, 56(3), 612–618. doi.org/10.1111/nuf.12568
- WHO. (2018). Global status report on alcohol and health P.4. (取得日2023年11月9日)  
https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/312318/WHO-MSD-MSB-18.2-eng.pdf?sequence=1
- Wynter, K., Redley, B., Holton, S., Manias, E., McDonall, J., McTier, L., Hutchinson, A. M., Kerr, D., Lowe, G., Phillips, N. M., & Rasmussen, B. (2021). Depression, anxiety and stress among Australian nursing and midwifery undergraduate students during the COVID-19 pandemic: a cross-sectional study. *International Journal of Nursing Education Scholarship*, 18(1), 1–11. doi.org/10.1515/ijnes-2021-0060
- 岩永 喜久子, 後藤, & 宮崎. (2007). 学部教育における看護学生のメンタルヘルスと関連要因. *保健学研究*, 20(1), 39-48.
- 井梅由美子・川口めぐみ・大橋 恵. (2023). COVID-19 禍における遠隔授業が大学生のメンタルヘルスに 及ぼす影響. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 48(3), 149–157.
- 北本さゆり, 野崎志津, 山下裕子, & 梶本和美. (2022). 新型コロナウイルス感染症影響下において一年課程の保健師学生 がする際の心理プロセス. In *藍野大学紀要* (藍野大学紀要, Vol. 34). http://export.jamas.or.jp/dl.php?doc=564bc34410220e28ac534a725d8f730a54aa960fc78597bc6ecc41d372144db7\_bibtex.bib
- 黒澤昌洋, 森本直樹, 中山綾子, & 佐々木裕子. (2022). 防災訓練による看護学部2学年次生の学び 災害トリアージと応 急手当訓練を通して. *愛知医科大学看護学部紀要*, 21, 43–48. http://export.jamas.or.jp/dl.php?doc=564bc34410220e28ac534a725d8f730a54aa960fc78597bc6ecc41d372144db7\_bibtex.bib

- 厚生労働省. (2018年). 主要な国の薬物別生涯経験率. (取得日2023年11月9日). <https://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhin/yakubuturanyou/torikumi/dl/index-05.pdf>
- 曾根志穂, 武山雅志, 金谷雅代, 石垣和子. (2015). 被災地ボランティア活動が看護学生の自己イメージと社会人基礎力, 自己効力感に与える影響と学生の思い.
- 中島美香, & 粕谷恵美子. (2018). 慢性期看護学実習における看護学生のストレス調査. 医療保健学研究: つくば国際学紀要, 9, 33-41.
- 山田 茜, 今井多樹子, 高瀬美由紀. (2019). 災害看護に携わる看護師の心理的特徴とその支援に関する文献的考察. 日職災医誌, 67, 60-66.

# In the COVID-19 Pandemic

## A Literature Review of Mental Health Illness among Nursing Students

– From 6 qualitative studies from 4 countries –

Yuki Magaribuchi <sup>1)</sup>, Mitsue Maru <sup>2)</sup>

### Abstract

[Purpose] The purpose of this study was to comprehensively search and collect the literature of qualitative studies on mental health problems among nursing students during the COVID-19 pandemic (COVID-19), and to identify the characteristics and contents of these studies.

[Methods] On July 3, 2023, MEDLINE and CINAHL were searched for the thesaurus terms "student," "mental health," and "COVID-19," including related terms. The target population in each literature was nursing students, and the study was a qualitative study on the subject of mental health in COVID-19. The authors screened 132 articles in CINAHL and 213 in MEDLINE, and 4 articles in CINAHL and 2 articles in MEDLINE were included in the analysis.

[Results] Mental health problems among nursing students were due to changes in their living environment for the purpose of infection prevention. Nursing students who worked in healthcare institutions felt "conflict associated with work" and "sense of burden. In a study of international students, they complained of insomnia and other symptoms. The students coped with their experiences by viewing them positively and finding their social roles, along with the support of those close to them.

[Conclusion] The results suggest that international students and nursing students working in medical institutions are susceptible to mental health problems and need to be linked to counseling services and psychiatric consultation as well as peer support. In order to prevent mental health problems among nursing students, it is important to help them make positive sense of their experiences and find social value in their own existence.

Key Words: Novel coronavirus infection, COVID-19, Mental health, Nursing students

---

1) Fourth year, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Child Health Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo



## 2023年専任教員業績一覧

### 【哲学系】

#### 研究論文

- ・紀平知樹 (2023). 経験の構造 — Giorgi の現象学的心理学の方法. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 30, 15-28. <https://lib.laic.u-hyogo.ac.jp/laic/5/kiyo30/KIHIRA.pdf>

#### 研究発表

- ・紀平知樹. 観光における滞在の可能性 — ハイデガールの旅行記より. 観光学術学会第12回大会, 7月 (埼玉).
- ・常見幸, 紀平知樹. IPE プログラムを経験した1年生の意識調査 — 自由記述に関するテキストマイニングの結果より. 第55回日本医学教育学会大会, 7月 (長崎).

### 【教育学系】

#### 著書

- ・池田雅則 (2023). [分担執筆]. 港区教育委員会 (編), 港区教育史 くらしと教育編 [pp. 25-42, pp. 197-221]. 東京都: 港区教育委員会.
- ・池田雅則 (2023). [分担執筆]. 渡邊洋子 (編), 医療専門職のための生涯キャリアヒストリー法 — 働く人生を振り返り、展望する [pp. 35-47, pp. 79-89, pp. 126-140]. 東京都: 明石書店.

#### 研究発表

- ・池田雅則. 官吏たりうる資格の限界 — 埼玉県における最低俸給額未滿の判任文官の銓衡任用. 全国地方教育史学会第46回大会, 5月 (神戸).
- ・池田雅則, 渡邊洋子, 犬塚典子, 種村文孝, 池田法子, 柏木睦月. 働く人生を振り返り、展望する「生涯キャリアヒストリー法」. 第27回日本看護管理学会学術集会, 8月 (東京).
- ・種村文孝, 渡邊洋子, 池田雅則, 犬塚典子, 池田法子, 柏木睦月. 生涯キャリアヒストリー法の実践 — 職業人生を振り返り／見通す. 第86回医学教育セミナーとワークショップ, 10月 (富山).

#### その他

- ・池田雅則 (2023). 『港区教育史 くらしと教育編』の刊行. 日本教育史往来, 265, 1-5.

### 【学校保健学系】

#### 研究論文

- ・石崎優子, 星野寛美, 古川恵美 (2023). 児童相談所・養子縁組民間あっせん機関の里親委託・養子縁組担当者と小児医療従事者との連携に関する調査. チャイルドヘルス, 26, 211-216.

#### 研究発表

- ・古川恵美, 大江理英, 竹内和雄, 小西美和子. 災害時に医師不在の心肺蘇生現場に関わった養護教諭が語

- ったこと. 第 20 回日本小児心身医学会東海北陸地方会, 3 月 (三重).
- ・古川恵美. 高校生の子育てに悩む父親に対する養護教諭と協働したペアレント・トレーニング実施の経験. 第 70 回近畿学校保健学会, 6 月 (和歌山).
  - ・大川尚子, 鈴木依子, 古川恵美, 長谷川法子. 社会的養護に関する養護教諭の意識調査. 第 70 回近畿学校保健学会, 6 月 (和歌山).
  - ・鯨坂誠之, 池田友美, 古川恵美. 発達障害の親の会に対するペアレント・トレーニングの効果. 日本質的心理学会第 20 回大会, 11 月 (大阪).
  - ・池田友美, 古川恵美, 鯨坂誠之. 特別養子縁組で親・家族になった経験 1 事例の振り返り. 第 130 回日本小児精神神経学会学術集会 11 月 (香川).
  - ・古川恵美, 池田友美, 鯨坂誠之, 中村恵, 福地成, 石崎優子. 特別養子縁組の子どもの生き立ちを家族と共に受け止めていくペアレント・トレーニングの実践. 第 130 回日本小児精神神経学会学術集会 11 月 (香川).
  - ・福地成, 古川恵美, 井上靖子, 増野園恵, 林知里, 梅田麻希. 東日本大震災による孤児を里子として迎え入れた里親のインタビュー. 第 64 回日本児童青年精神医学会総会, 11 月 (青森).
  - ・Mori T., Nagai T., Tsuchiya K., Furukawa E., Katayama T. Gazing Features at Familiar Faces and Their Association with Social Interaction in Preschoolers with Autism Spectrum Disorder. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars March (Tokyo).
  - ・Ishizaki Y., Iwasaki M., Yamazaki T., Kadoya R., Tahara T., Furukawa E., Taniguchi M., Kaneko K. Questionnaire Survey Regarding Immunization Implementation Status in Infant Homes in Japan The 18th Congress of Asian Society of Pediatric Research November (Tokyo).

## その他

- ・古川恵美 (2023). 【子どもの居場所 2023 広がる小児看護の未来】さまざまな状況にある子どもの居場所と支援 特別養子縁組の子どもの生き立ちを家族や本人と共に受け止めていく支援. 小児看護, 46(7), 829-835.
- ・古川恵美 (2023). 【知っておきたい子ども虐待と社会的養護～一時保護のその先は?～】養親に対するペアレント・トレーニングの経験から. チャイルドヘルス, 26, 199-202.
- ・古川恵美, 西尾佳代子(2023). 小児期発症慢性疾患患者に必要な性と生殖への支援 ガイド普及のためのオンラインセミナー実施報告と評価 養護教諭の視点から. 思春期学, 41(1), 92-95.
- ・大江理恵, 古川恵美, 小西美和子, 竹内和雄 (2023). 『生徒へのコール&プッシュ教育に至る「生命と心をくもり・育て・つなげる」養護教諭支援プログラム』中学校に勤務する養護教諭の急変対応の様相と的確な急変対応のためのニーズ. 令和 4 年度特別研究プロジェクト推進事業実績報告書
- ・古川恵美 (2023). 講演会報告 発達障がいの子どもの理解と支援について : 子どもの発達とペアレント・トレーニングについて -多様な教育的ニーズに応える病弱教育について. 大阪の病弱教育 / 研究誌編集委員会編
- ・市川宏伸, 足立南, 石井礼花, 井濶知美, 井上雅彦, ... 古川恵美, ... 山口穂菜美(2023). 厚生労働省令和 4 年度障害者総合福祉推進事業 ペアレント・トレーニング実施における評価 2 つの作成と活用に関する研究報告書.

## 【保健医療福祉系】

### 研究発表

- Kuwamura, Y., Kurahashi, K., Yoshida, S., Yumoto, H., Hosoki, M., Momota, Y., ... Uemura, H., ... Endo, I. Evaluation of Nursing Educational Material on Oral Health Behavior of Persons with Diabetes: Part 3-Physicians' Survey. IDF-WPR Congress 2023 / 15th Scientific Meeting of AASD, July (Kyoto, Japan).
- 上村浩一, 釜野桜子, 有澤孝吉. 日本人女性における月経状況と動脈ステイフネスとの関連: J-MICC Study 徳島地区調査. 第93回日本衛生学会学術集会, 3月 (東京都大田区/ハイブリッド開催).
- 桑村由美, 澄川真珠子, 湯本浩通, 細木真紀, 桃田幸弘, 吉田守美子, ... 上村浩一. 糖尿病がある人の口腔保健行動のチームでの支援にむけて第2報ブラッシングの継続支援の工夫に焦点をあてた報告. 第66回日本糖尿病学会年次学術集会, 5月 (鹿児島/ハイブリッド開催).
- 桑村由美, 細木真紀, 澄川真珠子, 湯本浩通, 桃田幸弘, 上村浩一. 看護大学生の口腔保健行動の一年間の縦断調査: オリジナル動画やデンタルシミュレーターを講義・演習に取入れて. 第267回徳島医学会学術集会, 8月 (徳島).

## 【統計・情報系】

### 著書

- 片山貴文 (2023). [分担執筆]. 吉岡京子 (編), 保健医療福祉計画とは何か — 策定から評価まで [pp. 67-71]. 京都府: 法律文化社.

### 研究論文

- Ide, N., Satomura, S., Tsutsumi, R., Kawakami, A., Sakaue, H., Katayama, T., Sonogi, N., ... Takeda, E. (2023). Comparison of water balance among healthy young and old adults and handicapped adults. *The Journal of Medical Investigation: JMI*, 70(1.2), 195-199. <https://doi.org/10.2152/jmi.70.195>
- Yoshioka-Maeda, K., Katayama, T., Fujii, H., Shiomi, M., Hosoya, N., Mayama, T. (2023). Effectiveness of a web-based learning program for promoting local healthcare planning competencies. *Public Health Nursing*, 40(5), 685-695. <https://doi.org/10.1111/phn.13229>

### 研究発表

- Hamashima, C., Terasawa, T., Hosono, S., Katayama, T., Sasaki, S., Abe K., ... Tadano T. Real-world evidence of total colonoscopy for colorectal cancer screening based on test performance RCTs. ISPOR Europe 2023, November (Copenhagen, Denmark).
- 吉岡京子, 片山貴文, 藤井仁, 塩見美抄, 細谷紀子, 真山達志. 保健師 WEB 教育プログラムの開発: ランダム化比較試験. 第82回日本公衆衛生学会総会, 10月 (茨城).

## 【保健体育】

### 翻訳

- Fomin, R. N., Collins, C. C. (Chapter 15). Stephens, J. M., Halson, S. L. (Chapter 23) (2022). *NSCA's Essentials of Sport Science*. Illinois: Human Kinetics. 柴田真志(分担翻訳) (2023). 第15章脳波測定と神経筋電図, 第23章リカバリーと睡眠, 柴田真志(日本語版総監修), 小林秀紹(日本語版監修). *NSCA スポーツ科学の基*

礎知識 (pp. 229-252, pp415-426). 千葉県: 特定非営利活動法人 NSCA ジャパン.

## 研究論文

- Shibata, M., Fujibayashi, M., Shibata, S., Kuzuhara, K., Tanida, K. (2023). Association between social Jetlag and objective physical activity among female university students of Japan: A cross-sectional study. *Sleep Science*, in press.
- 藤林真理, 柴田真志 (2023). タップダンス実践が若年女性の生理学的指標や心理的指標に及ぼす効果の検証. 令和4年度日本健康・体力づくり事業財団研究助成実践研究報告書集, 33-43.
- 新澤由佳, 柴田しおり, 柴田真志 (2022). 化学療法を受ける白血病患者の夜間と日中の客観的睡眠指標の関係. *日本看護科学学会誌*, 42, 679-687.

## 研究発表

- Kutsumi M., Kato Y., Sumi M., Kawasaki M., Kowa H., Kanda F., Morimura Y., Shibata M. Relation between cognitive fluctuation and sleep quality data in a person with dementia with Lewy bodies: a case report. The International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress 2023, June (Yokohama, Japan).
- 藤林真理, 柴田真志. タップダンス実践が若年女性の生理学的指標や心理的指標に及ぼす効果の検証. 令和4年度日本健康・体力づくり事業財団研究助成実践研究成果報告会, 5月 (東京/web開催).
- 片岡千明, 木村ちぐさ, 柴田真志. フットケアを用いた動脈硬化予防の専門まちの保健室の効果検証. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (下関).
- 木村ちぐさ, 片岡千明, 柴田真志. 地域住民を対象とした「看護師による生活習慣病と足の相談」の実践報告. 第4回日本フットケア・足病医学会年次学術集会, 12月 (宜野湾).
- 葛原憲治, 柴田真志, 井口順太. 高校生バスケットボール選手における練習時の活動強度. 日本ストレングス&コンディショニング協会カンファレンス, 2月(東京).
- 葛原憲治, 柴田真志, 井口順太. 高校生バスケットボール選手における試合時の活動強度. 日本ストレングス&コンディショニング協会 S&C カンファレンス 2023, 12月(千葉).
- 新居里菜, 品川真実, 織田奈央子, 瀧千波, 柴田真志, 藤林真美. 大学生における栄養摂取と精神健康. 第77回日本栄養・食糧学会, 5月 (札幌).
- 柴田真志. 発育発達期のスポーツと食育. 第20回日本食育協会総会, 6月 (東京).
- 柴田真志, 藤林真美, 瀧千波, 竹澤健介, 葛原憲治. 大学生におけるレジスタンス運動実施状況と社会的時差・睡眠・ポジティブ感情. 日本ストレングス&コンディショニング協会 S&C カンファレンス 2023, 12月(千葉).

## その他

- 柴田真志 (2023). 睡眠と健康・運動パフォーマンス. *HEALTH-NETWORK*, 9月号, 2-3.
- 柴田真志 (2023). サーカディアンリズムと健康. *HEALTH-NETWORK*, 10月号, 2-3.
- 柴田真志 (2023). 社会的時差と健康. *HEALTH-NETWORK*, 11月号, 2-3.

## 【看護基礎講座】

### 「基礎看護学」

#### 著書

- ・坂下玲子, 宮芝智子, 小野博史(2023). 系統看護学講座 看護研究 (第2版). 東京都: 医学書院.

#### 研究論文

- ・Kawano, T., Ono, H., Abe, M., Umeshita, K. (2023). Changes in physiological indices before and after nursing care of postoperative patients with esophageal cancer in the ICU. *SAGE Open Nursing*, 9, 1-9. doi: 10.1177/23779608231190144
- ・Ono, H., Haga, K., Nakanishi, E., Watanabe, R., Manabe, M., Awamura, K., ... Sakashita, R. (2023). Factors and challenges in increasing the utilization rate of a new long-term care service (Kantaki) in a superaging society: Cross-sectional study. *Asian/Pacific Island Nursing Journal*, 7, e45779- e45779. doi: 10.2196/45779
- ・栗村健司, 新居学, 渡邊里香, 中西永子, … 撫養真紀子, 坂下玲子, 小野博史 (2023). 看護小規模多機能型居宅介護事業所の公開情報からわかる事業実態の特徴 — テキストマイニングを用いた二次分析. *日本プライマリ・ケア連合学会誌*, 46(4), 132-141.
- ・中西永子, 高見美樹, 石垣恭子 (2023). 看護師と新人看護師の勤務前情報収集に関する電子カルテ利用による情報探索行動の範囲 — 視界計測機を用いた注視エリアから把握した情報収集時間, 範囲, 量の違い. *医療情報学*, 42(6), 249-262.
- ・撫養真紀子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 芳賀邦子, 栗村健司, … 坂下玲子 (2023). 看護小規模多機能型居宅介護で働く看護師に求められるコンピテンシーの内容妥当性の検討. *社会医学研究*, 40(2), 150-165.

#### 研究発表

- ・Aimi, M., Hirata, M., Kawano, T., Nakanishi, E., Watanabe, R., Morioka, K., Ono, H. Characteristics of health behavior decision making among community elderly with lifestyle related diseases. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo).
- ・Ono, H., Kawada, M., Kataoka, C., Nishiike, E., Hamaue, A., Morioka, K., ... Sakashita, R. Structure of needs of older community residents for health behaviors. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo).
- ・芳賀邦子, 撫養真紀子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 真鍋雅史, ... 坂下玲子… 内布敦子. 在宅療養における看護ケアの質評価に関する研究 — 構造項目の検討. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月(下関).
- ・撫養真紀子, 芳賀邦子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 真鍋雅史, ... 坂下玲子… 内布敦子. 在宅療養における看護ケアの質評価に関する研究 — 過程項目の検討. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月(下関).
- ・中西永子, 新居学, 林聡美, 池田まゆみ, 菰野朱美. 優れた看護実践を行う看護師の電子カルテ情報収集パターン. 第27回日本看護管理学会学術集会, 8月(東京).
- ・小野博史, 本田順子, 濱上亜希子, 竹原歩, 國領了美, ... 坂下玲子. 聴き手の効果的な働きかけが実践の意味の言語化を促進した一事例の分析. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月(下関).
- ・涌井杏奈, 河内美帆, 佐野拓人, 坂下玲子, 鷲尾純平, 高橋信博, 佐藤拓一. 搾乳母乳と新生児口腔内細菌叢との連関. 第73回日本口腔衛生学会学術大会, 5月(盛岡).

## その他

- ・ Nakanishi, E., Ono, H., Kawano, T., Sakashita, R. (2023). Why do we not develop a social game about evacuation simulation for disasters preparedness?. *Health Emergency and Disaster Nursing*, 10(1), 46-48. doi: <https://doi.org/10.24298/hedn.2023-0002>
- ・ 坂下玲子 (2023). RCTを超える研究手法の探求 — Dr. Ivo Abraham講演の概要と意義. *看護研究*, 56(1), 10-13. doi: <https://doi.org/10.11477/mf.1681202063>
- ・ 坂下玲子 (2023). 講演1 介入が薬物でないとき — 複雑な介入を伴う臨床研究の場合 (Ivo Abraham). *看護研究*, 56(1), 15-26. doi: <https://doi.org/10.11477/mf.1681202064>
- ・ 坂下玲子 (2023). 講演2 RCTが不可能なとき — 観察研究での原因と結果の探求 (Ivo Abraham). *看護研究*, 56(1), 27-39.
- ・ 坂下玲子, 松尾和枝 (2023). 看護実践モデルの構築・評価・改善 その方法とプロセス 看護実践モデルの構築・評価・改善のステップ. *看護研究*, 56(4), 354-361. doi: 10.11477/mf.1681202117
- ・ 坂下玲子, 小野博史, 藤原史博 (2023). RCTのその先へ — Practice-Based Evidence (PBE) の発展と可能性. *看護研究*, 56(1), 41-48. doi: <https://doi.org/10.11477/mf.1681202066>

## 【看護基礎講座】

### 「看護システム学」

#### 著書

- ・ 撫養真紀子 (2023). [分担執筆]. 吉田千文, 志田京子, 手島恵, 武村雪絵 (編), *看護の統合と実践①看護管理 (第5版)* [pp. 122-130, pp. 135-140]. 大阪府. メディカ出版.
- ・ 撫養真紀子 (2023). [分担執筆]. 手島恵, 藤本幸三 (編), *看護管理学 自律し協働する専門職の看護マネジメントスキル改訂版 (第3版)* [pp. 110-121, p. 124]. 東京都. 南江堂.

#### 研究論文

- ・ Ono, H., Haga, K., Nakanishi, E., Watanabe, R., Manabe, M., Awamura, K., ..., Muya, M., Sakashita, R. (2023). Factors and challenges in increasing the utilization rate of a new long-term care service (Kantaki) in a superaging society: Cross-sectional study. *Asian/Pacific Island Nursing Journal*, 7, e45779- e45779. doi:10.2196/45779
- ・ 栗村健司, 新居学, 渡邊里香, 中西永子, 真鍋雅史, ..., 撫養真紀子, ..., 小野博史 (2023). 看護小規模多機能型居宅介護事業所の公開情報からわかる事業実態の特徴 — テキストマイニングを用いた二次分析. *日本プライマリ・ケア連合学会誌*, 46(4), 印刷中.
- ・ 撫養真紀子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 芳賀邦子, 栗村健司, ..., 坂下玲子 (2023). 看護小規模多機能型居宅介護で働く看護師に求められるコンピテンシーの内容妥当性の検討. *社会医学研究*, 40(2), 150-165.
- ・ 渡邊里香 (2023). 育児期の非正規雇用看護師のキャリア形成支援の課題 — 中小規模病院の看護管理者への面接から. *Journal of Inclusive Education*, 12, 31-45. doi: 10.20744/inclleedu.12

#### 研究発表

- ・ 芳賀邦子, 撫養真紀子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 真鍋雅史, ..., 内布敦子. 在宅療養における看護ケアの質評価に関する研究 — 構造項目の検討. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (下関).
- ・ 撫養真紀子, 芳賀邦子, 渡邊里香, 小野博史, 中西永子, 真鍋雅史, ..., 内布敦子. 在宅療養における看護

- ケアの質評価に関する研究 ― 過程項目の検討. 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 12 月 (下関).
- 渡邊里香. 日本の看護管理領域で活用される理論の概観. 第 2 回理論看護研究会, 3 月 (Web 開催).
- 渡邊里香, 芳賀邦子, 真鍋雅史. 中小規模病院における育児期の非正規看護師の勤務実態. 第 26 回日本地域看護学会学術集会, 9 月 (川崎/Web 開催).

## その他

- 渡邊里香, 中西永子, 原裕子 (2023). いつまでも看護師が力を発揮して働き続けられる職場を目指して. 第 27 回日本看護管理学会学術集会, インフォメーションエクステンジ 34, 8 月 (東京).

## 【看護基礎講座】

### 「看護情報」

#### 研究論文

- 土谷僚太郎, 原口亮, 高見美樹 (2023). 新人看護師の社会人基礎力と職場環境の交互作用解明に向けた縦断的解析. 日本職業・災害医学会会誌, 71(2), 23-29.
- 中西永子, 高見美樹, 石垣恭子 (2023). ベテラン看護師と新人看護師の勤務前情報収集に関する電子カルテ利用による情報探索行動の差異 ― 視線計測機を用いた注視エリアからとらえた情報収集時間, 範囲, 量の違い. 医療情報学, 42(6), 249-262.
- 高見美樹, 久間裕子, 高島真美, 石垣恭子 (2023). オンラインでの看護師を対象とした看護情報の二次利用に関する職員研修. 医療情報学, 43, 582-584.
- 山口智美, 石垣恭子, 高見美樹 (2023). 脳卒中患者の復職支援システムのための就業能力アセスメントシートの作成. 医療情報学, 43, 1086-1090.

#### 研究発表

- Omura, A., Takami, M., Ishigaki, K. Difficulty felt by beginning students of psychiatric nursing in performing assessment. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023, March (Tokyo)
- 山本直子, 中田知廣, 細井優美子, 永田公子, 宮崎秀雄, 花岡澄代, 高見美樹, 石垣恭子. 看護師の業務開始時の情報収集に関する実態調査. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).
- 中田知廣, 山本直子, 細井優美子, 永田公子, 宮崎秀雄, 花岡澄代, 高見美樹, 石垣恭子. 看護師の業務開始時の情報収集に対する電子カルテシステムのユーザビリティ調査. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).
- 森野幸代, 高島真美, 高見美樹, 石垣恭子. 看護師の情報利活用能力が新型コロナウイルス感染症の不安に与える影響 ― 感染拡大第 6 波の急速な感染者数増加時点の調査結果からの考察. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).
- 小村晃子, 高見美樹, 石垣恭子. フリーアプリ製アバター動画教材の主観的評価 ― 精神看護学教育における初学者を対象とした教材の有効性. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).
- 西原かおり, 西野朋季, 小淵夏季, 上田高義, 高見美樹, 石垣恭子. 高齢者の脱水症、熱中症予防センサのシステム構築. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).
- 山本純子, 高見美樹, 中本明世, 石垣恭子. 新人看護師の職業継続支援に向けた ICT を活用した面談の取組み ― オンライン面談のメリット・デメリット. 第 24 回日本医療情報学会看護学術大会, 7 月 (神戸).

- ・高見美樹, 久間裕子, 高島真美, 石垣恭子. オンラインでの看護師を対象とした看護情報の二次利用に関する職員研修. 第43回医療情報学連合大会, 11月(神戸).
- ・山口智美, 石垣恭子, 高見美樹. 脳卒中患者の復職支援システムのための就業能力アセスメントシートの作成. 第43回医療情報学連合大会, 11月(神戸).

## 【実践基礎看護講座】

### 「看護生体機能学」

#### 研究論文

- ・坂下玲子, 森本雅和, 新学, 中西永子, 小野博史, 谷田恵子, … 中出麻紀子. (2022). ビッグデータを活用した健康リスク予測と高度看護介入による新たなデータヘルス・システムの構築 — ビッグデータに基づく糖尿病重症化リスク予測. *Phenomena in Nursing*, 6(1), S5-S11.
- ・中出麻紀子, 森本雅和, 新居学, 中西永子, 笹嶋宗彦, 小野博史, … 谷田恵子 … 坂下玲子. (2023). 2型糖尿病疑いの有無による生活習慣の比較. *Phenomena in Nursing*, 7(1), R10-R19.
- ・濱上亜希子, 片岡千明, 西池絵衣子, 川田美和, 森菊子, 大野かおり. (2022). ビッグデータを活用した健康リスク予測と高度看護介入による新たなデータヘルス・システムの構築 — 高度ケースマネジメント(ハイリスクアプローチ). *Phenomena in Nursing*, 6(1), S16-S21.
- ・森菊子, 西池絵衣子, 片岡千明, 川田美和, 濱上亜希子, 澤村早苗, … 大野かおり. (2023). 自分の強みを活かし糖尿病を予防するための特定保健指導プログラムの評価. *Phenomena in Nursing*, 7(1), P1-P11.

#### 研究発表

- ・Kojima, R., Tanida, K. Regional oxygen saturation of the lower leg in patients undergoing surgery performed in the head-down tilt lithotomy position. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo).
- ・Tanida, K., Tang, A., Lee, R. Relation between internet gaming disorder risk and mindfulness attention awareness traits among Japanese undergraduate students. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo).
- ・Ono, H., Kawada, M., Kataoka, C., Nishiike, E., Hamaue, A., Morioka, K., … Sakashita, R. Structure of needs of older community residents for health behaviors. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo).
- ・小野博史, 本田順子, 濱上亜希子, 竹原歩, 國領了美, 森永尚子 … 坂下玲子. 聴き手の効果的な働きかけが実践の意味の言語化を促進した一事例の分析. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月(下関).
- ・原裕子. 学生が安心して自己開示できる安全な実習環境を整える意義についての考察 — 初めての实習に対する防衛機制の強い学生への関わりに焦点をあてて. 第2回理論看護研究会, 3月(Web開催).

#### その他

- ・渡邊里香, 中西永子, 原裕子. いつまでも看護師が力を発揮して働き続けられる職場を目指して. 第27回日本看護管理学会学術集会, 8月(東京).

## 【実践基礎看護講座】

### 「看護病態学」

#### 著書

- ・伊東由康 (2023). [分担執筆]. 伊東美佐江 (監修), 周術期標準看護計画, プチナース 2023年11月号別冊

付録 [pp. 32-35]. 東京都: 照林社.

## 研究論文

- Ito, Y., Kiyohara, H., Awamura, K., Yamaoka, C. (2023). People with visual impairment continue to experience difficulties in their daily lives which affects their health-related quality of life after the COVID-19 pandemic. *JMA Journal*, advance publication. doi: 10.31662/jmaj.2023-0120
- Ito, Y., Tsubaki, M., Kobayashi, M., Yagome, S., Sakaguchi, Y. (2023). Effect size estimates of risk factors for post-intensive care syndrome-family: A systematic review and meta-analysis. *Heart & Lung*, 59, 1-7. doi: 10.1016/j.hrtlng.2023.01.005
- Ito, Y., Tsubaki, M., Sakaguchi, Y. (2023). Emergency nurses' perceptions of changes in the quality of death and distress during the COVID-19 pandemic in Japan: A cross-sectional study. *Health Emergency and Disaster Nursing*, 1-9. doi: 10.24298/hedn.2022-0004
- Kajiwara, K., Ito, Y., Tsubaki, M., Kobayashi, M., Kakeda, T., Kako, J. (2023). Conclusiveness of the Cochrane Reviews in Family Nursing: A Meta-research Study. *Asia-Pacific journal of public health*, 1-4. doi: 10.1177/10105395231219835
- Tsukuda, M., Fukuda, A., Shogaki, J., Miyawaki, I. (2023). Validity and reliability of a short form of the questionnaire for the reflective practice of nursing involving invasive mechanical ventilation: A cross-sectional study. *Nursing Reports*, 13(3), 1170-1184. doi: 10.3390/nursrep13030101
- Tsukuda, M., Ito, Y., Kakazu, S., Sakamoto, K., Honda, J. (2023). Development and validity of the Japanese version of the questionnaire on factors that influence family engagement in acute care settings. *Nursing Reports*, 13(2), 601-611. doi: 10.3390/nursrep13020053
- Tsubaki, M., Kako, J., Koga, Y., Kobayashi, M., Endo, Y., Kimura, Y., … Ito, Y., …Kakeda, T. (2023). Are there changes in the nursing managers' expectations of the professional quality of new graduate nurses after emerging infections disease pandemic?. *JMA Journal*, 6(4), 532-535. doi: 10.31662/jmaj.2023-0015
- 本田順子, 谷口麻希, 塩見美沙, 竹村和子, 築田誠 (2023). 糖尿病予防に関するポピュレーションアプローチの先駆的事例分析. *Phenomena in Nursing*, 7(1), G1-G9.
- 伊東由康, 椿美智博, 坂口幸弘 (2023). COVID-19 流行下での亡くなる患者の家族へのケアに伴う救急看護師の葛藤と精神的健康. *死の臨床*, 45(1), 126-133. doi: 10.34317/jjard.JJRD-D-22-00004
- 築田誠, 谷口麻希, 竹村和子, 本田順子, 森本雅和, 塩見美抄 (2023). 2型糖尿病に関する食生活行動調査からのポピュレーションアプローチに向けたセグメンテーションの検討. *Phenomena in Nursing*, 7(1), R1-R9.
- 梅田麻希, 竹村和子, 本田順子, 築田誠, 塩見美抄 (2022). 糖尿病予防に向けたポピュレーション・アプローチの開発 — 自治体と大学の協働による検討. *Phenomena in Nursing*, 6(1), 12-15. doi: 10.24640/purs.6.1\_S12
- 米村亮, 北村愛子, 大江理英. (2023). 集中治療の効果がなく死にゆく患者の家族の悲嘆への看護実践. *大阪公立大学看護学雑誌*, 1, 33-42.

## 研究発表

- Nojima, K., Honda, J., Tsukuda, M., Kawahara, N., Kawamura, K., Matsumoto, K. Development of a family nursing online simulation-based education program for Home Visiting Nurses Report 2: Conducting beta test. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).

- Tsubaki, M., Ito, Y., Haniuda, Y., Ryosetsu, M., Shiga, M., Kashimi, F., …Yoshida, K. Application of advance care planning model using electronic patient-reported outcome “ePRO type ACP model” to improve donation after circulatory death. 18th Congress of Asian Society of Transplantation, August (Hong Kong, China).
- Tsukuda, M., Ito, Y., Kakazu, S., Sakamoto, K., Honda, J. Family engagement in patient care in acute care settings: A comparison between the U.S. and Japan using the QFIFE. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- Yamaoka, C., Awamura, K., Ito, Y., Kiyohara, H. Impact of the COVID-19 pandemic on the daily lives and difficulties of the people with visual impairments. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo, Japan).
- 浅田裕美. 放射線治療を受ける患者のマーキングに対する感情と関連要因の検討：質問紙調査による横断研究 — 患者の日常生活と治療を支えるために. 兵庫県立大学知の交流シンポジウム 2023, 9月 (神戸).
- 古賀雄二, 五十嵐真, 山田奈津子, 古厩智美, 花山昌浩, 植村桜, 岡田和之, 伊東由康. これからどうする? どうかわる? せん妄ケア. 日本クリティカルケア看護学会第19回学術集会, 7月 (東京).
- 野島敬祐, 本田順子, 築田誠, 萬代彩子. デジタル模擬患者とゲーミフィケーションを活用したオンラインシミュレーションの試み — 訪問看護師への家族看護セミナーを通して. 第15回日本医療教授システム学会総会学術集会, 3月 (東京).
- 椿美智博, 伊東由康, 羽生田悠, 良雪雅, 志賀大, 樫見文枝, 飯田英和. 在宅患者に対する電子的患者情報アウトカム(ePRO)を用いた Advance Care Planning モデルの開発に向けた課題. 日本緩和医療学会第28回学術大会, 9月 (神戸).
- 築田誠, 伊東由康, 坂本佳津子, 賀数勝, 本田順子. 日本語版 QFIFE の開発. 日本集中治療医学会第50回学術集会, 3月 (京都).
- 築田誠, 伊東由康, 坂本佳津子, 賀数勝, 本田順子. 集中治療領域における看護師が認識する家族のケア参加を促進するための要因 — 日本語版 The Questionnaire on Factors That Influence Family Engagement (QFIFE-J) を活用した調査. 日本家族看護学会第30回学術集会, 9月 (吹田).
- 築田誠, 野島敬祐, 伊東由康, 本田順子. 安全な人工呼吸器管理を支援するシステム構築に向けたインシデント事例のテキストマイニングによる分析. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (下関).
- 山岡千鶴, 栗村健司, 清原花, 伊東由康. アフターコロナにおける視覚障害者の日常生活上の困難感と健康関連 QOL. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (下関).

## その他

- Haniuda, Y., Tsubaki, M., Ito, Y. (2023). Evaluating the usability of electronic patient-reported outcome apps: comment on a symptom management platform for outpatients with advanced cancer. *JMIR Formative Research*, 7(7), e42153-e42153. doi: 10.2196/42153
- Ito, Y., Tsubaki, M. (2023). How to communicate with family members of the critically ill in the intensive care unit: A scoping review. *Intensive & Critical Care Nursing*, 76, 103383. doi: 10.1016/j.iccn.2022.103383
- Tsubaki, M., Ito, Y., Haniuda, Y. (2023). Further thoughts on how the electronic patient-reported outcome measure (ePROM) can be implemented in the real world. *Supportive Care in Cancer*, 31(1):58. doi: 10.1007/s00520-022-07545-x
- 伊東由康. (2023). 特集 若手研究者の活躍に向けて, 若手研究者のつながりと発信 — JANS 若手の会エリア・コーディネーターの活動. *看護研究*, 56(2), 132-134.

**【実践基礎看護講座】****「生活援助学」****研究論文**

- Ito, Y., Kiyohara, H., Awamura, K., Yamaoka, C. (2023). People with Visual Impairment Continue to Experience Difficulties in their Daily Lives which Affects their Health-related Quality of Life after the COVID-19 Pandemic. JMA Journal, DOI: 10.31662/jmaj.2023-0120.

**研究発表**

- Yamaoka, C., Awamura, K., Kiyohara, H., Ito, Y. Impact of the COVID-19 pandemic on the daily lives and difficulties of the people with visual impairments. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo / Online session).
- 古川恵美, 大江理英, 竹内和雄, 小西美和子. 災害時に医師不在の心肺蘇生現場に関わった養護教諭が語ったこと. 第20回日本小児心身医学会東海北陸地方会, 3月 (Web開催).
- 山岡千鶴, 栗村健司, 清原花, 伊東由康. アフターコロナにおける視覚障害者の日常生活上の困難感と健康関連 QOL. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月(山口).

**その他**

- 大江理恵, 古川恵美, 小西美和子, 竹内和雄 (2023). 生徒へのコール&プッシュ教育に至る「生命と心を<守り・育て・つなげる>養護教諭支援プログラム」中学校に勤務する養護教諭の急変対応の様相と的確な急変対応のためのニーズ. 令和4年度特別研究プロジェクト推進事業実績報告書.
- 山岡千鶴, 栗村健司, 清原花, 伊東由康 (2023). With コロナ時代に考える災害時にも持続可能な視覚障害者の日常生活を支えるサポートシステムの構築. 2022年度 JR 西日本あんしん社会財団研究助成研究実績報告書.

**【実践基礎看護講座】****「治療看護学」****研究論文**

- Kawasaki, Y., Hirai, K., Nii, M., Kizawa, Y., Uchinuno, A. (2023). Actual situation of decision-making support from medical staff when cancer patients make treatment choices, Future oncology, 19(33), 2263-2272. doi: 10.2217/fon-2023-0335.
- Tsubaki, M., Kako, J., Koga, Y., Kobayashi, M., Endo, Y., Kimura, Y., Kiyohara, H.,..., Kakeda, T. (2023). Are there changes in the nursing managers' expectations of the professional quality of new graduate nurses after emerging infections disease pandemic?, JMA Journal, 6(4), 532-535. doi: 10.1016/j.teln.2022.10.009
- Yamamoto, H., Hirotsugu, H., Kumagai, H., Abe, T., Ishiguro, S., Uchida, K., Kawasaki, Y., ..., Nakayama, Y. (2023). Clinical Guidelines for Diagnosis and Management of Peutz-Jeghers Syndrome in Children and Adults. Digestion, 104(5), 1-13. doi: 10.1159/000529799
- 今井芳枝, 阿部彰子, 村上好恵, 武田祐子, 川崎優子, 板東孝枝, 高橋亜希, 井上勇太, 阪本朋香, 吉田加奈子(2023). 遺伝性乳癌卵巣癌症候群と診断された乳癌罹患患者のリスク低減卵管卵巣摘出術後の思い. 遺伝性腫瘍, 22(3), 68-74. doi: 10.18976/jsht.22.3\_68
- 村上好恵, 今井芳枝, 武田祐子, 川崎優子, 浅海くるみ, 森裕香, 井上勇太, 阪本朋香(2023). がん看護専門看護師のがんゲノム医療への関与の実態, 四国医学雑誌, 79(3-4), 165-172.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikokuactamedica/79/3.4/79\\_165/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikokuactamedica/79/3.4/79_165/_pdf/-char/ja)

- ・永島志, 川崎優子(2023). 診断期のがんサバイバーの看護支援に関する国内外の文献検討. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 30, 29-40.
- ・内田恵, 小林貴代, 石川泰(2023). 遺伝性乳癌卵巣癌症候群 (HBOC) プレカウンセリング後に遺伝学的検査を希望しなかったケースのフォローアップ. 遺伝性腫瘍, 23(1). 44-49. doi: 10.18976/jsht.23.1\_44

## 研究発表

- ・ Yamaoka, C., Awamura, K., Ito, Y., Kiyohara, H. Impact of the COVID-19 pandemic on the daily lives and difficulties of the people with visual impairments, 26th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference, March (Tokyo, Japan).
- ・川崎優子, 新居学, 内布敦子, 木澤義之, 平井啓, 清原花, 西岡英菜. がん患者の意思決定支援アプリの feasibility study, 第 28 回日本緩和医療学会学術集会, 7 月 (神戸).
- ・川崎優子, 新居学, 西岡英菜, 清原花(2023). 乳腺外来を受診したがん患者の意思決定支援に関する観察研究, 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 12 月 (山口).
- ・金原史郎, 清田尚臣, 内田恵, 和田唯, 花房宏昭, 小松正人, … 南博信. Prevalence of druggable alterations in elderly patients versus non-elderly patients with advanced solid tumors, 第 20 回日本臨床腫瘍学会学術集会, 3 月 (福岡).
- ・清原花, 川崎優子. 同種造血幹細胞移植を受けたがん患者の移植後フレイルの実態, 第 45 回日本造血・免疫細胞療法学会 総会, 2 月 (愛知).
- ・新居学, 川崎優子, 西岡英菜, 清原花. 緩和ケア外来を受診したがん患者の意思決定支援に関する観察研究, 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 12 月 (山口).
- ・内田恵, 金原史郎, 花房宏昭, 和田唯, 濱真奈美, 田中敬子, 清田尚臣, 南博信. がん遺伝子パネル検査における二次的所見の開示と対応について. 第 29 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会, 6 月 (高知).
- ・山本正嗣, 桂田直子, 内田恵, 小松正人, 立原素. A review of thoracic tumor cases in the outpatient cancer genome medicine clinic, 第 20 回日本臨床腫瘍学会学術集会, 3 月 (福岡).

## その他

- ・内田恵(2023). 学術集会トピック & 感想—HTC の立場より, 日本遺伝性腫瘍学会 Newsletter vol.6,2.
- ・清原花(2023). 乳がん患者の症状管理のためのモバイルアプリケーション. 日本緩和医療学会ニューズレター, 100, 25.

## 【生涯広域健康看護講座 I】

### 「成人看護学」

#### 著書

- ・森菊子, 三好智佳子 (2023). [分担執筆]. 野川道子, 桑原ゆみ, 神田直樹(編), 看護実践に活かす中範囲理論第 3 版 [pp. 84-97]. 東京都: メジカルフレンド社.

#### 研究論文

- ・森菊子, 西池絵衣子, 片岡千明, 川田美和, 濱上亜希子, 澤村早苗, 野口三華, 今若真里佳, 渡辺梨絵, 森岡久美子, 中野恵子, 大野かおり(2023). 自分の強みを活かし糖尿病を予防するための特定保健指導ブ

プログラムの評価, *Phenomena in Nursing*, 7(1), 1-11.

## 研究発表

- Ono, H., Kawada, M., Kataoka, C., Nishiike, E., Hamaue, A., Morioka, K., … Sakashita, R. Structure of needs of older community residents for health behaviors. The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference, March (Tokyo/Online session).
- 片岡千明, 木村ちぐさ, 柴田真志. フットケアを用いた動脈硬化予防のまちの保健室の効果検証. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (山口).
- 片山将宏, 本城綾子, 三好智佳, 嶋田幸子, 松本光寛, 加澤佳奈, 片岡千明. セルフケア行動に変化が起きる前段階の慢性 CNS の介入と慢性疾患患者の変化. 第17回日本慢性看護学会学術集会, 9月 (神奈川県/Web開催).
- 木村ちぐさ, 片岡千明, 柴田真志. 地域住民を対象とした「看護師による生活習慣病と足の相談」の実践報告. 第4回日本フットケア・足病医学会年次学術集会, 12月 (沖縄).
- 大村佳代子, 片岡千明, 石井美由紀, 中筋美子, 丸光恵, 坂下玲子, … 増野園恵. 看護実習における生体シミュレーターおよび分身ロボット活用の取り組み. 第4回日本看護シミュレーションラーニング学会, 2月 (兵庫).
- 筒井千春, 森菊子. 心不全患者における倦怠感の体験. 第17回日本慢性看護学会学術集会, 9月 (神奈川県/Web開催).

## その他

- 木村ちぐさ, 片岡千明, 柴田真志, 松田朋子 (2023). 専門まちの保健室「看護師による生活習慣病と足の相談」の活動報告 動脈硬化予防のための継続的支援. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 5-7.
- 森菊子(2023). 慢性呼吸器疾患患者の増悪予防のためのセルフモニタリング促進に向けた実践モデルの構築, *看護研究*, 56(5), 456-463.

## 【生涯広域健康看護講座 I】

### 「老人看護学」

#### 著書

- 高見美保 (2023). [分担執筆]. 水野敏子, 水谷信子, 高山茂子 (監修), 最新 老年看護学 (第4版) [pp. 159-166, pp. 310-317, pp. 337-339]. 東京都: 日本看護協会出版会.

## 研究発表

- Takami, M., Sakashita, R., Kawada, M., Nakanishi, E., Ono, H., Kawano, T., Nishiike, E., Nakasuji, Y., Tokuda, S. The influence and recovery of COVID-19 on older adults living in the community. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023, March (Tokyo).
- Tokuda, S. Effects/problems of nursing intervention “to arrange the lives of older people with dementia” in a nursing care hospital. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023, March (Tokyo).
- 高見美保, 小西美和子, 徳田幸代. 加齢変化と老年的超越を基軸に『認知症ケアモデル』を考える. 日本老年行動科学会第25回大会, 9月 (青森).

## その他

- ・高見美保 (2023). 大学院における老人看護領域の教育の実際. 臨床老年看護, 30(3), 49-53.

### 【生涯広域健康看護講座Ⅰ】

#### 「在宅看護学」

##### 著書

- ・大野かおり (2023). [分担執筆]. 酒井明子, 増野園恵 (編), 災害看護 — 災害の専門知識を統合して実践につなげる (改訂第4版) [pp. 323-334]. 東京都: 南江堂.
- ・大野かおり (2023). [分担執筆]. 茂野香おる (筆者代表), 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[1] 看護学概論 (第17版 第4刷) [pp. 333-352]. 東京都: 医学書院.

##### 研究論文

- ・藤本佳子, 大村佳代子, 安田温子, 大野かおり (2023). 新型コロナウイルス感染症の自宅療養者支援における課題と連携の改善策の検討. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 30, 1-13.  
[https://lib.laic.u-hyogo.ac.jp/laic/5/kiyo30/kiyo\\_list\\_30.html](https://lib.laic.u-hyogo.ac.jp/laic/5/kiyo30/kiyo_list_30.html)
- ・小枝美由紀, 大野かおり (2023). 与薬に関する訪問看護師とホームヘルパーの連携モデルの考案. 日本在宅ケア学会誌, 27(1), 65-75.
- ・大村佳代子 (2023). 障がい児と家族に対する COVID-19 の影響: スコーピング・レビュー. 地域ケアリング, 25(10), 68-71.
- ・大野かおり, 西内陽子, 大村佳代子, 安田温子, 藤本佳子 (2023). 「豊かな看取り」の概念分析. 地域ケアリング, 25(12), 56-61.

##### 研究発表

- ・大村佳代子, 安田温子, 藤本佳子, 大野かおり. 従事年数別にみた高齢者集住施設での看取りの実践能力. 第28回日本在宅ケア学会学術集会, 11月 (大阪).
- ・安田温子, 大野かおり. 在宅看護専門看護師が行っている倫理調整の実際. 第28回日本在宅ケア学会学術集会, 11月 (大阪).

## その他

- ・濱上亜希子, 片岡千明, 西池絵衣子, 川田美和, 森菊子, 大野かおり (2022). 高度ケースマネジメント (ハイリスクアプローチ). Phenomena in Nursing, 6 (1), 16-21.
- ・大村佳代子, 大田えりか (2023). 新たな学術用語が JANSpedia に掲載されるまで. 看護研究, 56(5), 446-448.

### 【生涯広域健康看護講座Ⅱ】

#### 【母性看護学】

##### 著書

- ・遠藤佑子 (2023). [分担執筆]. 玉木敦子 (編), これでいいんだ! 妊産婦の生活と育児に寄りそうメンタルヘルスケア [pp. 184-193, pp. 194-203, p. 213, p. 214]. 大阪府: メディカ出版.

- ・工藤美子 (2023). [分担執筆]. 工藤美子 (編), 助産師基礎教育テキスト 2023 年版第 1 巻助産概論・母子保健 [pp. 2-32]. 東京都: 日本看護協会出版会.

## 研究論文

- ・Endo, Y., Saito, I. (2023). Spiritual Support to Improve Women's Mental Health after Miscarriage and Stillbirth: A Qualitative Study in Japan. *Kobe Journal of Medical Sciences*, 70(1), (in press).
- ・遠藤佑子, 大竹麻美, 菅原美帆 (2023). 児を亡くした親たちが訴える「国・自治体への 7 つの要望」 — 親への実態調査結果を厚生労働省に届けるまでの実践報告. *グリーフ&ビリーブメント研究*, 4, 79-86.

## 研究発表

- ・遠藤佑子, 大竹麻美, 菅原美帆. 当事者が行う、家族への支援体制に関する実態調査「赤ちゃんとお別れしたお母さん・お父さんへのアンケート」から明らかとなった当事者ニーズおよび国・自治体への要望. 第 5 回日本グリーフ&ビリーブメント学会学術大会, 2 月 (web 開催).
- ・工藤美子, 沼田富久美, 遠藤佑子, 梅田麻希, 渡邊竹美, 鎌田奈津, ... 山崎峰夫. 兵庫県内にある産科医療施設のメンタルヘルスニーズをもつ妊婦の対応に関する実態調査. 第 19 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 10 月 (東京).
- ・工藤美子, 沼田富久美, 遠藤佑子, 梅田麻希, 渡邊竹美, 鎌田奈津, ... 山崎峰夫. メンタルヘルスニーズをもつ妊婦の対応に関する産科医療施設に勤務する看護職調査. 第 19 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 10 月 (東京).
- ・能町しのぶ, 岡邑和子, 渡邊浩子, 濱田洋実. 妊娠糖尿病妊婦への介入研究に関するスコーピングレビュー. 第 39 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 11 月 (新潟).

## その他

- ・川村麻由香, 相澤千絵, 岡邑和子, 佐々木由佳, 沼田富久美, 原田紀子, ... 工藤美子 (2023). 子育て支援講座「妊婦さんと子育て中のお母さんと助産師の集い — 赤ちゃんとお母さんの睡眠について学ぼう. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 23-24.
- ・佐々木由佳, 原田紀子, 能町しのぶ, 松原朋子, 三浦智恵, 西村佳子, ... 増野園恵 (2023). 2022 年度子育てまちの保健室「るるんルーム」実践報告. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集 8, 14-18.

## 【生涯広域健康看護講座Ⅱ】

### 「小児看護学」

#### 著書

- ・丸光恵 (2023). [分担執筆]. 日本プライマリ・ケア連合学会, 日本家族看護学会, 思春期看護研究会 (編), プライマリ・ケア看護学 小児期から成人期への移行支援 — 家族をケアユニットとした看護 [pp. 2-8, pp. 34-35, pp. 36-41, pp. 80-82]. 東京都: 南山堂.
- ・三宅一代 (2023). [分担執筆]. 中野綾美 (編), 小児の発達と看護 (第 7 版) — 災害を受けた子どもと家族への看護 [pp. 310-320]. 大阪府: メディカ出版.

## 研究論文

- ・岡田弘美, 富岡明子, 小濱京子, 山内栄子, 岩瀬貴美子, 丸光恵 (2023). 看護師が認識する思春期・青年

成人がん患者の困難事例の年齢層別特徴. 日本がん看護学会誌, 37, 25-34. doi: 10.18906/jjscn.37\_25\_okada

## 研究発表

- Maru, M. The analysis of descriptions of initial program theory in realist review of child and adolescents' health care research. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo, Japan).
- Tomioka, A., Maru, M., Iijima, K. perceptions of communication on sexual and reproductive issues between health care professionals and AYA cancer patients in Japan. The 5th Global Adolescent and Young Adult Cancer Congress, June (Long Beach, USA).

## その他

- Ishizaki, Y., Ochiai, R., Maru, M. (2023). Editorial: Advances of health care transition for patients with childhood-onset chronic diseases: International perspectives, volume II. Front. Pediatr. 11:1147397. doi: 10.3389/fped.2023.1147397

## 【生涯広域健康看護講座Ⅱ】

### 「精神看護学」

#### 著書

- 川田美和 (2023). [分担執筆]. 酒井明子, 増野園恵 (編), NICE 看護テキスト災害看護 (改訂第4版) 第Ⅲ章 対象者別にみた災害看護の実際 5 精神看護と災害 C 災害時における精神障害者へのケア 避難所生活を送る精神障がい者への支援 [p. 292]. 東京都: 南江堂.
- 西池絵衣子 (2023). [分担執筆]. 草地仁史 (編), 日本精神科看護協会 (監) みてわかるできる 事例で学ぶ看護過程 精神看護学 Web 動画付 [pp. 172-177, pp. 178-183, pp. 184-189]. 東京都: Gakken.

## 研究論文

- 濱上亜希子, 片岡千明, 西池絵衣子, 川田美和, 森菊子, 大野かおり (2022). 高度ケースマネジメント (ハイリスクアプローチ). Phenomena in Nursing, 6(1), 16-21.
- 森菊子, 西池絵衣子, 片岡千明, 川田美和, 濱上亜希子, 澤村早苗, … 大野かおり (2023). 自分の強みを活かし糖尿病を予防するための特定保健指導プログラムの評価. Phenomena in Nursing, 7(1), 1-11.

## 研究発表

- Hayashida, K. Literature review of nurses working with medical care children in schools keeping one's job — Clarify research question using TEM. The 5th Transnational Meeting on TEA, January (Osaka, Japan).
- Ono, H., Kawada, M., Kataoka, C., Nishiike, E., Hamaue, A., Morioka, K., … Sakashita, R. Structure of needs of older community residents for health behaviors. The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference, March (Tokyo, Japan/Online session).
- 西池絵衣子, 末安民生. 精神分野における地域包括ケアに従事する看護師の対話を重視した教育の方法と検証 — 第2報. 日本精神保健看護学会第33回学術集会, 5月 (神戸).
- 畠山卓也, 西池絵衣子, 竹林令子, 岡京子. 在宅療養を支える精神科外来の実態調査 — 第1報 看護管理者を対象とした調査結果. 第30回日本精神科看護専門学術集会, 11月 (埼玉).
- 畠山卓也, 西池絵衣子, 竹林令子, 岡京子. 在宅療養を支える精神科外来の実態調査 — 第2報 療養生

活継続支援加算の支援担当者を対象とした調査結果. 第30回日本精神科看護専門学術集会, 11月(埼玉).

## 【生涯広域健康看護講座Ⅱ】

### 「助産師養成課程」

#### 研究論文

- ・吉岡なつ美, 米山万里枝, 廣田栄子 (2023). 妊娠後期と産後1ヵ月時の骨盤底自覚症状の実態と変化—骨盤底困窮度質問票日本語版 (J-PFDI-20) による検討. 母性衛生, 64, 288-298.

#### 研究発表

- ・工藤美子, 沼田富久美, 遠藤佑子, 梅田麻希, 渡邊竹美, 鎌田奈津, … 山崎峰夫. 兵庫県内にある産科医療施設のメンタルヘルスニーズをもつ妊婦の対応に関する実態調査. 第19回周産期メンタルヘルス学会学術集会, 10月(東京).
- ・工藤美子, 沼田富久美, 遠藤佑子, 梅田麻希, 渡邊竹美, 鎌田奈津, … 山崎峰夫. メンタルヘルスニーズをもつ妊婦の対応に関する産科医療施設に勤務する看護職調査. 第19回周産期メンタルヘルス学会学術集会, 10月(東京).

## 【生涯広域健康看護講座Ⅱ】

### 「地域看護学」

#### 著書

- ・島村珠枝 (2023). [共同監修]. 医療情報科学研究所 (編), 保健師国家試験のためのレビューブック 2023-2024 [pp. 175-179]. 東京都: メディックメディア.
- ・島村珠枝 (2023). [共同監修]. 医療情報科学研究所 (編), クエスチョン・バンク 保健師国家試験問題解説 2023-2024 [pp. 303-310, pp. 319-326]. 東京都: メディックメディア.

#### 研究論文

- ・Shimoda, Y., Ishii, M., Hori, Y. (2023). Challenges in work-family balance and support needs of Japanese parents with nursery school-aged children. HEALTH, 15, 622-639.

#### 研究発表

- ・Ando, H., Watanabe, H. Primary school-based health education focused on taste perception: literature review. The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo, Japan/Online session).
- ・Ishii, M., Shimoda, Y., Ueno, M., Kurotaki, A., Shimizu, A., Takada, S. Outcomes of postpartum home visit for high-risk mothers of child maltreatment by public health nurses in Japan: A literature review. The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo, Japan/Online session).
- ・安藤仁美, 木内佳織, 渡邊浩子. 小学生の味覚感度と栄養素摂取量および食行動との関連. 第9回母子栄養懇話会学術集会, 6月(Web開催).
- ・安藤仁美, 渡邊浩子. 小学校高学年児童の栄養バランスに関する意識に与える要因の検討. 第82回日本公衆衛生学会総会, 10月(つくば).
- ・芦川琴乃, 石井美由紀, 島村珠枝. 保健所保健師が捉える高齢精神障害者に関わる制度の適用関係におけ

- る支援者連携の現状と困難. 第33回日本医学看護学教育学会学術学会, 3月(豊橋).
- ・合田加代子, 和泉比佐子, 有馬志津子, 石井久仁子, 聲高英代, 中世古恵美, … 島村珠枝 … 道廣陽介. 新興感染症発生時の看護提供体制の構築に関する研究(第3報) — A 県内市町における業務調整に焦点を当てて. 第54回(2023年度)日本看護学会学術集会, 11月(横浜).
  - ・岩本里織, 合田加代子, 成田康子, 廣金和枝, 島村珠枝, 石井久仁子, … 山本暁生. 新興感染症発生時の看護提供体制の構築に関する研究(第2報) — 政令・中核市における受援調整に焦点を当てて. 第54回(2023年度)日本看護学会学術集会, 11月(横浜).
  - ・松田宣子, 石井美由紀, 内村利恵, 伊東愛. 子育て世代包括支援センターの機能・役割に関する研究. 第82回日本公衆衛生学会総会, 10月(つくば).
  - ・寺川えり子, 稲持英樹, 有年貴子, 小林穂高, 石崎優子. Covid-19 流行前後の5歳児健康診査の結果の比較. 第70回日本小児保健協会学術集会, 6月(川崎).
  - ・寺川えり子, 小林穂高, 池田友美, 石崎優子, 古川恵美.ペアレント・トレーニング参加者が語ったこと — 共起ネットワークを用いた分析について. 2022年度ペアレント・トレーニング研究会研究大会, 2月(Web開催).
  - ・寺川えり子, 山本貴美恵, 森由佳, 斎藤美穂, 小林穂高. チーム名張りの多職種でGO! — 保健師の立場でできること. 第20回日本小児心身医学会東海北陸地方会, 3月(Web開催).

## その他

- ・石井美由紀(2023). “隠れた” 特定妊婦・要支援家庭へのシームレスな支援システムの構築. 2019~2022年度科学研究費助成事業基盤研究(C)研究成果報告書.
- ・石井美由紀(2023). 特定妊婦・要支援家庭へのアウトリーチ型支援におけるICTツールの活用と効果検証. 令和4年度科学研究費助成事業基盤研究(C)実施状況報告書.

## 【地域ケア開発研究所】

### 著書

- ・Kanbara, S., Pandey, A., Mashino, S. (2023). [分担執筆]. In S. Has miller, A. Darcy Mahoney, K. Beard (eds.), The future of nursing 2020-2030: Global applications to advance health equity [pp. 117-130]. The nurse's role in achieving health equity in disasters and public health emergencies in Asia. Cham: Springer. [https://doi.org/10.1007/978-3-031-29746-5\\_9](https://doi.org/10.1007/978-3-031-29746-5_9)
- ・増野園恵(編)(2023). 看護管理学習テキスト第3版 別巻 看護管理基本資料集 2023年版. 東京都: 日本看護協会出版会.
- ・増野園恵(2023). [分担執筆]. 増野園恵(編), 看護管理学習テキスト第3版 第1巻 ヘルスケアシステム論 — ヘルスケアサービス提供のための制度・政策 2023年版 [pp. 82-83, p. 112, pp. 122-123, pp. 139-140, p. 142, pp. 183-184]. 東京都: 日本看護協会出版会.
- ・増野園恵(2023). [分担執筆]. 秋山智弥(編), 看護管理学習テキスト第3版 第2巻 看護サービスの質管理 2023年版 [pp. 177-199, pp.324-328]. 東京都: 日本看護協会出版会.

### 翻訳

- ・World Health Organization (2022). WHO guidance on research methods for health emergency and disaster risk management, revised 2022. Geneva: World Health Organization. 増野園恵(訳)(2023). 2.2 ハイリスクグループ

の特定と災害研究への参加促進, 2.7 研究の優先順位, 江川新一(監訳). 災害・健康危機管理の研究手法に関する WHO ガイダンス(pp.88-104, pp. 123-135). 神戸: WHO 健康開発総合研究センター.

## 研究論文

- Hayashi, C., Ogata, S., Toyoda, H., Tanemura, N., Okano, T., Umeda, M., Mashino, S. (2023). Risk factors for fracture by same-level falls among workers across sectors: a cross-sectional study of national open database of the occupational injuries in Japan. *Public Health*, 217, 196-204. doi: 10.1016/j.puhe.2023.02.003
- Tsukuda, M., Ito, Y., Kakazu, S., Sakamoto, K., Honda, J. (2023). Development and validity of the Japanese version of the questionnaire on factors that influence family engagement in acute care settings. *Nursing Reports*, 13, 601-611. doi: 10.3390/nursrep13020053
- Van Riper, M., Knafl, G. J., Knafl, K. A., ... Honda, J., ... Silva, M. J. R. (2023). Family adaptation in families of individuals with Down syndrome from 12 countries. *American Journal of Medical Genetics Part C: Seminars in Medical Genetics*. doi: 10.1002/ajmg.c.32075
- Yamaguchi, M., Honda, J., Fukui, M. (2023). Effects of parental involvement on glycemic control in adolescents with type 1 diabetes mellitus: A scoping review. *Journal of family nursing*, 29(4). doi:10.1177/10748407231171842
- 梅田麻希, 竹村和子, 本田順子, 築田誠, 塩見美抄 (2022). 糖尿病予防に向けたポピュレーション・アプローチの開発 — 自治体と大学の協働による検討. *Phenomena in Nursing*, 6(1), 12-15. doi: 10.24640/purs.6.1\_S12
- 若林尚子, 中口尚始, 高谷知史, 本田順子, 西村範行 (2023). 新型コロナウイルス感染症流行が市中病院における小児のワクチン接種に及ぼした影響. *小児保健研究*, 82, 304-312.
- 築田誠, 谷口麻希, 竹村和子, 本田順子, 森本雅和, 塩見美抄(2023). 2型糖尿病に関する食生活行動調査からのポピュレーションアプローチに向けたセグメンテーションの検討. *Phenomena in Nursing*, 7(1), R1-R9.
- 国分映希, 本田順子(2023). 疾患を経験した子どもの Posttraumatic Growth (心的外傷後外傷)に関する文献検討. *日本小児看護学会誌*, 32(64), 213-222.

## 研究発表

- Asaoka, Y., Kawakami, C., Yosida, M., Kato, T., Watsuji, T., Honda, J., Ikeda, M. Report on support by nurse specialists in family health nursing for cancer patients and families treated at home. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- Fukui, M., Ogasawara, M., Kitao, M., Honda, J., Fujita, Y. Differences in practice and degree of significance in support to enhance decision-making abilities for pediatric nurses in Japan. The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference, March (Tokyo, Japan).
- Honda, J. Incubating family nurse scientist across the globe. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- McAndrew, N., Clisbee, D., Brysiewicz, P., ... Honda, J., Tehan, T. A global examination of nurse practices to engage families in the intensive care unit. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- Nojima, K., Honda, J., Tsukuda, M., Kawahara, N., Kawamura, K., Matsumoto, K. Development of a family nursing online simulation-based education program for home visiting nurses report 2: Conducting beta test. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- Takatani, S., Honda, J., Hohashi, N. The influence factors of family concordance between families and health care

- providers: Content analysis of semi-structured interviews with families having a chronically ill patient. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
- ・ Tsukuda, M., Ito, Y., Kakazu, S., Honda, J. Family Engagement in patient care in the critical care: A comparison between the U.S. and Japan using QFIFE. 16th International Family Nursing Conference, June (Dublin, Ireland).
  - ・ 福井美苗, 小笠原史士, 北尾美香, 本田順子, 藤田優一. 慢性疾患患児への意思決定支援の実施状況 小児が入院する病棟看護師の外来経験での比較. 日本小児看護学会第33回学術集会, 7月 (神奈川).
  - ・ 福地成, 石崎優子, 古川恵美, 井上靖子, 増野園恵, 林知里, 梅田麻希. 東日本大震災による孤児を里子として迎え入れた里親のインタビュー. 第64回日本児童青年精神医学会総会, 11月 (弘前)
  - ・ 勝田仁美, 本田順子, 吉川亜矢子, 碓定永里雅. 学童期におけるこどもの生活と発達の「見えづらさ」の現象とその要因と課題. 日本小児看護学会第33回学術集会, 7月 (神奈川).
  - ・ 国分映希, 本田順子. 小児期の手術の経験に関連した Posttraumatic Growth(心的外傷後成長) の実感とその要因. 日本小児看護学会第33回学術集会, 7月 (神奈川).
  - ・ 国分映希, 本田順子. 疾患を経験した子どものPosttraumatic Growth (心的外傷後成長) に関する文献検討. 日本小児看護学会第33回学術集会, 7月 (神奈川).
  - ・ 國松秀美, 臼井千津, 堀内美由紀, 宮本純子, 増野園恵. 看護系大学における洪水災害発生時の地域連携と備えの現状 — 全国看護系大学の調査から. 日本災害看護学会第25回年次大会, 9月 (姫路).
  - ・ 林知里. 二卵性男女ペアを含めた双生児法 — 表現型にみる遺伝・環境要因への性差の影響. 第93回日本衛生学会総会, 3月 (東京)
  - ・ 本田順子. 在宅医療のケア児の健康, 発達, 参加を支えるための家族支援. 第27回日本医療保育学会総会・学術集会, 6月 (神戸).
  - ・ 本田順子, 萩岡あかね. 総合病院の看護師が認識する難しい小児看護技術と学習ニーズについて. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (山口).
  - ・ 本田順子, 新家一輝, 島田なつき, 相墨生恵, … Petra, B. 急性期領域における家族の意思決定支援 — 日本とアフリカの比較から見えるもの. 日本家族看護学会第30回学術集会, 9月 (大阪).
  - ・ 野島敬祐, 本田順子, 築田誠, 萬代彩子. デジタル模擬患者とゲーミフィケーションを活用したオンラインシミュレーションの試み—訪問看護師への家族看護セミナーを通して. 第15回日本医療教授システム学会総会学術集会, 3月 (東京).
  - ・ 小野博史, 本田順子, 濱上亜希子, 竹原歩, 國領了美, 森永尚子, … 坂下玲子. 聴き手の効果的な働きかけが実践の意味の言語化を促進した一事例の分析. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (山口).
  - ・ 田口奈緒, 林知里, 福本環. 周産期の心理的トラウマに配慮したケアプロトコルの開発に関する研究. 第64回母性衛生学会, 10月 (大阪).
  - ・ 徳永奈津子, 本田順子. 医療的ケア児を受け入れる保育所が担う役割の具体化に向けた取り組み. 第70回日本小児保健協会学術集会, 6月 (神奈川).
  - ・ 築田誠, 伊東由康, 坂本佳津子, 賀数勝太, 本田順子. 日本語版The Questionnaire on Factors that Influence Family Engagement (QFIFE) の開発. 第50回日本集中治療医学会学術集会, 3月 (京都).
  - ・ 築田誠, 伊東由康, 坂本佳津子, 賀数勝太, 本田順子. 集中治療領域における看護師が認識する家族のケア参加を促進するための要因 — 日本語版The Questionnaire on Factors that Influence Family Engagement (QFIFE-J) を活用した調査. 日本家族看護学会第30回学術集会, 9月 (大阪).
  - ・ 築田誠, 野島敬祐, 伊東由康, 本田順子. 安全な人工呼吸器管理を支援するシステム構築に向けたインシデント事例の分析—事例内容のテキストマイニングより. 第43回日本看護科学学会学術集会, 12月 (山口).

- ・若林尚子, 中口尚始, 高谷知史, 本田順子, 西村範行. 市中病院小児科外来の新型コロナウイルス感染症流行後1年間におけるワクチン接種の動向. 第70回日本小児保健協会学術集会, 6月 (神奈川県).

## その他

- ・荒木暁子, 本田順子 (2023). 子どもの居場所の現在とこれから. 小児看護, 46(7), 777.
- ・朝熊裕美, 林知里 (2023). 「兵庫県立大学発フレイルの最先端が学べるフォーラム 正しく知れば怖くない！」実施報告. 地域ケア開発研究所活動報告集, 8, 37-39.
- ・林知里 (2023). WHO NEWS 「ぼうさいこくたい 2022」が神戸で開催「災害時の活動における支援者のこころとからだの健康」セッション報告. 看護, 75(2), 60.
- ・林知里 (2023). WHO NEWS 第76回世界保健総会で「よりよい健康のための行動科学に関する決議」が採択. 看護, 75(10), 54.
- ・林知里 (2023). 令和4年度「一般まちの保健室」(拠点型) 東播支部主催「まちの保健室研修会」実践報告. 地域ケア開発研究所活動報告集, 8, 11-13.
- ・本田順子 (2023). こどもの居場所研究について概観する一文献検討からみえる看護職の役割. 小児看護, 46, 778-783.
- ・本田順子 (2023). Transcultural Nursing とは. 小児看護, 46, 1054-1060.
- ・本田順子 (2023). WHO NEWS ポストコロナの災害対応強化に向けて. 看護, 75(15), 55.
- ・本田順子, 谷口麻希, 塩見美抄, 竹村和子, 築田誠(2023). 糖尿病予防に関するポピュレーションアプローチの先駆的事例分析. Phenomena in Nursing, 7(1), G1-G8.
- ・北川美波, 増野園恵 (2023). モンゴルにおける看護師のための災害健康危機管理ワークショップ開催報告. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 40-43.
- ・北川美波, 松田朋子, 澤田雅浩, 増野園恵 (2023). 台湾 921 地震と 88 水害後の地域復興に関する調査. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 44-48.
- ・大村佳代子, 林知里, 本田順子, 藤本佳子, 山口智子 (2023). 子どもケアに関わる多職種の集い「いちばんぼし★きぼうカフェ」活動報告. 地域ケア開発研究所活動報告集, 8, 8-10.
- ・増野園恵 (2023). WHO NEWS 第4回西太平洋地区 WHO 協力センターフォーラム(WHOCC フォーラム) の開催. 看護, 75(5), 62.
- ・増野園恵 (2023). WHO NEWS アジア太平洋地域の健康安全保障に関する新たな枠組み. 看護, 75(12), 58.
- ・佐々木由佳, 原田紀子, 能町しのぶ, 松原朋子, … 岡邑和子, 工藤美子, 増野園恵(2023). 2022 年度子育てまちの保健室「るるんルーム」実践報告. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 14-18.
- ・竹村和子, 梅田麻希 (2023). 多文化共生社会における健康支援の挑戦 「加東げんきサロン」と「国際まちの保健室 in 西宮」報告. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 19-22.
- ・梅田麻希 (2023). WHO NEWS モンゴルにおける看護師のための災害健康危機管理ワークショップ. 看護, 75(7), 62.

## 【周産期ケア研究センター】

### 研究発表

- ・Kitamura, A., Matsubara, T., Fujimoto, K. Cooperative learning : Concept analysis. 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, March (Tokyo, Japan/ Online session).

**その他**

- ・川村麻由香, 相澤千絵, 岡邑和子, 佐々木由佳, 沼田富久美, 原田紀子 ... 松原朋子 ... 工藤美子 (2023). 子育て支援講座 「妊婦さんと子育て中のお母さんと助産師の集い」 赤ちゃんとお母さんの睡眠について学ぼう. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 23-24.
- ・松原朋子, 安宅満美子, 黒澤真澄, 今ひろみ, 難波葉子, 原田恵美 ... 吉田美里 (2023). 2022 年度第 3 回保健指導部会 部会集会報告と 2023 年度の保健指導部会活動計画. 助産師, 77(3), 76-77.
- ・佐々木由佳, 原田紀子, 能町しのぶ, 松原朋子, 三浦智恵, 西村佳子 ... 増野園恵 (2023). 2022 年度 子育てまちの保健室「るんるんルーム」実践報告.兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 8, 14-18.

## 兵庫県立大学明石地区規程第5号

## 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要規程

## (目的)

第1条 兵庫県立大学看護学部及び地域ケア開発研究所は、研究成果を発表するため紀要を発行する。

## (名称)

第2条 この紀要の名称は、「兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要」(以下「紀要」という。)とする。

## (編集)

第3条 「紀要」の編集は、明石地区学術情報委員会(以下「学術情報委員会」という。)が行う。

## (発行)

第4条 「紀要」は、年1回定期的に発行する。ただし、特別に必要があると学術情報委員会が認めたときは、臨時にこれを発行することができる。

## (投稿資格)

第5条 「紀要」への投稿資格者は次のとおりとする。

- (1) 看護学部及び地域ケア開発研究所の専任教員(以下「専任教員」という。)
- (2) 大学院看護学研究科の学生
- (3) 研究生、研修員;いずれも専任教員との共同研究であること。
- (4) 元専任教員または元大学院生;研究内容が本学在職中または本学在籍中のものに引き続くものであること。
- (5) 非常勤講師及び客員教員
- (6) 学外者;専任教員との共同研究であること。
- (7) その他学術情報委員会が投稿を依頼した者、学術情報委員会が適当と認めた者

## (掲載範囲)

第6条 「紀要」に掲載する内容は次のとおりとする。

- (1) 研究論文(未発表のものに限る。)
- (2) 研究報告(未発表のものに限る。)
- (3) 総説
- (4) 研究業績

## (掲載の選択)

第7条 「紀要」への掲載の選択は、学術情報委員会がこれにあたる。ただし、論文の内容によっては、学術情報委員会が適当な第三者に、その審査を依頼することがある。

## (投稿要綱)

第8条 投稿原稿については、別途定める投稿要綱によるものとする。

## (紀要の著作権の帰属)

第9条 「紀要」に掲載された論文等の著作権は、明石看護学術情報館に帰属する。ただし、投稿者自身は、自らの論文等の全部又は一部を複製、出版することができる。投稿者は、明石看護学術情報館を通じたインターネット上での公開を了承したものとする。なお公開におけるクリエイティブ・コモンズ・ライセンスは、『表示-非営利-改変禁止』とする。

## (規程の改正)

第10条 この規程の改正は、看護学部教授会及び地域ケア開発研究所運営委員会の議決による。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年8月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年12月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年6月15日から施行する。

## 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 投稿要綱

この投稿規定は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要規程第8条の規定に基づいて、紀要への投稿に関して必要な事項を定めるものとする。

### 1. 主旨

兵庫県立大学看護学部及び地域ケア開発研究所は、研究成果を発表するため紀要を発行する。

### 2. 発行

紀要は、年1回定期的に発行する。ただし、特別に必要があると学術情報委員会が認めたときは、臨時にこれを発行することができる。

### 3. 投稿原稿の範囲

原稿の種別と基準は下記のとおりである。

【研究論文】：テーマが明確で独創性に富み、新しい知見とその意義が論理的に示されているもの

【研究報告】：研究結果の意義が明らかで報告する価値があるもの、研究上の問題提起、興味深い現象や事例などに関するもの

【総説】：特定の主題に関して、文献レビュー等に基づいて研究の状況を幅広く概説し、考察したもの

【その他】：学術の発展において、何らかの示唆をもたらすもの

### 4. 著者の資格

著者の資格は、International Committee of Medical Journal Editors (ICMJE) の規定に基づき、以下の4つの条件全てを満たす者を著者とする。

- a. 研究のコンセプトや研究のデザインに実質的に貢献した者、または、研究において、データの収集・分析・解釈に実質的に貢献した者
- b. 論文原稿（草稿）の執筆をした者、または、専門知識に基づいて論文原稿の重要な修正に関与した者
- c. 出版される最終原稿に対して承諾した者
- d. いかなる部分においても、研究の正確さや内容に疑義が生じた際、適切に調査に応じ、問題の解決を図ることを保証するため、全ての研究内容について責任を持つことに同意している者

上記 a から d までの条件全てを満たしていない者は、著者に加えることはできない。研究資金を調達した者（あるいは研究資金の提供先）、一般的なアドバイスをしてくれた者、研究環境を用意してくれた者、執筆の補助や翻訳の補助、文章の校正をしてくれた者など、一定の貢献があった者は、謝辞に記載する。なお、謝辞では、「研究参加への協力」「助言」「データの収集」「研究補助」「原稿執筆の校正」など、具体的にどのような貢献をしたのか明示する。

### 5. 倫理的配慮

- 1) 人および動物が対象である研究は、倫理的に配慮され、その旨が本文中に明記されていること。
- 2) 人および動物が対象である研究については、主となる研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得ていること。承認番号は文中に記載する。

### 6. 謝辞

当該研究の遂行に関して受けた研究助成がある場合、また、著者以外で当該研究の遂行や論文作成に貢献した者（以下、貢献者）がいる場合は、「謝辞」の欄に各貢献者の貢献内容を記して謝意を述べる。

### 7. 利益相反\*

著者全員について、投稿時から遡って過去1年以内での発表内容に関係する企業・組織または団体との COI 状態を以下のように記載する。当該研究の遂行や論文作成において、A) 利益相反となるような経済的支援を受けた場合には、

その旨を記載し、B) 利益相反状態が存在しない場合には、「本研究における利益相反は存在しない」と記載する。

\*利益相反：外部との経済的な利益関係等によって、公的研究で必要とされる公正かつ適正な判断が損なわれる、または損なわれているのではないかと第三者から懸念が表明されかねない事態「厚生労働科学研究における利益相反 (Conflict of Interest : COI) の管理に関する指針」(平成20年3月31日科発 0331001号)。

## 8. 原稿の受付および採否

- 1) 原稿は、電子媒体での提出とする。原本1部と副本1部を、学術情報館紀要専用メールアドレス (kiyoakashikango@cnas.uhyogo.ac.jp) 宛に送付する。提出にあたっては、副本の表紙及び本文に含まれる著者を特定できるような事項は伏せるとともに、提出ファイルのプロパティに含まれる個人情報も、以下に示すような方法で削除しておく。

### 【プロパティの作成者情報を削除する方法】

該当ファイルを右クリックし「プロパティ」を選択→「詳細」の表示の左下にある「プロパティや個人情報を削除」をクリック→「可能なすべてのプロパティを削除してコピーを作成」を選択し→「OK」をクリック

### ※【Adobe無料版を使用の場合】

該当ファイルを「名前を付けて保存」→「ファイルの種類:PDF」を選択し「オプション」をクリック→ドキュメントのプロパティのチェックをはずし→「OK」→「保存」をクリック

- 2) 紀要に投稿された論文等は、編集会議が依頼した査読者の審査結果に基づき、編集会議がその採否を決定する。
- 3) 査読結果によっては、編集会議は、投稿種別の変更を著者に求める場合がある。
- 4) 論文の受諾が決定した場合、投稿者は原稿の入力された記憶媒体を学術情報委員会に提出すること。

## 9. 著作権

紀要に掲載された論文等の著作権は、明石看護学術情報館に帰属する。ただし、投稿者自身は、自らの論文等の全部又は一部を複製、出版することができる。投稿者は、明石看護学術情報館を通じたインターネット上での公開を了承したものとする。なお公開におけるクリエイティブ・コモンズ・ライセンスは、『表示-非営利-改変禁止』とする。

## 10. 著者校正

査読を経て、編集委員会で受理された投稿原稿については、業者において掲載様式(2段組み)に変更される。変更された原稿を確認し、著者校正を1回行う。ただし、校正の際の加筆は原則として認めない。

## 11. 著者が負担すべき費用

- 1) 掲載料は、原則として無料とする。
- 2) 図表等、特別な費用を必要とした場合は著者負担とする。

## 12. 原稿執筆の要領

- 1) 投稿しようとする者は、以下に示す①～④を個別のファイルとしてMS-Wordで作成し(図や表はMS-Excelでも可)、「.docx」形式(バージョンWord 2007以降)で保存する。必ず投稿前にファイル内の文字化け、画像の鮮明度などを確認し、PDFファイルに変換し、上述の手順でプロパティの作成者情報を削除する。

- ① [様式1] 紀要投稿者情報
- ② [様式2] 紀要要旨(論文の題目・キーワード・和文要旨・英文要旨を含む)
- ③ [様式3] 投稿原稿本文(謝辞・利益相反・文献を含む)
- ④ 図表(必要に応じて作成)：図表タイトルと説明文含む

- 2) 様式1には、①投稿区分・②題目（和文英文）・③著者名（和文英文）・④所属機関（和文英文）・⑤キーワード（和文英文共にそれぞれ5語以内。重要な順に列挙し、英語表記の際は、単語の1文字目のアルファベットのみ大文字で記載する。例：Nursing education, health promotion, students）・⑥ランニングタイトル（和文 20文字以内、英文 40文字以内）・⑦代表者の連絡先住所を記載する。提出時の副本については③・④・⑦の情報を入れずに作成する。
- 3) 様式2には、①題目（和文英文）・②キーワード（和文英文）・③和文要旨（800字以内）と英文要旨（300words以内）を入れる。英文抄録はプルーフリーディング（英語を母国語とする専門家の校正）を受けておく。
- 4) 様式3には、本文・謝辞・利益相反・文献を入力する。
  - ・原稿本文中の読点は「，」（全角コンマ）または「、」、句点には「。」または「.」（全角ピリオド）のいずれを用いても良いが、原稿内で用い方を統一すること。ただし本文中のCitations部分に限って、人名が英語表記の場合のみ、半角コンマ+半角スペースを用いる。また文中の括弧は全角、半角のいずれを用いてもよい。その他詳細は、下記7)の【本文原稿】の欄を参照。
  - ・MS-Wordで作成し、「.docx」形式（バージョンWord 2007以降）で保存の後、PDFに変換し、ファイルのプロパティから作成者情報を削除しておく。
  - ・投稿原稿から本原稿の著者が特定できるような情報（例えば：受審した倫理審査委員会名称、データ収集先名称、投稿者自身の先行研究を使用した場合の表記など）は、黒マーカーで隠した形で示すこと。（MS-Wordファイルのままの場合、黒マーカー部分は解除できてしまうが、それをPDFに変換して提出するため、査読者は見える形には戻せない。）
  - ・原稿右欄外には図、表、写真の挿入希望位置を示す。
- 5) 様式2と3の原稿には、MS-Wordの行番号機能を用いて左端に行番号（連続番号）をつける。
- 6) 投稿原稿の本文（謝辞・利益相反・文献を含む）と図表の合計枚数は、原則として和文24枚、英文10枚以内とする。図表（写真を含む）については、印刷面積により原稿枚数に換算する。既定の枚数を超える場合は、提出前に学術情報館館長に申し出ること。
- 7) 原稿は、American Psychological Association（APA）スタイルに準じて本雑誌が設けた投稿様式で整えることとする。原稿の作成にあたっては以下の点に注意する。

#### 【本文原稿】

(1) 和文の投稿原稿はA4判横書きで、1行の文字数を30字、1ページの行数を28行（約900字）とし、英文投稿原稿も1行の文字数を30字、1ページの行数を28行とする。余白は、上20mm、下20mm、左右20mm、とじしろ0mm、とじしろの位置左とし、いずれの場合も両端揃えにする。原稿本文の書体については、ひらがな・カタカナ・漢字はMS明朝とし、半角英数文字はTimes New Romanを用いる。しかし、本文中に強調したい文字がある場合は、MSゴシック体あるいは太字を用いてもよい。投稿原稿は11ポイントで作成する。

(2) 原稿本文中の読点は「，」（全角コンマ）または「、」、句点には「。」または「.」（全角ピリオド）のいずれを用いても良いが、原稿内で用い方を統一すること。ただし本文中のCitations部分に限って、人名が英語表記の場合のみ、半角コンマ+半角スペースを用いる。文中の括弧は全角、半角のいずれを用いてもよい。

(3) 外国語は原則、カタカナで表記し、外国人名や日本語訳が定着していない学術用語などは、原則として活字体の原綴で書く。

(4) 西暦と和暦は混合させて用いない。ただし必要がある場合は併記を可とする。

(5) 見出し番は、原則として下記の順でレベルを小さくする。また、見出しに番号をつける際には、自動段落番号の機能は使用せずにアラビア数字は半角で入力し、見出し番号の後のピリオド「.」やカッコ記号は全角とする。以下に示しているのは雑誌掲載時の文字サイズと書体であるが、投稿原稿はすべて11ポイントのMS明朝で作成すること。

- ・1番目（11ポイントMSゴシック）：全角ローマ数字+全角ピリオド

例：I. II. III. IV. V. VI. VII. VIII. IX. 一段目の見出し

- ・2番目（11ポイントMSゴシック）：半角数字+半角ピリオド+半角スペース

### 例：1. 二段目の見出し

- ・ 3番目 (11ポイントMS明朝+Times New Roman) : 半角数字の後ろに全角括弧閉じ  
例：1) 三段目の見出し
- ・ 4番目 (11ポイントMS明朝+Times New Roman) : 全角括弧の中に半角数字  
例：(1) 四段目の見出し
- ・ 5番目 (11ポイントMS明朝+Times New Roman) : 丸囲み数字+半角スペース  
例：① 五段目の見出し

(6) 本文中で用いる数字は、桁数によらず、すべて半角 (Times New Roman) を用いる。四桁以上の数量を表す場合は、三桁ごとに半角コンマを入れる。

(7) 文中にローマ数字を用いる場合も、全角文字 (全角MS明朝) を使用する。

### 【図表】

- (1) 図、表および写真は、図 1. 表 1. 写真 1. など通し番号 (半角) + 全角ピリオドをつけ、1 ページに 1 点として作成し、字体は原則としてMS明朝やTimes New Romanを用いる。
  - ① 掲載原稿の本文は2段組みになるため、初回に提出する原稿の段階において、片方のコラムに入れる場合の図表の幅は8 cm以下で作成し、両コラムにまたがった図表を入れる場合は幅が16.5cm以下になるように著者が作成する。
  - ② 図表のタイトルは末尾にはピリオド「.」や句点「。」を付けず、表では表の上に、図では図の下に左揃えて10ポイントのMSゴシック体で記載する。
  - ③ 図表中に日本語文字が多い場合はMS明朝を、半角英数字が多い場合はTimes New Romanを用いることが望ましい。
  - ④ 図表の注釈は (MS明朝, 9ポイント以上)、図表の下に簡潔に記す。説明文の終わりには句点を付ける。全体に関する補足説明は、図表の後に説明文を添える。特定部分に関する注には、表中の該当箇所に注の符号 (a, b, c の上つき文字) を付け、複数ある場合は、原則改行せずに続ける。読者が本文の説明を読まなくとも、その図あるいは表の内容を理解できるように工夫すること。なお、図と表で内容が重複しないように注意する。
  - ⑤ 符号の表記：統計学上の「\*」、「\*\*」や「†」などの符号は、5%、1%、10%の統計上の有意水準を示すときに用い、数値の右肩に示し、図表の下部にその旨を示す。
- (2) 図について
  - ① 作図：作図は、縮尺を考慮して線の太さを決め、コントラストに留意する。なお、原則、色を使わずモノクロで仕上げる。座標軸や曲線、折れ線の太さは、論文を通じて一定とする。同一論文中に比較対照すべき複数の図があるときは、全部で同じ目盛りを用いる。
  - ② 図中の文字：座標軸の説明とその単位は各軸の外側中央に示す。縦軸は、日本語の場合は縦書きとし、英語の場合は下から上に向かって横書きで書く。
- (3) 表については、MS-Excelによる作成を推奨する。
  - ① 原則、表の左の項目は左揃えとし、数値は右揃え、小数点の位置、小数点以下の桁数を揃える。
  - ② 数値の単位は、数字が縦に並ぶときはその数値に関する見出しの下、横に並ぶときは項目の右に書き入れる。表中の数字が理論的に必ず 1 以下の場合 (たとえば、相関係数) は、「0」を付けずに「.52」のように小数点以下のみを書く。
  - ③ 表中の線はできるだけ少なくし、適当なスペースをとる。

### 【註】

- (1) 本文中に註を挿入する場合は、挿入する箇所の右肩に片括弧を使用して挿入順に番号を付すこと。
- (2) 註の記載方法
  - ① 註は文末註とする。
  - ② このほか、原則として引用文献と同様の要領によるものとするが、各専門分野の慣用に従うこともできることとする。

### 【文献】

- (1) 本文中の文献表記方法 (Citations)
  - ① 文中で文献を表示する場合は、著者名と出版年を用いる。
  - ② 文献が日本語であっても外国語であっても、文中の括弧は全て全角を用いる。著者名と出版年の間には、全角コン

マ「,」を用いるが、著者名が英語表記の場合は、半角コンマ+半角スペースを用いる。

- ③ 翻訳本を文中で表記する場合は、原著者名と原著出版年および翻訳書籍出版年の両方を記載する。

例：Watson (1980/2017) によれば…である。

- ④ 複数の出典を1つの括弧で表記する場合は、第一著者の姓のアルファベット順に並べ、出典の間は全角セミコロンでつなぐ。

例：(明石ら, 2017a ; 明石ら, 2017b ; Hyogo, 2010 ; 神戸, 2011 ; Luminaire et al., 2018)

- ⑤ 複数著者の場合で初出であっても第一著者の姓と日本語論文では「ら」を、英語論文では「et al.」をつける表記でよい。第一著者のみの表記となるので「et al.」の前のコンマは不要である。出典元の区別がつかない場合は、出版年のあとに小文字のアルファベットを付し区別する。文献リストにも同様にアルファベットをつける。

例：高校生を対象とした研究(兵庫ら, 2018a)では、睡眠時間は…であることが明らかとなっている。また、兵庫ら(2018b)は…携帯電話の使用が…であると主張している。

日本人若年者は柑橘系の香りを好む(Akashi et al., 2018a)が、Akashi et al.がアメリカ人を対象とした研究(2018b)では柑橘系よりもフローラルな香りを好むという結果が得られている。

- ⑥ 直接引用を用いた場合は、引用した文章をカギ括弧で囲み、その後に括弧で著者、出版年、ページ番号も示す。

例：「患者には患者役割があり、それは疾病からの回復を左右する重要な因子である」(明石ら, 2017a, p.6) ことから…

## (2) 文献リストの記載方法 (References)

- ① 引用文献(原文のままの引用した文献と、要約した形で引用した文献の両方を含む)は、第一著者の姓のアルファベット順に文献情報を列記する。
- ② 文献が日本語であっても外国語であっても、括弧、コンマ、ピリオド、アルファベット、数字は、すべて半角を用いる。左括弧(始め括弧)の前、右括弧(閉じ括弧)の後、コンマの後などには、半角スペースを入れる。ただし右括弧(閉じ括弧)のすぐ後にコンマやピリオドがくる場合は、括弧とコンマ(ピリオド)の間のスペースは不要。また、「巻(号)」の形で記載する場合は、巻と左括弧(始め括弧)の間のスペースは不要。
- ③ 1つの文献が2行以上にまたがる場合、2行目以降は全角2マス分下げる。
- ④ 文献雑誌名の省略は、原則として和文は医学中央雑誌、欧文はIndex Medicusの採用する略語を用いる。いずれにも該当しないものは、正式雑誌名を記載する。
- ⑤ 著者名の記載は以下のとおりとする。

### [著者名：日本語文献の場合]

- a) 著者名は、姓、名の順に続けて記載する。姓と名の間は空けない。例：明石華怜
- b) 著者3名までは列挙し、4名以降は「ほか」で略す。著者名を半角コンマと半角スペースでつなぐ。  
例：明石花蓮、兵庫湊、推名海(2018a)。 明石花蓮、推名海(2018b)。  
明石花蓮、明石華怜、神戸留美ほか(2018c)。
- c) 政府・官庁・研究機関など団体名義の著作物は正式名称を略さずに書き、個人著者名の場合と同様にアルファベット順に並べる。  
例：厚生労働省

### [著者名：海外文献の場合]

- a) 日本語以外の名前であっても、姓→名の順で表記し、ファミリー・ネーム(スペルアウト)+半角コンマ+半角スペース+ファースト・ネーム(イニシャル)+半角ピリオド+半角スペース+ミドル・ネーム(イニシャル)+半角ピリオドを付ける。ただし、ミドル・ネームは示さなくとも可とする。
- b) 英語に翻訳された書籍の翻訳者を記載する場合の英語名の表記の順は上記とは異なり、名(イニシャル)+半角ピリオド+半角スペース+姓(スペルアウト)+半角コンマ+半角スペース+“Trans.”の順となる。
- c) 著者3名までは列挙し、4名以降は「et al.」で略す。著者名は、半角コンマと半角スペースでつなぎ、&は使用しない。

例：Donald John Smith & Donald John Smith Jr.

⇒ Smith, D. J., Smith Jr., D. J. (2018).

例：Donald John Smith, Jared Corey Johnson, Ivanka Marie Smith, Melania Smith,,,

⇒ Smith, D., Johnson, J., Smith, I., et al. (2018).

d) 同姓かつ名のイニシャルも同じ著者があり、出典の区別がつかないときには、名も略さずに書く。

例：Smith, Donald (2017). Smith, Denney (2017).

⑤ 出版年：同一著者が同じ年に出版している文献があり、著者名と出版年のみ記載が同じになる場合は、出版年の後にアルファベットをつけて区別する。

例：明石華怜, 神戸瑠美奈 (2017a) 明石華怜, 神戸瑠美奈 (2017b)

⑥ 雑誌名・論文名等：原則として正式名称を省略せず記載する。論文の題目は副題も含めて略さずに書く。日本語文献では、副題の前に全角ダッシュ (―) を使用し、ダッシュの前後には半角スペースを入れる。外国語文献では、原則として題目と副題の最初の語の頭文字、固有名詞のみ大文字とし、副題は半角コロン (:) + 半角スペースのあとに続ける。

⑦ 出典の種類によって記載が必要な書誌情報の項目は異なる。

#### 雑誌掲載論文

・「著者名 (出版年). 論文の題目. 掲載雑誌名, 号もしくは巻(号), 開始ページ-終了ページ」の順に記載し、ページ間の記号には半角ダッシュ (-) を用い、雑誌や書籍名はイタリックにしなくともよい。巻のみ記す場合は通し番号を用い、巻と号を示す場合はその号のページ番号を記載する。

例：会田博, 松木健, 北川望ほか (2010). 慢性腎疾患をもつ子どもと健康児の QOL の比較. 心と体, 2, 67-74.

例：Matsunaga, R., Yokosawa, K., Abe, J. (2014). Functional modulations in brain activity for the first and second music: A comparison of high- and low- proficiency bimusicals. *Neuropsychologia*, 54, 1-10.

#### 書籍

・書籍全体を用いた場合、「著者名 (出版年). 書籍名 (初版以外は版数). 発行地: 出版社」の順に記載する。

例：American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.)*. Washington, DC: American Psychological Association.

宮埜寿夫 (1993). *心理学のためのデータ解析法*. 東京都: 培風館.

・編集された書籍を用いた場合は、「編集者名 (編) (出版年). 書籍名 (初版以外は版数). 発行地: 出版社」の順に記載する。英語書籍については編集者が1名の場合 (Ed.), 複数の場合には (Eds.) を用いる。

例：川原隆造, 前田久雄, 吉岡伸一 (編) (2000). *現代病としての睡眠障害*. 東京都: 日本評論社.

Redeker, N., Mcenany, G. (Eds.) (2011). *Sleep disorders and sleep promotion on nursing practice*. NY: Springer Publishing Company.

・書籍の特定の章または項を用いた場合、日本語論文では、「章または項の著者名 (出版年). 章または項の題目. 編集者名 (編), 書籍名 (初版以外は版数) (その章のpp. 開始ページ数-終了ページ数). 発行地: 出版社名。」の順に記載する。ページ数が単数の場合は「p.」, 複数の場合は「pp.」と表記し「p.」や「pp.」の後ろには半角スペースを入れる。また、ページ間の記号には半角ダッシュ (-) を用いる。なお、副題のダッシュ (―) には全角を使用し、その前後に半角スペースを入れる。英語論文では、編集者は「In 編集者の名のイニシャル. 性」で示し、副題はコロンでつなげる。

例：坂本真士 (2013). 論文投稿に向けて. 坂本真士, 大平英樹 (編), *心理学論文道場 — 基礎から始める英語論文執筆 (pp. 16-50)*. 京都府: 世界思想社.

例：Sato, T. (1998). Dmax: Relations to low- and high-level motion processes. In T. Watanabe (Ed.), *High-level motion processing (pp. 115-152)*. Cambridge, MA: MIT Press.

#### 翻訳書

・日本語に翻訳された書籍は、「原著者名 (原書出版年). 原書名 (初版以外は版数). 原書発行地: 原書出版社 翻訳者名 (監訳または訳) (翻訳書出版年). 翻訳書名 (初版以外は版数). 翻訳書発行地: 翻訳書出版社」の順に記載する。

・日本語に翻訳された書籍の特定の章または項を用いた場合は、「原書の章または項の著者名 (原書出版年). 原書名 (初版以外は版数). 原書発行地: 原書出版社. 章または項の翻訳者名 (監訳または訳) (翻訳書の出版年). 章または項の題目, 翻訳書の監訳者名 (監訳). 翻訳書名 (初版以外は版数) (その章または項のpp. 開始ページ-終了ページ). 翻訳書発行地: 翻訳書出版社」の順に表記する。ただし、翻訳書の特定の章または項の担当者が書籍に明示されていない場合

は、章または項の題目の後の翻訳者名は記載しなくともよい。

例：American Psychological Association (2010). *Publication Manual of the American Psychological Association* (6th ed.). Washington, DC: American Psychological Association. 前田樹海, 江藤博之, 田中建彦 (訳) (2011). 第7章 引用文献の表記例. *APA論文作成マニュアル* (第2版) (pp. 209-250). 東京都: 医学書院

#### オンライン版で、DOI のある場合

・DOIがある論文の場合には、「著者名 (年号). 論文タイトル. 収載誌名, 巻(号), 開始ページ終了ページ.doi: 番号」の順に記載する。

例：Bouchoucha, M., Mary, F., Bon, C., et al. (2018). Sleep quality and functional gastrointestinal disorders: A psychological issue. *Journal of Digestive Diseases*. doi: 10.1111/1751-2980.12577

#### オンライン版で、DOI のない場合

・デジタルオブジェクト識別子 (doi) がない論文の場合は、「著者名 (年号). 論文タイトル. 収載誌名, 巻(号), 開始ページ-終了ページ. URL」の順に記載する。

例：太尾元美, 坂下玲子 (2013). 高齢者の食形態を普通食へと回復させるためのケアの方略の抽出. *兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要*, 20, 41-53. <http://lib.laic.u-hyogo.ac.jp/laic/5/kiyo20/20-04.pdf>

Prather, A., Janicki-Deverts, D., Hall, M. H., et al. (2015). Behaviorally assessed sleep and susceptibility to the common cold. *Sleep*, 38, 1353-1359. doi:10.5665/sleep.4968

#### ウェブサイトなど、逐次的な更新が前提となっているコンテンツを引用する場合

・ウェブサイト上の資料の場合は、「著者名 (公開日). 資料の題目. ウェブサイト名. URL」を記載する。公開日については、そのページの公開された時期が月日まで示されている場合は、日まで記載する。また、本文中においても公開月日までを記載する。

・閲覧日の記載は不要とする。

例：American Psychological Association (2018). What is APA Style? American Psychological Association. <http://www.apastyle.org/learn/faqs/what-is-apa-style.aspx>

厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課母子家庭等自立支援室 (2017年12月15日). 平成28年度 全国ひとり親世帯等調査結果の概要. <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11923000-Kodomokateikyoku-Kateifukishika/0000188136.pdf>

#### 学位論文など

・「著者名 (授与年) 題目 (未発表の●●論文). 大学名, 所在地」を記載する。

例：推名花蓮 (2017). クローンによるヒトの複製に関する世論 (未発表の修士論文). 平成看護大学, 兵庫県

・英語で書かれた学位論文の場合には、「著者名 (授与年) 題目 (Unpublished master's thesis, doctoral dissertation.). 大学名: 所在地」を記載する。

例：Li, Q. (2011). Feature-based versus space-based access to internal representations in visual working memory (Unpublished master's thesis). Kyoto University: Kyoto.

#### 附則

この要綱は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成26年8月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成27年10月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成29年2月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成30年3月1日から施行する。

附 則

この要綱は、令和元年10月2日から施行する。

附 則

この要綱は、令和3年6月2日から施行する。

附 則

この要綱は、令和4年6月15日から施行する。

## 編集後記

紀要の編集にあたり、研究成果の投稿、査読をはじめ、業績一覧の提出など、ご協力いただきました関係教職員の方々に深く感謝いたします。丁寧な複数回の査読と、数回の編集会議での討議を経て、最終的に総説3編が採択となり、業績一覧も合わせて、紀要第31巻を発行することができました。論文の投稿数はやや少なかったものの、大学院生や学部生からの投稿もありました。大学の紀要は論文投稿の経験の少ない若手研究者の研究成果発表の場を提供するという役割も有していると考えられます。今後も、幅広い領域からの研究成果の投稿を期待いたします。

(上村 浩一)

### 「兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要」編集委員

(明石地区学術情報委員会)

上村 浩一      川崎 優子      本田 順子  
島村 珠枝      安田 温子      横井 美由貴

---

兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 第31巻  
令和6年3月

発行者：兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所  
住所 〒673-8588 明石市北王子町13-71  
TEL (078) 925-0860

印刷所：神戸カムテクノ株式会社

---



Volume 31 March 2024

---

*University of Hyogo*

*College of Nursing Art and Science &*

*Research Institute of Nursing Care for People and Community*

*Bulletin*